
異世界で過ごす日々

h o z

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界で過ごす日々

【Nコード】

N9118W

【作者名】

hoz

【あらすじ】

さつきまで卒業式の真っ最中だったのに、突如として異世界に來てしまった。主人公こと橋本隆也は、魔法なんてもののある異世界での生活を通して学び、成長していく。なかなか弱い上に、それほど賢い訳でもない主人公が異世界で頑張ったり頑張らなかつたりする、ギャグテイスト異世界トリップファンタジー。

少しでも良い作品にしたいので、酷評大歓迎です

序話

4月、とある公立高校で卒業式が行われていた。

校長が話をする中、退屈そうにする卒業生の中に俺はいた。校長の話など聞くわけもなく、あくびをして目尻にたまった涙を指で拭う。

俺は、別に優秀なわけでもなく目立つほど不良な生徒でもない、友達もそれなりにいたし、楽しい普通な生活は送れていた。

普通な生活に満足していた俺にとって、この後おこることがいいことだったのか、悪いことだったのかはわからないが、人生の転機であり、普通の生活の崩壊と呼ぶにふさわしい出来事だったことはたしかだろう。

まあ、この時の俺は、何が起きるかなんて考えもせず、あまりの退屈さからくる睡魔に打ち倒されてしまった。

そして、意識が戻った時に見た光景は俺の全く知らない光景だった。

序話（後書き）

どうも作者のh o zです

今回は自分の小説を読んでいただきありがとうございます

更新は可能な限り頑張る所存ですので、どうかよろしく願います

第1話 TKGって今頃言わないよね

周りでは爆破音が轟き、人が倒れている。戦場であると判断するには十二分な条件がそろっているが、頭がそれを拒否し続ける。

平和な日々を日本で暮らしてきた俺にとってそれは信じられるものではなかった。しかし、なによりも一番不可解なのは……

目の前でいつまでも校長こと富井康安寺源十郎とみいこうあんじげんじゅうじゅう、略してTKGが話し続けていることだ。

このおっさんは周りが見えていないのだろうか？ とにかく、こんなおっさんに気を使っている暇はない。

許せ、TKG俺は逃げる、恨むならこんな状況下に俺らを置いた誰かを恨め。

俺はほとんど感じていない罪悪感を胸に、姿勢を低くし走り出した。

その直後、背後で爆発が起こり、俺の体はその爆風によって吹き飛ばされ、数メートル程地面を転がった。

俺は、軽くひざが痛むが、走るのに問題がなさそうなことを確認し、立ち上がる。

その時ふつと気になり、TKGの居たあたりを見ると、地面には爆破による窪みがあるだけで、TKGの姿はどこにもなかった。

「TKGいいいーーーー！！！！」

TKG俺は泣かないよだって・・・あんたのことよく知らないもん。叫んだのは…あれだ、うん、ノリ、混乱状態に陥って何を考えているのかすら軽くわからない状態なんだからノリで何か言ってもおかしくない。

とにかく、TKGの二の舞にはなるまいとして、俺が走り出そうとしたとき、俺を誰かが呼び止めた。

「おい、おまえ。なぜここにいる」

声のしてきたほうに顔を向けると、いまどきは映画の撮影でもなければつけないような鉄兜に革製であろう胸当て、明らかに時代錯誤な中世でもイメージしたかのような服を着た男がいた。

周りを見ても他に誰もいないので、『俺のことか?』と聞くかのように、自分のことを指さすジエスチャーで尋ねた。

「そうだ、お前だ、ああーめんどくさい、ちょっと来い」

言葉通りめんどくさそうに、そう言う男は俺の腕を引っ張り、丸められて筒状になった紙を懐から取り出す。その紙を広げ地面に置くと紙は光りだし、俺はその光のあまりの眩しさに目をつぶってしまった。

「あれ、なんで?俺いままで……」

周りの景色はさっきまでの荒野ではなく、石造りの建物の屋内の一室に変わっていた。俺はさっきまで何もない野外の荒野にいたはずなのに、今は屋内にいることに困惑する。

「ほらこつちだ、ついてこい」

俺は今どこにいて、何が起きているのかも理解できないので、ただただ従うことしかできなかった。

男に連れられて歩くこと数分、ある部屋へと案内される。

「演習場内に紛れ込んだ、民間人と思しき少年をつれてきました。」

なるほど、さっきのとは演習場だったのか、演習場ねえ、演習場……

「演習場！？」

明らかに人が倒れていた場所を演習場だと言われたので、俺は驚く。

「何をそんなに驚いてるんだ？」

「いやだって演習なのにおもいきり人倒れてたじゃん！！」

「ああ、あれは人形だ」

人形……？　なんだか動いてたのがいたような気がしたのは気のせいだったのか……？

「おい、その兵士、余計なことば言わないでいいから下がっていろ」

目の前でこの兵士の上官に当たるであろう人物が言葉を発した。

「ああ、すみません、んじや失礼します」

俺を連れてきた男は、やる気がまるでないかのように適当に返事をして、俺を置いてどこかに行ってしまった。そして、残された俺

の前には、偉そうなガキが護衛を連れて佇んでいた。

顔はさっきの男よりも大きな兜をかぶり、口元も布で隠しているために確認する事は出来ない、鎧は無駄に豪華で機能性があるのかどうかも怪しい。

「おい、お前なぜあのような場所にいた？」

それを知りたいのはこっちであるが、あえてこの質問に答えるとしたら『気が付いたらいた』であろう。しかし、そんな答えをして許してもらえような雰囲気でもなさそうだ。道に迷ったにしては危険なところにいるのはおかしい。俺がよほどの死にたがりなら喜び勇んで侵入するかもしれないが、俺はそんなことをするような気違いだと思われて精神病院送りにされるのはごめんだ。さて、何と答えたらいいものやら……

「答えられないような理由でもあるのか？」

「そんな理由はない……です」

うん、ここは正直に言ってもいいだろう、実際何も理由がないから困っているんだし。

「ならば、なぜ居た？」

またここに戻るんだな、このままじゃ、らちがあかないし、正直に答えて反応を見るとするか。

「気が付いたらいました」

その言葉を聞いてそのガキがため息をつく。

「嘘をつくなら、もう少しまともな嘘をつけ、あの場所はそんな簡単に忍び込める場所などではない、ましてや、気が付いたらいたなどあり得るはずがなかるう」

正論だ、こんなガキに正論を言われてる俺って……でも、気が付いたらいたのは事実だ、そこはどうしようもない、しかし信じてくれないとなるとどうすればいいか……

「話す気がないのならばよい、持ち物を出せ、確認する」

ガキがそう言うと同時に護衛のおっさんが、お盆らしきものを持っておれの目の前にやってきた、どうやら、この上に置けということらしい。

俺はポケットをあさり財布、定期入れ、チャリの鍵、ガム、そして携帯電話をお盆の上に置いた。

「見たことがないものばかりだな。財布の中の通貨も見慣れぬものであるし、いったいどの通貨だこれは」

ガキは財布をあさり不思議な顔をしながら、今度はガムに手を伸ばした。

「これはなんだ？」

「ガムです」

なぜこんな当然のことを質問するのはわからないが、とりあえずはまじめに答える。

「ガム？ 聞いたことがないな、いったい何に使うのだ？」
「食べるんですよ」

ガムを知らんとは一体どんな世間知らずだよ。

「では貴公、食してみろ」

そういうと、護衛がガムを持ってきたので、俺は一粒を包装紙から取り出して口の中に放り込み、噛み始める。

「いつまで噛んでいる早く飲み込め」

「いや、ガムは飲み込まずにいつまでも味わうもんですよ？」

ガムは飲み込んでも問題ないとは聞いたことがあるが、それでも飲み込むのは遠慮したい。

「そうなのか、なら口の中に入れたそれはどうするのだ？」

「吐き出しますけど？」

「一度口の中に入れたものを吐き出すと？」

まるで変なものでも見るような目でガキは俺のことを見つめてくる。

「はい、そうですけど？」

「何とも、不可解な食い物だ」

そう言いながら次に、ガキが手にしたのは携帯だった。

「これはなんだ？」

いぶかしげに、携帯を持ち上げたガキは、携帯を開き、声を上げた。

「な、なんだこれは!？」

ディスプレイが光ったことに驚き、ガキは声を上げる。

「携帯ですよ」

やれやれといった感じで俺は一応答える。

「ケータイ？」

ガムを知らないからこれも知らないだろうとは思ってたけど、驚いた拍子に、携帯を床に落とすのは勘弁してほしい。

ガキは床に落とした携帯を、恐る恐る拾いあげる。なんだか小声でぶつぶつと、いいながら、しばらく眺めていたが、理解するのを諦めたのか、携帯を閉じてから、口を開いた。

「ふむ、とりあえずわかったことを話すと、お前、この国の人間ではないだろう？」

いかにも自信ありげに、ガキはそう言い放つ。

「ここがどこだかわからないから、何とも言えないですね」

もしここが日本なら、俺はこの国の人間だし、違うのならば俺はいつの間にか誘拐でもされたとしか考えられない。

「ここは、コーランド王国が首都ソリユードであるぞ」

あー、地理はあんまり得意じゃないんだよ、ヨーロッパかな？
まあとりあえず、日本じゃないんだな、なんとなくは予想してただ。

「じゃあ、自分はこの国の人間じゃないですね」

俺は、嘘をついてもしょうがないので正直に答える。

「では、とりあえず不法入国として扱ってよいな」

そのガキの決めつけるような言い方に対して、俺はとっさに反論する。

「いや、たぶん誘拐されたんじゃないかと」

我ながら、よくここまで冷静に対応ができるものだと思う、おそらく最初のインパクトがああ爆撃だったからだろう。

「言い分は、明日聞くとして、とりあえず、今日は牢屋の中で過ごすといい」

牢屋というなんだかいやな単語に対して俺は反応する。

「ちよつ、ちよつと待ってくださいよ、勝手に連れてこられただけなのに牢屋って」

「拉致されたのならどのみち行き場はないのであろう？なら、牢屋の中にいたほうがまだよいのではないか？」

ああ、確かに牢屋なら少なくとも雨風は防げるし、飯も食えるだろう。なんだよこのガキ意外といいところあるじゃん。

「じゃあ、お世話になりまーす」

ちよつとだけガキの優しさを感じて軽く笑顔になる。

「笑みを浮かべて牢屋に向かうやつなど初めてだ」

ガキは眉を顰め、変なものでも見るような視線を向けながらそう言い放つ。別に、牢屋に行きたいわけじゃないけど、ここはめんどくさいから黙っておこう

「とりあえず、荷物を…」

荷物を返してもらおうと思いい口を開くと、俺の言葉をさえぎってガキがしゃべりだす。

「荷物は預かっておく」

俺はガキを引き留めて返してもらおうとするが、ガキは護衛のうちの一を残してどこかに行ってしまった。

俺はそのあと、護衛のおっさんにつれられて牢屋の中にぶち込まれた。

第2話 大胆すぎるプリズンブレイク

俺は、特に手枷などをされるでもなく、意外と自由な恰好で牢屋の中へと入れられた。

簡素なトイレと机、ベッドがあり、思っていたより豪華だったことに少し喜んだが、そんなことよりも気になることがあった。この牢屋、二人部屋だったのだ……

ここは話しかけるべきだろうか、でも相手は毛布にくるまって、俺がこの牢に入ってからピクリとも動かない。明日には、事情を説明して解放されるんだろうから、わざわざ関わることもないかと思ったその時、突然男がムクリと起き上がり、顔をこちらに向け、話しかけてきた。

「ん、新入りか？」

その男の金髪は、ぼさぼさで肩まで伸び、顔は少しやせ気味で無精ひげが伸び、衛生的とは言えない格好で、見た目30代前半くらいだろうか？ 今は寝起きで寝ぼけているのか瞼は半開き状態だが、その双眸はきれいな青色をしていた。

「はい、今日入りました」

たとえ牢屋の中だろうと、目上の人には最低限の礼儀をわきまえないといけない。特にここではお互いに手錠もしていないので、相手が凶悪ならば、ここを出る理由が、同室の男の機嫌を損ねて死体になったからになってしまう。

俺が返答したのち、しばらく俺のことを見定めるように見ていたその囚人は、眉間にしわをよせ、尋ねてきた。

「兄ちゃん、身なりも悪くねえし、礼儀もなってる、とてもこんなところに来るような人間にはみえねえがいったい何やったんだ？」

俺は、気が付いたら不法入国扱いにされていたことを告げ、今の状況を言葉にしたことにより頭の中が整理され、大きな疑問が浮かんだ。

なぜ言葉が通じるんだ？

ここが日本でないとしたら、明らかにおかしい。

日本語を母国語にしているのは、日本だけなのだから、ほかの国でここまで流暢に話ができるはずがない。

俺は、結果としてある考えにたどり着く。

そしてその考えは、思わず口からこぼれた。

「なんだ、夢か」

「ん、なにかいったか？」

あいにくもう一人の男はさっきから自分の机のあたりでガサゴソ何かをしていたので、きこえなかったようである。

全くを持って、ここまでリアルな夢を見たのは生まれて初めてである。まあ、醒めない夢はない、そのうちこの夢も終わりを迎えるだろうなどと楽観的な考えに基づいてのんびりしようとベッドに転がった時、夢の住人Aこと囚人が話しかけてきた。

「そうだ、名前聞いてなかったな、俺の名前はスキップってんだ」

この名前も俺の夢ということは俺のセンスなのであろう、まったく自分のセンスを疑うぜ。

「ああ、橋本隆也です、よろしく」

夢の住人に、つい敬語を使う俺ってどうなんだろう？

相手の差し出した手を握ろうとして、動いたときに、爆風で飛ばされた時に怪我をした膝に、鈍い痛みが走った。

「あれ、痛い？」

俺のその言葉にスキップが反応する。

「なんだ、どうした？」

おかしい、これは夢だ、痛いわけがない、それにもし夢じゃないとしたら、つじつまが合わない。

しかし、そんな俺の考えとは裏腹に、これが現実であると訴えるかのように、膝の痛みは消えることはなかった。

さっきからどれほどの時間がたったのかわからない、気分にしてみれば何時間も考えにふけているような、そんな気さえする。

次第に落ち着き始める頭で、状況を確認するがいくら考えてもわからない、ただ一つ分かったのは、これが夢ではないだろうということだけであつた。

「おい、大丈夫か？」

混乱する俺にスキップが声をかける。

「何か言ったか？」

混乱していてよく聞き取れなかったので俺は聞き返した。

「さっきから急に固まって、どうしたんだ？」

スキップは不思議そうに尋ねてくる。

「あ、いやなんでもないです」

俺は、ぎこちない笑顔とともにそう答えた。

「そうか、ならいいんだ、じゃあ、いきなりで悪いんだが――」

俺はその時、ものすごく悪い予感しかなかった。

「――脱獄しないか？」

俺はその言葉を聞いて、やっとのことで口にできた言葉がこれだった。

「あんたはバカか？」

失礼なことは分かっている。しかし、どう考えても馬鹿だ、罪を犯していないのに脱獄なんかしたら、何かやましいことがあると思われる後々めんどくさいことになるだろう。全くの無実である俺が、

なぜそんなことをしなきゃいけない。

ただでさえ混乱しているのに、さらに混乱させようとしてくる。いつをどうすればいいのか非常に悩ましい。

「いいじゃねえかよ、ロマンがあるだろ？」

「断る」

ロマンを求めるなら一人でやってくれ、俺はそんな危険な生き方にあこがれたことはない。

「しょーがない、じゃあ俺一人で行くわ」

そういい鉄格子のほうに、歩き出したスキップは特に、鍵やピッキングの道具を持っている様子もない。いったいどうするのかと思ひ眺めていると、スキップは鉄格子を蹴りとばした。

蹴られた鉄格子は、はめ込み式だったらしく向かいの壁に衝突し、派手な音を立てる。

まさかこの世にここまで大胆な脱獄法があるとは思わなかった。

「じゃあなリユーヤ、無実が晴れることを祈ってるぜ」

そういつて駆け出したスキップを、突如として壁から噴き出した炎が包み込む。

俺は、突然の出来事にただただ呆然とすることしかできなかった。

「あっちー」

そういいながら、炎の中からスキップが飛び出してきた。

「なんで生きてんだよ!？」

「ん? どうした?」

まるで何を言っているんだといった顔をしてこちらを見てくるスキップ。

「今、完全に燃えてただろ!？」

「うん、熱かった」

スキップはまるで大したことがなかったかのように言い放つ。

「熱かったで済むか!？ ふつつ焼け死ぬだろ!？」

「おいおい、あの程度じゃ俺の野望（脱獄）は止められねえぜ?」

ダメだこいつバカだ、そしてバカだ、圧倒的なバカだ。

「まあ、さすがにずっとあんなの耐えるのはきつそうだから、一旦作戦練り直すわ」

そういつて、スキップは自分で蹴り飛ばした鉄格子を持ち上げ、はめ込み、何もなかったかのようにベッドに寝転ぶ。しかし、鉄格子の蹴った部分が明らかに変形しているので偽装する意味があるのかどうか。

しばらくして、石造りの廊下を歩くコツコツという音が聞こえ、その音は徐々に大きくなり、その音の発信源は俺の牢屋の前で止まった。

「罖に反応があるから来てみれば、またお前か」

おそらく看守であろうその男は、あきれたように言い放ち、ゆがんだ鉄格子を見ながら、あーあなどつつぶやき始めた。

「おいおい、おやっさん、俺がやったっていう証拠でもあるのかよ？」

「10日に1回は脱獄しているくせに、今更とぼけるなよ」

こいつ10日に1回くらいのペースでこんなことやってんのか、少し看守のおっさんが哀れに見えてきた。

その後も、スキップの言い訳は続き、それに呆れた看守のおっさんは、もうやるなよとだけ言って去っていった。

「リユーヤ見たか、俺の巧みな話術で看守をだまして見せたぜ」

今のどこがだませていたのかわからないが、何か言っても騒がしくなるだけなので、俺はうなずきベッドの中にもぐりこむ。それと同時に、スキップに対しての敬意を捨てた。

その後運ばれてきた、パンとスープだけの晩飯を食い終わり、ベッドの中にもぐりこみ、俺は今日起こったことや明日の質問のことを考えているうちに自然と眠ってしまった。

第3話 尋問の時かつ井出しちゃいけないらしい

「おいリユーヤ、起きろ、朝飯だぞ」

「あと少し……」

俺は聞きなれない声に対して返答をし、徐々に覚醒し始める頭で今の声の主を考える。それがだれの声なのか気づいたところで、俺は完全に覚醒する。

体を起こして、まわりを見渡すが、やはり昨日の牢屋の中であり、これが夢でないことが確定する。そんな事実、落ち込む俺に、スキップが話しかけてきた。

「ほら、お前の分の飯だ」

「ああ、さんきゅ」

どんな状況であろうとも、人間、腹は空くものでとりあえず朝食を食い始める。量は大したことないので数分で食い終わってしまった。俺は、また机で脱走計画でも考えているのである。スキップをよそに、どんな質問をされるのだろうか、などと一人考えを巡らす。

俺がそれを考えるのにも飽きてからある程度たったところ、俺らの牢の前で看守が立ち止まる。

「おい、そっちの黒髪の少年、事情聴取だ」

俺は、ついにこの時が来たかと意気込み、開けられた鉄格子の扉をくぐる。その時に、スキップが頑張れと声をかけてきたので、軽く返事をし、看守の後について行った。

しばらく歩くと、看守は一つの扉の前で立ち止まった。おそらくはこの部屋で取り調べを行うのであろう。

扉は鉄製で、のぞき窓となるには、向こう側からだけ開けられる仕組みになっていて、鉄格子がはめられている。

「不法入国の容疑で投獄中の少年を連れて参りました」

スツと、のぞき窓が開き、確認をすると入るように言ってきた。

俺は看守につれられてその部屋にはいり、周囲を観察する。石造りの壁の高い位置に窓が一つ、あとは机と椅子、そして入口の反対側に座っているのおそらくは昨日のガキであろう人物を確認した。

看守は俺を部屋に入れるとそのまま帰っていき、俺を取調べするであろう男性が椅子に座り、俺に机を挟んで反対側の椅子に座るよう促した。

「さて、まずは名前を教えてください」

取り調べというので、もっと荒々しい感じで来るのかと思っていたが意外と優しい感じで話しかけられたことに安心感を覚える。

「橋本隆也です」

「なるほど確かにこの国では聞きなれない名前だね、じゃあ君のファーストネームはハシモトでファミリーネームはリユーヤでいいのかな？」

「あ、逆ですファーストネームが隆也でファミリーネームが橋本です」

ついつられて、ファミリーネームとか言っちゃったよ。

「なるほど、名前の文化も違つとなるとかなり特殊な国の出身かな？　ちなみに出身は？」

日本で、特殊なんだろうか？　まあ、特殊と言われればそんな気もするが。

「日本です」

「うーん、聞いたことがない地域名だね」

なに？　日本を知らないだと？　日本って有名だと思ってたが違つたんだろつか……

「次に年齢を教えてもらってもいいかな？」
「18です」

聞いた情報を紙に書き留めていたその男性は、しばらく手元においてあつた紙を読んでから話しかけてきた。

「入っている情報だと、演習場には気が付いたらいたって話だけど本当かな？」
「本当です」

嘘をつく必要はない、すでにそのことは後ろでだまってこちらを見ているガキに話している。

「なるほど、じゃあ昨日後ろの人に話したことは全部本当なんだね？」

「はい」

「まいったな、まさか本当だとは……」

ん？ どうしたんだ？

「何かまずいことでもありましたか？」

「いやー、そのことが本当だったことがわかってしまったから困っているんだ」

どういうことだ？

「はは、まだわかってないようだね。僕は洞察の属性の持ち主で嘘を見抜けるんだよ」

洞察？ 属性？ なんのことだ？

「まあ、晴れて君の無実が証明されたわけだよ」

なんかよくわからないが、もつときつく取り調べられると思ってただけに拍子抜けしてしまったと同時に、無実が晴れて安心する。

「じゃあ、後の話は僕じゃなく後ろの彼女に頼むとするよ」

なるほど、後はあのガキと話せてことだな……彼“女”？

「女だったのかー！！！」

完全に男だと思ってただけに、驚きのあまり叫んでしまった、反

省している。

「女だったら悪いのか？」

ガキが不機嫌そうな声を出す。

「あ、いや悪くはないです」

むしろ勘違いしててごめんなさいって感じた、でもその胸じゃ……
おっとこれ以上失礼なこと考えちゃかわいそうだな。

「まあ、よい」

そういつてガキ……もとい少女は、男と入れ替わるように、俺の向かいに座った。

「じゃあ僕はこれでお暇させてもらうよ、後の仕事がつかえてるんでね」

「うむ、感謝する」

男が部屋を出たのちに、目の前の少女が話しかけてきた。

「まずは自己紹介と行こうか、私の名はエリス・ファンデル・フオン・グランツ。グランツ家が次女にして現在は、この第7演習場の指揮官補佐をしている」

あ、どうもと軽く返事を返すと、なんだかいぶかしそうな目で俺を見つめてきた。俺何か悪いことでも言ったんだろうか？

「とりあえず、これが今回押収していた品だ」

そういつて俺の持ち物を袋に詰めてよこした。

「まず今回の件に関してだが、拉致被害者として本国に送り返すのが本来のやり方である」

うん、これで俺は帰れるわけだな。

「しかし」

え、なにかあるの？

「我々は日本という場所を知らぬゆえに送りかえすことができない」

「え、いや、調べれば……」

「すでにお前から聞いたときに調べたが我が国に日本という場所の情報は一切ない」

え？ どうゆうこと？ いくらなんでもそりやないだろ？ てか調べた素振りなかったじゃん？

「せ、世界地図ありますか？」

「待っておれ」

そういつと、しばらくして丸めた紙を持った男がやってきてエリスにそれを手渡した。

「これが世界地図だ」

そういつて広げられた地図に乗っている地形は俺の知っているものとはかけ離れていた。

「うそ、だろ？」

「嘘でも偽物でもない、これは本物だ」

ここで俺が昨日寝る前に思い付いた、最もありえないと思い一瞬で笑い飛ばした考えが最もありえるものになってしまった。

——俺はいま異世界にいる

もしそうなら、どんなありえないことも説明がつく。なによりも異世界に来たなんてことが一番ありえないのだから。

「なにか思うところがあるようだが、話を進めてもいいか？」

その一言で俺の意識は深い思考の海から引き戻される。

正直な話まだ納得はできていないが、こんなことが起きたのなら生きるために何かをしなければいけない。

「あ、はい」

「今回は送り返す先がわからないので、特例として貴公を我が国の国民として受け入れようかと思う」

「え、そんなことできるんですか？」

「本来ならばありえないが、担当者が私であり特例と認められるに十分な材料はある。まあ、そのための準備もあるゆえに少しばかり時間がかかる。それまでここには泊まる場所が、牢獄しかないのでもそで過ごしてもらふことになるがかまわないか？」

「はい、全く気にしません」

「では、取り急ぎ準備をするので再び牢の中で待っていてくれ」

俺は、昨日いやな奴だと思ってたエリスに感謝しながら部屋を後にした。

生きるすべが見つかった、それはおそらく異世界に来たという特殊条件下ではかなりいいことであろう。しかし、まだ希望は見えたとしても周りは分らないことだらけである不安がないといえはうそになるが、今はとりあえず喜んでおこうと思う。

看守につれられてまた牢の中に戻った俺は、スキップにどうなったかなどを聞かれそれに答えた。

「へー、じゃあお前ほんとになんもしてなかったんだな」
「してないって言ったよな、信じてなかったのか？」

そういうとスキップはうなずき笑いながら話し続ける。

「まあ、よかったじゃねえか」
「そういえばスキップは何でつかまったんだ？」
「ああ、不法侵入だよ、一回脱獄っていうのがしてみたくて牢屋に侵入したら、そのまま捕まっちゃった」

そういいながら笑うスキップと呆れる俺。なんだか昨日から呆れさせられてばかりだなと思いつながら、その後もスキップのばかな話を聞きその日はすごした。

第4話 天国と牢獄

あれから数日がたった、しかしいまだに俺がここから解放される様子はない。今頃日本の友達はどうしているかなどと考えながらベツドの上でのんびりと過ごし、時々スキップのばかな話を聞く、そんな日々が続いていた。

意外なことに異世界に来たことはすんなりと受け入れられた、両親は今頃搜索願いで出しても大変かもしれないが、今の俺には帰るすべがない。

まあ、そのうち帰れるなら帰ろうとは思うのが、俺が考えるにそんな簡単なことではないだろう。よって、こっちの世界でのんびり暮らしつつ帰る方法を探そうと思うのだが、まず牢屋から出れないことにはどうしようもない。

いつものように昼飯が運ばれてきたとき、昼飯を運ぶいつもの人とは別にもう一人いることに気が付いた。

「ハシモトリユーヤというのは君のことかい？」

そのもう一人の男性は、顔にはきれいに整ったひげが生え、背は180cmほどで年は40くらいであろう。金髪は肩より少し下まで伸び先のほうがまとめられており、眼は緑色をしている、いわゆる金髪碧眼というやつだ。

「はい、そうですか」

彼がなぜ、おれの名前を知っているのかを不思議に思いながらも

返事をする。

「どうも、私はエリスの父のレインだ」

なるほど、あいつの父親か。でもなんでこんなところに？

「エリスが君の国籍の申請をとってくれるといっただろう？」

うん、確かに言われた。何の音沙汰もないもんだから忘れられてないかと心配になってたところだ。

俺はその問いに対し首肯で返す。

「実は、国籍を得るために君を預かってくれるところを決めなければいけないってね」

なるほど、俺は居候をしなきゃいけないわけか。

「それで、あちこちに掛け合ってみたんだが君の情報を出すところも首を縦には振ってくれなかったみたいなんだよ」

そりゃ突然居候させてくれるようなところなんてそうそうないよな。

「その場合どうなるんですか？」

「このままでは国籍は手に入らないからここから出てもらうわけにもいかないんだ」

そいつは困った。このままだと一生牢獄暮らしじゃねえか。

「え、じゃ……」

「まあ、もう少し聞いてくれ」

まだ何かあるようなので、とりあえずは聞いてから判断しようと思ひ、俺は静かにレインさんのほうを見る。

「それで、君をうちであずかろうと思つのだがどうかね？」

その言葉を聞いて叫んだ。

「何——！！」

ちなみに叫んだのはスキップだ。

「スキップ静かにしてくれ」

俺にとつては死活問題なので少し静かにしてほしい。

「だつてお前こいつ、じゃなかった、この人つて……」

なんだか齒切れが悪い感じでスキップが何か言っているが、俺は諭すような口調で話しかける。

「もういいから少し静かにしてくれ」

俺は話の途中で突然叫んだスキップを黙らせ、再びレインさんのほうに向きなおる。

「いいんですか？」

俺の問いに対してレインさんは笑顔で答える

「ああ、君さえよければ」

「よろこんで」

これで俺の異世界生活がスタートできる。

そんなことを考えていると、さっきまでぶつぶつとつぶやいていたスキップが話かけてくる。

「まあ、よかったじゃねえか」

その言葉に感謝の言葉を述べ、お前も早くここ出るよ、などと軽口をたたいてみる。

レインさんの話だと、これからすぐにレインさんの家に向かうらしく、俺はスキップに別れを告げて牢の中を出た。

そのあと廊下を歩いているときに聞いた話だと、俺は名前はリユーヤ・ハシモトとして登録されて、晴れてこの国の国民になれるそうだ。

そんな説明を受けながら、歩いているとレインさんはある部屋の前で立ち止まりその部屋の中に入っていたので俺もそれに続いた。レインさんは何もないその部屋のまん中で立ち止まった。

「あの、この部屋は一体？」

そついつとレインさんは振り向き答える。

「ああ、いま転移の準備をするから待っていてくれ」

そういつてから数秒後、俺の足元には円とその中に幾何学的な模様の描かれた、いわゆる魔方陣が光の線によって形成される。徐々に魔方陣の光は強くなり、俺の体を包み込んだ。

あれ、この感じって前にも……そうだったしかあの演習場から突然移動したときの……

そうかこれが魔法ってやつなのかな、などと考えていると、俺はさつきとは全く別の場所にいた。

目の前に広がる風景を一言で表すならば“莊嚴”の一言に尽きる。

左右に伸びる高さ2mほどの白い壁、眼前に構える鉄格子の門。

そして、その奥に見える緑の芝生の中を走る真っ白な石畳の道、その途中には横に伸びる道や噴水まであるそしてその奥に見える家は細かな装飾の施された白い外壁、少し薄い色の青い屋根。

その家は、言い表すなら家というよりもお屋敷といった感じだった。

驚き、呆然としている俺の耳に初めて聞く声が飛び込んできた。

「おかえりなさいませ、旦那様」

その声の主は見た目50歳ほどであろうか、執事服に身を包み、銀色の髪は顔にかからぬようにオールバックにしており、立派なひげを生やしている。まさに絵にかいたような執事とでもいうのがふさわしいであろう人物が、そこには立っていた。

「クロン、わざわざ出迎えすまないね」

そうレインさんが言うと、クロンさんは軽く首を振る。

「いえ、とんでもございません」

「彼は以前から話していたリユーヤ君だ」

俺は突然紹介されたことにあわてながらも、なんとか自己紹介をし、それに対しクロンさんも返事をしてきた。

クロンさんはここで家令をやっているらしいが、俺は家令がなんだかわからない。

この後、門を抜けあの遠くに見える屋敷まで歩くのだろうと思っていた俺に予想外の出来事が起こる。

「じゃあ、クロン頼む」

「承知致しました」

クロンさんがさういうと、一瞬だけ目の前が明るくなり次の瞬間にはさつきまで遠くに見えていた屋敷の目の前にいた。

今までの移動と違うところとはにかく移動までの時間が短いことである。今までは全身が光に包まれて徐々にその光が消えたかと思うと別の場所にいたが、今はカメラのフラッシュのように一瞬だけ光が見えたとおもったら別の場所にいた。

まあ、そんな違いが何であるかなど分かるはずもない俺には、どうしようもないことである。俺もあれできないかなあゝなどと考えるながら、扉へ向けて歩き出すレインさん達に続いて歩き出す。扉の前まで来ると、扉をクロンさんが引いて開ける。

扉の奥に見えた光景に俺は驚いた。そこには映画でしか見たこと

のないような使用人たちが並んで頭を下げるなどという、怪奇現象並みにめずらしいものが待ち受けていた。しかもみんなで声を合わせておかえりなさいませってどんだけ統率のとれた集団なんだか。

「さあ、みなさん仕事に戻ってください」

そう、クロンさんが声をかけると使用人の人たちは散り散りにどこかに行ってしまった、クロンさん自身も一礼をしてどこかに行ってしまった。

そついや俺メイドとか見るの初めてだな、などと思当はずれなことを考えながらその玄関というかエントランスホールを見わたす。吹き抜けに大階段、天井からつりさげられたでかすぎるシャンデリア、すでに俺の住んできた世界との差異を感じすぎて気後れするとすら忘れてしまう。

「リユーヤ君、ここが今日から君の家となる場所だ」

そついつて話しかけてくれたがあまりの事態に俺はテンパってしまふ

「よ、よろしくお願いします」

緊張から少し早口になってしまった気がする。

「もっと楽にしてくれ。わからないこともたくさんあるだろうけどそれは徐々に解決するとして、まずは妻のところにあいさつに行こうと思うのだが」

当然俺は断るわけもなくレインさんについていく。

家の中での瞬間移動は使わないのかな、と考えながら歩いてい
るとある扉の前でレインさんが立ち止まりノックをする。おそらく
ここがレインさんの奥さんの部屋なのだろう。

「どなたですか？」

扉の向こうから聞こえてきた声はきれいな声だった。

「わたしだ」

そうレインさんが言つとまた部屋の中から返事が返ってくる。

「あら、どうぞ」

レインさんが部屋の中に入っていったので、俺も一礼をして部屋
の中に入る。部屋の中で椅子に座っていた女性は、腰のあたりまで
伸びた栗色の軽くウェーブのかかった髪、茶色の眼は優しげで、ど
ちらかというと垂れ目気味である。

それにしても、本当にレインさんの奥さんなのだろうか？ 20
代といわれても全く疑われないであろう容姿に軽く驚いてしまったが、
その落着きからは大人の風格があふれている。

「そちらが前から話していた方ですか？」

その女性は小首をかしげる。

「ああ、そうだ」

「橋本隆也です、よろしくお願いします」

俺はそんなありきたりなあいさつをする。実際何を言えばいいかなど分らないから仕方がない。

「レインの妻のアマリアです、よろしくねリユーヤ君」

アマリアさんはそういいながら微笑んでいた。

その後レインさんがアマリアさんに話があるというので、俺はいつの間にか現れたクロンさんにつれられて、これから俺が過ごす部屋へと向かった。

俺が案内されてきた部屋はまるで最高級ホテルの一室のようで、この部屋を一人で使っているのかという疑問さえ浮かぶほどに広かった。

クロンさんに大まかな部屋の設備の使い方などを教えてもらい、詳しい説明は後で部屋係のものが来るので、そのものに任せているということなのであった。

俺はすでに着替えもクローゼットの中に用意してくれているという話なので、とりあえず牢獄生活で三日に一回しか入れなかった風呂に入ることにした。

第5話 マナーはできることなら知っておいたほうがいい

「あー、いいお湯だった」

大理石の壁に、口からお湯を吐き出すライオンの飾り物、本当にここは自分の使う部屋なのだろうか、などと考えながら体をタオルで拭いていく。着替えを取るためにクローゼットを開くと、中には豪華そうな服がずらりと並び、気兼ねなくきれそうなのはYシャツのたぐいのものくらいである。

若干気後れしながらも何も着ないわけにはいけないので、その中で一番質素な黒色のズボンと白のYシャツを着て、特に何をするでもなくベッドに転がった。

ベッドの上でボーっとしていると、ふと思いつき携帯を取り出す。しかし、当然のごとく圏外なのを確認すると、携帯の電源を切り再びポケットにしまった。

――俺が元いた世界では、何の変哲もない毎日を過ごしていた。

朝起きて、ダイニングにいる両親と2つ下の妹にあいさつをして飯を食べる、平日なら学校に行き、友達とバカな話をしたり勉強がわからず困ったりしながらすごす。

夜は帰りの遅い両親の代わりに晩飯を作り妹と食べる、晩飯の時は特に妹と悪いわけでもないから、食事中は共通の趣味の話などをし、免許を取ってから友達と遊びに行くから車出してなどと頼まれたりもした。

そのあとは宿題なりなんなりをしてすごし就寝、また次の朝が来る、こんな普通の日常が俺にとっては楽しく、大切なものだったのだ。

と今になって気づかされる。

みんなは今頃どうしているだろうか？　きっと友達や家族は突然消えた俺のことを心配してくれているであろう。

そつえば大学は受かっただろうか？　受かっていてもどうしようもないが一応がんばって勉強したのだから受かっていたらいいな。

ああ、なんで今、俺はこんなところに……

俺はノックの音で目を覚ました、どうやらいつのまにか寝てしまったようだ。

「あ、どうぞ」

「失礼します」

扉の向こうから聞こえた声は女性のものであり、俺は緊張し、なぜか気を付けの姿勢で扉が開くのを待った。

扉を開け入ってきた人物は、髪はショートで色は水色、目は海のように澄んだ青色をしており、その服装はいわゆるメイド服を着ていた、歳はおそらく俺とさほど差はないだろう。

「リユーヤ様の部屋係に任命されましたミリイと申します、以後お見知りおきください」

ミリイと名乗った女性はそついいながら頭を下げる。

「こ、こちらこそ」

まさか女性が部屋係になるなんて思ってた俺は少々戸惑ってしまった。

その後、毎日の基本的な生活リズムなどを細かく教えられたが、そんなのをすべて覚えれるわけもなく何度か聞き直しついにあきらめた。

「では、何か質問等はありませんか？」

「いや、特にはないかな」

俺はミリイの敬語に堅苦しさを覚えながらも、これから慣れていけばいいかなどと思いながら、心の中で苦笑する。

この後すぐに夕食だということで、おれはミリイに連れられて部屋を出た。

俺が連れられてきた部屋は俺の予想していたとてつもなく長いテーブルなどではなく、普通の家庭にあるものより少し大きいくらいのサイズであった。

すでにレインさんとアマリアさんは座っており、俺はミリイに案内された席へと着く。

俺が席に着くとミリイは一礼して部屋を出て行き、それを視線で見送った俺はまだ空いている席の人物を待つ間に、テーブルマナーってどうだっけなどと考える。

それから1、2分ぐらいして、部屋の扉が開く。

部屋に入ってきた女性は、髪は明るい茶色でストレート、長さは背中の中ほど辺りまで伸び、目の色はアマリアさんと同じ色をしている、歳は俺と同じか少し上くらいであろう。その立ち振る舞いは、

いかにも御令嬢といった気品のある物腰であるが、その雰囲気は柔らかなものでありなんとなく親しみやすさを覚える。

「ライラ、そこに座っている青年がリユーヤ君だ」

レインさんにライラと呼ばれた女性は俺のほうを向く

「どうも、長女のライラです」

ライラはそういうと、スカートをすつと摘み貴婦人の礼をする。
俺も自己紹介をし、軽く一礼して再び席に着いた。

レインさん曰く、まだ一人来ていないらしいのでその間に、俺は思い出せないテーブルマナーを必死で思い出そうとする。

それから5分ほどたった時、突如として扉がすごい音を立てて開いた。

「なんとか飯の時間には間に合ったか」

入ってきた男性は髪は栗色のショート、目も茶色をしており顔はイケメンで、なんとなく体育会系の雰囲気をもっている。おそらく走ってきたのだろう、肩で息をしながらテーブルの空席に向かう。しかし、途中で俺の存在に気づくと、満面の笑みで俺へと歩み寄ってくる。

「お前が噂の居候か、俺グレイってんだよろしくなりユーヤ」

そついいながら、グレイは俺の背中をバンバンと叩く。

「よ、よろしく願いします」

背中が少しひりひりする。なんとか笑顔を作ったが、おそらくはひきつった笑顔になっていただろう。

「そういえば、何で名前を知っているんですか？」

「ああ、親父から聞いた。そんなことよりもっと気楽に行こうぜ、敬語なんかやめてさ」

グレイのは少しばかり軽すぎやしないか、などと思いながらまた苦笑いを浮かべていると、レインさんが口を開いた。

「グレイもうそれくらいにして席に着きなさい」

いつまでも俺に絡んでいるグレイをレインさんがたしなめる。

「へいへい」

グレイは軽く手を振って自分の席に着く

「リユーヤ君悪いね、グレイも悪気はないから許してくれ」

俺が背中中の痛みを気にしていることに気付いたのか、レインさんが苦笑いをしながらそう言うてくる。

「あ、はい、全然大丈夫です」

おそらくはこれがグレイの素なのだと思う、いままでなんとなくみんな緊張感を持って接していたが、グレイに関しては早くに打ち解けれそうだ。

その後、次々に運ばれてくる食事を、おぼろげな記憶を元に学校で学んだテーブルマナーを思い出しながら、なんとか食事を食べていく。

食事中の会話でライラは俺と同年、グレイは二つ上なことが分かった。

そのほかにもいろいろ言っていたがこの国のこととなると何一つわからず、俺のことについてもいろいろと尋ねられたので、できる限り頑張つて答えた。

食事は終わり、全員の目の前にコーヒーが置かれる。

食事の作法や食材も向こうの世界とほぼ変わりはないようで、わからないところは見よう見まねで何とか乗り越えた。

俺はゆっくりとコーヒーを飲みながら話を続ける。

「では、リユーヤ君の居たところでは魔法というものはなかったのかね？」

多少驚いているような口調でレインさんが尋ねる。

「名前として聞いたことはありませんが、実際に使っている人はたぶんいなかったです」

魔法などは空想である。それが当然であつた俺にとってはこの世界のほうが驚きである。

「じゃあ、リユーヤも魔法つかえねえのか？」

まるで使えて当然だといわんばかりにグレイが訊いてくる。

「うん、使えない」

そこで一瞬の沈黙、この世界では魔法は当然のものであり、生活するうえでも使っていくのが当然らしい。つまり、魔法がつかえないということはこの世界では異常極まりないのである。

沈黙を破るかのように、口を開いたのはアマリアさんだった

「では、よろしければ魔法を学んでみてはいかがかしら？ 今は学校は夏季休業中ですけどしばらくすれば始まりますし、それまでは我が家で教えますよ？」

魔法を使えるようになる。もし、魔法が使えるのなら使ってみたい、それが俺の本心である。

その後もその話は続いた、夏季休業中に編入試験に受かるように勉強をし、その後は学園で学んでもらうということで話はまとまった。

さっそく明日から勉強を始めるということなので嬉々として部屋に戻り、ベッドに入ったがなかなか寝付けなかった。

第6話 大学受験よりも頑張った気がする

俺が勉強を始めてからはや五日、魔法はおろか編入に必要なありとあらゆる教科をいまだに手を付けてすらない、それはある重大な問題が原因となっている。

――勉強開始日

俺はその日ノックの音で目を覚ました。

ああ、俺レインさんの家に住むことになったんだっけ。

目が覚めて見回した景色が俺の記憶にないものだったので一瞬、『ここはどこだ?』と思ってしまった。

そんなことを考えていると、再びノックの音が聞こえてくる

あ、何か言わないと入ってこないのか

「あ、どうぞ」

俺はそう言いながら上体を起こす。

「失礼します」

俺の返答を聞き、ミリイが一礼をして部屋に入ってきた。

「朝食の時間なのでお迎えに参りました」

そう言われて軽くあわてながら返答をする、どうせ俺のことだからだいたい寝過ぐしていることだろう。

「今、着替えます」

そういつて着替えようとするが、ミリイが部屋を出て行かない。

「あのミリイさん？ 着替えますよ？」

俺は出て行ってほしくてそういつたのだが、ミリイは小首を傾げながら口を開く

「手伝ったほうがよろしいでしょうか？」

「いや、なんでそうゆう考えに至るの！？」

まさかの提案に俺は驚き少し大きい声を出してしまう。

「何かおかしかったですか？」

そういつてミリイはまたも小首をかしげる。

「おかしいよ、着替えるから少し部屋の外で待つてよ」

「何故？」

本当に理解ができないといった感じでミリイは眉をひそめる。

「い、いいから外で待つてくれ」

そういつとミリイは渋々といつた感じではあるが部屋の外に行つてくれたので、俺は手早く着替え、部屋を後にした。

食堂に向かう途中、俺はふと思い出したように話し出した

「そういえば、朝だけどさ」

「なんでしょうか？」

ミリィは顔だけをこちらに向けて反応する。

「ノックしても起きてこなかったら部屋の中入ってきて起こしていいよ」

俺は普段、目覚まし時計3個相手に熟睡する猛者であるため今日起きたのでさえ奇跡に近い。

「かしこまりました。さすがに私も20回ノックしても起きなかったときは部屋に入ろうか迷いましたが、次回からはもう少し早い段階で部屋の中に入れていただきます」

訂正だ、別に奇跡など起きてはなかった、単にミリィの根気が俺の眠気に勝っただけだった。

「そうしてくれ、さすがに申し訳なさすぎる」

俺が申し訳なさそうにそういうと、ミリィも思い出したように口を開く

「そういえば、今日からの勉強は私が見させていただくことになっておりますのでよろしく願いいたします」

「こちらこそ、よろしく願います」

そう言って頭を下げあう俺たちだが、なんだかミリイの礼は様になっっているが、俺の礼は今まで同様にぎこちない、この様子をはたから見たら俺はよほど情けないだろう。

あとでマナーとかも学んどいたほうがいいなあ、などと思っっているうちに食堂につき、すでに集まっていた4人にあいさつをして席に着く。

飯を食べ終わり、部屋へ帰るとすぐにミリイが大量の本を持ってきた。

「こちらが、今日から編入試験までにリユーヤ様に学んでいただく分の資料です」

そういつて、平然とした顔でミリイが言うてくるのに対して俺は驚きを隠せない。

「え、これ全部？」

「はい、全部です」

少し不安が頭によぎった。

「ちなみに期間は？」

「今から37日間です」

ああ、受験戦争を乗り切った俺にさらに過酷な試練を課すとは、どうやらここは異世界では無くて地獄だったようだ。

とりあえず嘆いていても始まらないと思い、一番上の一冊を手に取り開いたところで俺は固まった。

「これ何？」

俺の質問に対してミリイが答える。

「歴史に関する参考資料です、ずいぶんと簡単にまとめられていると思いますが」

残念ながら俺の伝えたいことは伝わっていなかったようだ。

「いや、そうじゃなくて……」

「なんででしょうか？」

ミリイはまだ訳が分からないと言ったか顔をしている。

「この文字、何？」

「え？」

そう、俺はこの世界の文字が全く読めなかった。さすがにこれには普段冷静なミリイも驚いたようで声を出して驚く。

「この言語に名前などはありませんがあえて言うなら共通語ですね。昔は多くの言語があったと聞いておりますが、今はほぼ世界中の国でこの言語が公用語として使われていて残りの国でもこの言語を学ぶことになっているはずですが？」

まさか、知らないんですか？ とでもいうように尋ねてくるミリイだが俺はこんな文字は知らない。

「俺の住んでいたところには、こんなよくわからない記号みたいな

文字はなかった」

当然だ、異世界なのだから、言葉が通じるから文字も読めるもの
だと思つて油断していたがこれは37日じゃ無理かも……

「わかりました。文字が読めなくてはどうすることもできませんの
で、言語を学ぶところから始めましょう」

少し困った風にそういうと、ミリイは部屋をでていき数分後数冊
の本を持って帰ってきた。

「まずは、こちらの本を読めるようになっていただきます」

そう言つて渡してきた本は、簡単に言つと中学生の時に初めて渡
された英語の教科書のような感じで、おそらく会話形式と思われる
文章が書かれている。

「これが終わつたら次に書く練習をして、その後はほかの勉強をし
ながら少しずつ覚えていただきます」

この日から俺の地獄の日々は始まった

——開始から2日目

すでに昨日10時間以上も言語の勉強をし疲れ切った頭にさらに
言葉を詰め込んでいく。

「えつとこれなんだっけ？」

俺は本の中の文字の一つを指さして言う。

「その文字は水です、さつきも聞きましたよその単語」

この世界も言語は発音する言葉の順にそれに対応する言葉を当てはめていく、この点は英語などよりも日本語に近い形であるが、一文字で一つの単語の意味を表す漢字のような文字と発音をそのまま文字にしたいわゆる平仮名のような文字の二種類があるところまで似ているのだが、その文字の形が奇妙すぎて覚えられない。

なんとか平仮名のような文字は昨日で覚えたが、それ以外に最低限必要だと言われた別のほうの文字を覚えられずに悪戦苦闘しているのが現状である。

「なあ、ほんとにこれ全部覚えなきゃいけないの？」

あまりの量に軽く弱音を吐くように尋ねる。

「当然です、これでも1万語ほど削っているんですよ？」

「それでも、3万語もあつたら無理だろ！？」

もう、ただの愚痴になっているような気もするが、朝から晩まで勉強づけなのだから多少心が弱っていてもおかしくないだろう。

「頑張ってください、それが読めないと勉強ができません」

そしてこの日もまた夜中まで俺は勉強を続けた

——開始から4日目

「や、やっとだ、やっと全部覚えたぞ」

俺が文章を読めるようになって喜んでる横で読書をしていたミリイは本をパタンと閉じ俺に大量の紙とインク、さらにペンを渡してきた。

「では、今度は私が言った文章を書いて行ってください」

俺の喜びはその一言で掻き消え、背伸びをしていた俺は固まる。

「へ？」

俺の気の抜けた言葉に対して、当然だともいつかのようミリイは言い放つ

「最初に行ったはずですが、もう忘れましたか？読めるようになったら、次は書けるようになっていただく」と

俺はそこで思った疑問を口にする、多少声が大きくなったがしやうがないと思っしてほしい。

「なんで、読みと書き一緒にやらないんだよ！？」

その問いに対してミリイはまるで気にしていないかのように答える。

「読めないものは書けませんし、それだとただ写すだけになるじゃないですか？ 書いただけで書けるようになったと、勘違いされても困りますので、このような方法をとらせていただきました」

その後も俺はとにかく書いた、しかし、覚えてない文字が多い、本当にこのままで勉強など始めれるのだろうか？

そして、現在に至る

この前までミミズの張った後にしか見えなかった文字を今、俺は苦戦しながらも書いていく。人間やれば意外とできるものだななどと思いつつ、俺はひたすらミリの言う文を書き続けた。

その時、扉を誰かがノックする

「どうぞー」

俺はペンをいったん休めて返事をする。

「失礼します」

「おー、頑張ってるか」

一礼して入ってくるクロンさんと、なぜかその後ろに 그레이 が付いてやってきた

「検査結果が届きましたので持ってまいりました。」

何のことだったかと思い尋ねる。

「検査結果？」

「数日前に少々、血をいただきましたがそれから魔力の固有波形、固有属性を検査させていただきました」

ああ、あの時の血か。確か、ナイフで手のひらをきって血を採取するとかいうから逃げ回ったけど、すぐに捕まって結局血をとられたな。

まあ、魔法で傷はすぐふさいでくれたし、切れ味がいいおかげでほとんどいたくなかったけど、切られるっていうのはいいきぶんはしなかったな。

「波形のほうは、お話しても分からないと思いますので省略させていただきます。それで属性のほうですが……」

部屋全体に緊張が走る

「保存属性と判明いたしました」

第7話 怖い次女と頼れる長男 え、長女？ 完璧じゃないの？

——魔法

この世界における魔法は大きく分けて2種類に分けられる。自然の中に存在する魔力と自身の魔力を混ぜて発動させるものと、自身の魔力の持つ力のみで発動させるもの。自然の中に存在する魔力は火、水、風、土の四大属性と光、闇があるが自身の属性が光およびそれに付随するものに属さないものは、光の魔力を感知できない、闇も然り。

前者は総体魔法とよばれ、誰が使っても強さや効果の大小をふくめず、同じ効果が得られる。しかし、発動のためには、その魔法の本質を理解し、それを明確にイメージすること、自然にあふれる魔力の波長を、自身の魔力のそれと同調する技術が必要となるため発動にはたいはい多少の時間がかかる。明確なイメージと本質を言語化した詠唱を用いるのが一般的である。

後者は自身の持つ魔力の固有属性によって効果が異なり、その属性の種類は、基本型と呼ばれる四大属性および光と闇の六種類と、特殊型と呼ばれる再生、洞察などのようなものの二通りがあり、その種類は数えきれない。こちらは発動にかかる時間はほとんどないが、総体魔法に比べ魔力の消耗が激しいのが難点である。

人間は魔力を生まれたときは持つておらず、大抵が自身の固有波長と波長が近い親などによって、体に魔力を注ぎ込んでもらうことによって覚醒する。これは別に波長が似ている必要はないが波長がかけ離れている場合、ひどい吐き気や頭痛などの拒絶反応が出て、子供ならば耐えられずに精神が崩壊することもありうる。

この説明を受けたのが、勉強を開始した日である。そこで、固有波長と固有属性を調べるからと血を採られたわけである。

——そして現在

「保存？」

俺はそれがどのようなものなのか理解できなかった。

「はい、この属性についての詳しい説明は、のちほど魔法研究所より資料を取り寄せておきます」

つまり、クロンさんもわからないってことか。

「ありがとうございます」

「なー、クロン結局、誰の波長がリユーヤの波長にいちばん近いんだ？」

「そうですね、これだとエリスお嬢様が一番近いかと」

エリスっていうとあの時のちびっ子か。

「なんだよ、俺じゃないのか。でも、エリスはまだ実地訓練中だろ？」

「はい、明日戻る予定ですが」

「なあ、リユーヤ苦しくても気にしないなら俺がお前の魔力、覚醒させてや——」

「明日を待ちます」

子供なら精神崩壊起こすって言うてるのに、そんな苦痛気にしないわけがない

そして話が終わるとクロンさんは一礼して部屋から出ていき、グレイはなんだかいじけた感じで部屋を出て行った。

「おし、じゃあ明日に備えて寝るかな」

そう言つて、立ち上がりベッドのほうに向かおうとすると、俺は腕をつかまれ、ゆっくりと振り向くと、そこには怖い笑顔のミリイがいた。

「まだ、終わってませんよ」

「じよ、冗談に決まってるじゃないか」

今寝たら、どんな悪夢が待っているかわからないので俺は素直にまた勉強を始めた。

――3時間後

「まあ、大体は大丈夫になりましたね。明日からは本格的に勉強を始めるので今日はしっかり休んでおいてください」

俺は、脱力し椅子の背もたれによりかかる。

しばらくそうしているといつのまにかミリイはいなくなっていたので、俺は風呂に入りベッドの上に転がった。

明日から魔法がつかえるという期待と、全く知らないことを勉強することへの不安を心の中に抱きながら俺は眠りについた。

「…き…さい」

誰かの声が聞こえた気がするけど、眠いしいいや。

「…きて…ださい」

その次の瞬間、耳を劈くような高音に俺は驚きの声を上げる。

「うわっ」

「おはようございます、リユーヤ様」

「ああ、おはよう」

俺は片耳を押さえながら、起き上がり着替えると告げると、ミリイはすぐに理解して部屋の外に行ってくれた。

しかし、いったいさっきの音はなんだったんだ。

そんな疑問を覚えながらも、俺は着替え食堂に向かう。

俺は食堂に足を踏み入れてすぐに、見慣れない人物がいつも俺の座っている席の隣に座っていることに気が付いた。

その少女は、ウェーブが掛かった金髪を背中の中ほどまで伸ばし、その碧眼は少し釣り目気味で多少近寄りがたい雰囲気を持っている。しかし、どんな特徴よりも背が小さいことが大きな特徴であろう。

140cmあるのだろうか？ 今は座っているからわからないがおそらくはないだろう。

「やあ、リユーヤ君おはよう。」

俺に気が付いたレインさんがその声をかけてくる。

「おはようございます。えっと、この子は？」

「つい先日会ったばかりなのに、もう忘れたのか？」

つい先日？ それにこの少し偉そうな喋り方もしかして……

「エ、エリスか？」

「いきなり呼び捨てか随分と礼儀がなっていないのだな、ハシモトリユーヤよ」

ああ、やっぱりそうか。にしてもこいつイラつくな。

「あ、悪いじゃあ、エリスちゃん？」

そういつとエリスはすごい勢いでこちらを睨んできた。

「もう一度そう呼んでみる、貴様の口をきけないようにしてやる」

「あ、はい」

こんな小さい少女の気迫に気圧されるなんて、俺ってつくづくダメなやつだな。

「呼び捨てでいい」

そう一言だけ言うと、エリスは俺から視線を外し正面を向いた

「リユーヤ君、エリスは口は悪いけれど、根はいい子だから仲良く

「してやってくれ」

「父上、私はこのようなものに仲良くされる必要などありません」

それを聞いて俺が苦笑いをしながら席に着くと、扉が開きライラがやってきた。

俺はいつも通りあいさつをし、その後に行ったアマリアさんとグレイにもいつも道理に接したのだが。なぜだろう、俺の横でエリスがすごい眼光で睨んでくる。

食事中に会話をしていても、時々背中に寒気が走るような気がした。

食事を終え食堂を出て少し歩くと、俺を呼び止める声が聞こえた

「ハシモトリユーヤ、話がある」

結構怒っている雰囲気のエリスを見て、俺はミリイに先に部屋に行っておいてくれと伝える。

十分にミリイが離れたのを確認して俺は口を開く。

「んで、なんだ？」

「今日、貴様の兄上と姉上に対する態度を見ていたが少し馴れ馴れしくしすぎではないか？」

「グレイとライラに対する態度？」

別にいつもと変わりわないし特に変なことをしたつもりもない

「貴様のような者が、姉上や兄上のような高貴なものに対して敬語を使わぬに話すこと自体が不敬だと言ってい——」

次第に大きくなるエリスの怒声を誰かの声が遮る。

「エリス」

エリスの言葉をさえぎったのは、グレイだった。

「兄上、何か用でしょうか？」

「あんな、大声で叫んでたらだれでも気づくつての」

そう言われるとエリスは顔を伏せる。

「お前はリユーヤが俺らのことをバカにしていると思って怒っているんだろ？」

「はい、この者は……」

続けようとするエリスの言葉を手で制し、グレイがしゃべりだす

「それは違うんだよ、リユーヤは初めて話した時は敬語を使っていた。でもそれじゃあ仲良くは、なれないんだ、だから俺がたのんで敬語をやめてもらったし、ライラだってそのほうが気が楽なはずだ」

そう言って、エリスの頭をなでるグレイは何だかいつもと違ってしっかりしているように見えた。

「じゃあ、エリス俺はリユーヤと話があるから先に部屋に戻っててくれ」

そついうとエリスは少し不満そうではあるが部屋へと向かった

「グレイ、お前本当に兄貴なんだな」
「なんだそれ？」

グレイはいつものように無邪気に笑う

「まあ、俺もふだんはふざけてるように見えるかもしれないけど、一応あいつらの兄貴だからな」

「見えるんじゃないかってふざけてるんだろ？」
「ちがいねえ」

俺らはお互いに笑いあった、そこでグレイが少しだけ真面目な顔になる。

「昔はエリスももつと可愛げがあったんだが、いつのまにかあんなふうに着っちまって。今回のことだって、俺らのために思ってたしてくれたことなんだ、許してやってくれ」

「わかってるよ、家族思いのいい妹じゃねえか」

「ところでお前、自分の部屋帰れるのか？」

「あつ……」

この家は広すぎて、未だに自分の部屋がどこにあるのかすら把握できていない。当然一人でなど、部屋に帰れる訳がない。

「連れてってやるよ」

そういった時のグレイはさっきのような頼もしい兄の顔をして微笑んでいた。

第8話 中国4000年の歴史？ めるいな

俺が部屋に帰ると早速勉強が始まった。

まずはこの国の歴史の勉強なのだが、次々と出てくる長い名前の人物たちの名前を覚えるので一苦労、さらにわけのわからない地名ばかりで頭を抱える。ついでに、この国は約7000年の歴史があるせいで呆然自失に陥った。

「無理だ…… ちなみに聞いておくが、今何年だっけ？」

「今は、世界歴で1万と7865年ですね」

世界史は一万八千年分も覚えることがあるのか……

「最難関となるこの歴史が終われば後は数学、魔法学、言語学あとは戦闘訓練で終わりですから頑張ってください」

「俺、数学ならたぶんできるよ」

本当ですか？ と疑われながらミリイが差し出してきた本を手にとって驚く。その本の内容は、まるで中学生の数学そのものであった。

この程度、俺にとっては何の問題もないということを伝え、一教科勉強しなくてよくなったことに胸をなでおろす。

「では、歴史を頑張りましょう」

その一言で、俺の胸に絶望が舞い戻ってきた。

俺がこの国の歴史を学んでわかったが、この国においては化学は全くと言っていいほど発展していない、しかし、代わりに魔法学が発展し、魔力というクリーンエネルギーによって人々の生活は成り立っており、地球のような環境問題は発生していない。

しかし、この世界においては魔物というものがおり、それらのせいで未開発の土地が多い。

魔物についてミリイに聞くと、基本的なところはほかの生物と変わらないが体内に異常な量の魔力を保有しており、非常に強靱な体を持っていること。ほとんどの魔物はそれを制御できないため攻撃的になるということを教えてくれた。

同時に、体内に生まれながらにして魔力を持つ人種を魔族と呼び、彼らは自然の中にある闇の魔力を感知でき、約4000年前までは人間と争っていたが、現在は友好的な関係にあるということまで教えてくれた。

その後も勉強を続け、夕食を食べに行き、食後のコーヒーを飲んでいるとクロンさんが話しかけてきた。

「リユーヤ様、魔力を覚醒させるための準備が整いましたが、いかがでしたしょう?」

俺はその言葉を聞いて思い出す。

「ああ、そういえば今日やるって言ってたのを忘れてました」

はつきり言って、今は歴史のことで頭がいっぱいだったので忘れていた。けれど、思い出したからにはやっておきたい。

「お願いできますか？」

「かしこまりました」

そういえばエリスの協力が必要とか言っていたが、協力してくれるのだろうか？

俺は気になってエリスのほうに視線を向ける

「安心しろ、朝の件は私のほうに非があることは分かっている。ここで駄々をこねるようなことはしない」

ひとまずは安心できそうだな。

そのあと俺はクロンさんにつれられてある部屋につれてこられた。その床には魔方阵が2つ描かれておりそのうちの一つに入るように促される。

「少々きついでしょうが、頑張ってくださいませ」

俺はそこで体に違和感を覚える。

「あれ、体が動かないんですけど？」

俺が不安な声色で尋ねるも、クロンさんはいつもと変わらぬ口調で返答する。

「魔力を覚醒させる際に、魔方阵の中から出ていただくと失敗してしまいますので、暴れられないように拘束させていただいております

す」

「いや、暴れたりはない予定ですけど」

暴れたところでメリットがないのだから暴れるわけがない。

そんなことを言っているとエリスがもう一つの魔方陣の上に立ち、口を開く。

「暴れるつもりがなくとも、痛みにより暴れてしまうから拘束しておるのだ、それぐらい理解しろ」

その言葉に俺は顔が引きつる。

「え、そんなに痛いのか？」

「親の魔力で覚醒するならともかく、親族でもない者の魔力で覚醒させるのだそれなりの苦痛であることは覚悟しろ。ちなみに、私は5歳の時、母上に手伝っていたがそれでもかなりの苦しみを伴った」

「あ、ちよつとまって、心の準備が……」

俺の頼みは、むなしく切り捨てられる

「貴様も男ならば潔くしろ」

そういうと、エリスの乗っている魔方陣が光りだし、俺の乗っている魔方陣の光も一段と増した。

「ぐっ、頭いてえ」

突如として襲ってくる頭痛、それは徐々に強くなっていく。

「あ、くっ……がはっ……」

すでに俺は言葉など喋れる状態ではなかった。あまりの痛みですでに言葉にならない声を出し続けて耐える。

気絶でも出来れば楽なのだろうが、なぜか意識は覚醒していく。

頭の中の考えはすべて痛みによってかき消され、すでに痛みは頭痛だけでなく体中に広がっていた。おそらく拘束されていなければ、魔方阵の上から飛び出していたであろう。

あれからどれほどの時間がたったかわからない、すでに口からは音が出ず、ただただ苦しむ。苦しみ続けていた俺だが、徐々に痛みが弱くなっていくのを感じた。そしてそれから数秒後、痛みは消え去りそれと同時に俺は気を失った。

「あ、あれここは」

「おはようございます」

俺はいつもの部屋にいた。

「俺、たしか魔力の覚醒させて……気絶したような気が」

「はい、リユーヤ様が気を失いましたので、クロン様がお部屋まで連れてきてくださいました」

俺は徐々に頭がはつきりとしてきて、昨日のことを思い出す。

「ああ、そっか」

「朝食のほうはどういたしましょうか？」

そう言われて気を失ったせいで昨日風呂に入っていないことに気が付く。

「出来れば汗を流したいから、後でまた迎えに来てくれるかな？」

「かしこまりました」

そう言つて、ミリイは部屋を後にする

俺は、汗を流した後、またベッドに転がる。そこで体の中に、何か変なものがあるような違和感に気付く。

「これが魔力か？」

つい、思ったことを口に出してしまった。

「それが魔力だと思うんだったら、それなんじゃないか？」

俺は突然声をかけられて驚く。

「うおっ、グレイいつ来たんだよ！？」

「お前がベッドに寝転がったあたりかな」

俺はそれを聞き、ため息を吐く。

「全く部屋に入る時はノックくらいしてくれよ」

俺の頼みを聞く気など、全くないと言った感じでグレイが口を開く。

「そんなことよりも体内の魔力に気付いたら、次は外にある魔力に気付けるようにならないとな」

「外の魔力が……何も感じないな」

俺は、何か変わってないかと思い周りに意識を集中させるが、全く何も感じられなかった。

「そんな簡単に感じれるもんじゃないからな」

早く魔法を使ってみたい俺は、グレイに尋ねる。

「なんかコツとかないのか？」

「ないな、とにかく集中することだ」

それを聞き、俺は軽く落ち込む。

「しょうがない頑張ってみるか」

その後、ミリイが迎えに来るまで頑張ってみたが結局何も感じられずに終わった。その日はそのあいつも通りに勉強をして過ごし、この国の歴史のうち3000年ほどのところまで学んだ。

——三日後

なんとか、コーランド国の歴史の勉強を終え、いったん休憩をし

ていると部屋に何か紙を持ったクロンさんが訪ねてきた

「どうかしましたか？」

背もたれによりかかりだらけていた俺は背をただして尋ねる。

「保存の能力に関する情報が入りましたので、持ってまいりました」

俺はそれを聞き少し心が踊った

「ありがとうございます」

魔力を覚醒させたはいいが、自然の中の魔力にはいまだに気付かず、固有属性の能力も使い方がわからずにいた俺にとってこれは朗報であった。

「こちらが保存の能力に関する資料です」

そう言って手渡してきた資料を俺は、さっそく読み始めた。

第9話 便利なものでも使えなかったら意味ないよね

——保存

ありとあらゆる物質・情報を魔法を発動した瞬間の状態で別空間に保存しておくことができる。

保存中は保存している物質なら大きさと重さ、情報ならその情報量に比例して体内の魔力を消費していく。

物質を放出するときは、流体及び極小の物質以外の物質が無い場所でも物理的に視認可能もしくは自身に接している場所にしか物質を出すことができない。

保存は自身の1m以内に一部分が含まれるものにしか発動することができず、放出も同様に1m以内にその物質のうちの一部が含まれることが条件となる。

情報の保存とは自身の発動しようとしている魔法の保存や記憶の保存があり、記憶は保存したからといって一時的に忘れるということとはなく、自身の記憶としてとどまる。

保存中に体内の魔力がなくなった場合、情報なら消滅するが記憶の場合は覚えている間なら再び保存できる、物質は強制的に近くの出現可能な空間に放出される。

保存可能な限界量は自身の魔力量によって決まる。

「なあ、これがあれば勉強すごい楽になるんじゃないか？」

「無理ですね、リユーヤ様では記憶を保存するのは今の状態では不可能かとおもいます」

俺の提案はミリイによって切り捨てられた

「なんでだよ!？」

俺は不満を隠せずにそう尋ねる。

「たとえば、今リユーヤ様がお持ちのペンですがそれを保存することは可能でしょう。そこにあるものをしまうことをイメージすればでしょうか」

俺はその言葉を信じてペンをしまつということをイメージする。

するとペンは突如として手元から無くなった。

「おお、できた」

俺が喜んでいるとまたミリイが口を開く。

「では今度はそれをどこから出すことをイメージしてみてください
い」

また言われて通りにすると突然、目の前にペンが表れて机の上に落ちた。

「なんだよ、簡単じゃないか」

「実際に行つて分かったと思いますが、固有属性に帰属する魔法はイメージするだけで使えます」

俺はミリイの話を聞きながら、ペンを出したり消したりして遊んでいる。

「では、記憶を保存することのイメージができますか？」
「へ？」

俺はその質問を受けてペンを落としてしまう。

記憶を保存する？セーブ？でもそれだとイメージできないし……

「えーっと、ちょっと難しいかな？」

俺が苦笑いしながらさういう。

「それができなければ記憶の保存は不可能です、さらに言ってしまう
えば今のリユーヤ様では魔力不足が懸念されます」

「魔力不足？」

俺の言葉に、ミリイがうなずき口を開く。

「はい、魔力とは使えば使うほどその最大量は多くなり、回復速度
も速くなります」

俺はその説明を聞きながらうなずく

「しかし、今まで隆也様は魔力を使ったことはありません、故に今
のままで記憶を保存できたとしても魔力切れを起こしてすぐに忘
れてしまいます」

ああ、なるほど俺が想像力乏しいうえに魔力が少ないから無理っ
てことか……

「無理じゃん！！」

俺の驚きなど気にしないかのように、ミリイは淡々としゃべりだ
す。

「はい、だから無理だと申し上げました。魔力のほうは何かを保存したまま生活すれば自然と鍛えられますが、記憶の保存のほうは思考錯誤するしかありませんね」

「よしじゃあ、考えるから手伝ってくれ」

俺がそういつとミリィが呆れたようにため息をつき口を開く。

「その時間があるなら勉強してください、とりあえず今はそこにある本を保存して魔力を増やすほうだけでもやっておいってください」
「は、はい」

ちよつと怒ったような口調になったミリィにすこしおびえながら、俺は本を保存して勉強を再開した。

——3時間後

突然、俺の頭上から本が降ってきて、俺の頭に落ちる。

「痛って」

「どうやら魔力切れみたいですな」

その言葉を聞いて俺は納得したように口を開く。

「さっきから無性にだるいのはそのせいかな」

俺は頭をさすりながら、魔力切れのたるさに耐えつつ、勉強を再開する

「もう少ししたらもう一度その本を保存しておいてください」

俺はその言葉に対して驚いたように口を開く。

「またやるの!？」

「今のリユーヤ様の魔力は10歳の子供にも劣りますから、できるだけ鍛えておいたほうがいいかと」

俺って10歳以下なんだと少し落ち込みながらも、俺は勉強を続けた。

それからの数日間の生活はとにかく保存しながら勉強をし、本を保存したまま食堂に行き、魔力切れで本がエリスの頭の上に落ちて、思いきり脛を蹴られたり、寝ているときに魔力切れを起こして顔面に本が降ってきたりと、ろくなことのない日々だった。

――7日後

「おし、とりあえずこれで世界史も終わってたな」

そういいながら俺は伸びをする。

「では休憩にしましょう、紅茶を持ってまいります」

そう言って一礼をしたミリイが部屋を後にしようとする。

「ああ、たのむ」

俺はこの7日間眠る前に必ず記憶の保存の方法を考えてきた。そこで考えついたのが、覚えたことを頭の中のメモ帳に書いていくというイメージなのだが、いまだに成功した試しがない。

いつも途中で、書くイメージに集中しすぎて書いた内容が変なもの

になっちゃいます。

なにか、いいアイディアはないものか……

「リユーヤ様、どうぞ」

俺は突然現れたミリイに驚く。

「おお、ミリイ戻って来てたのか」

「ノックをしたら返事がありましたので部屋の中に入ったのですが？」

「ああ、無意識のうちに返事しちゃってたんだな」

保存も無意識のうちにできるようになればいいんだけど……

「この後はなんの教科やるんだ？」

俺は紅茶を飲みながら、尋ねる

「次は魔法学の勉強をしようかと」

「確か、誰でも同じのが使えるのって、総体魔法だけか？」

俺は以前聞いたこと思い出して尋ねる

「はい、そうですね」

「でもさ、なんでみんな同じのをつかうの？みんな自分が使いたいように魔法使えばいいんじゃない？」

「以前も話した通り総体魔法の発動に必要なのは、その本質の理解とイメージ、さらに波長の同調です。ここで問題となるのが本質の理解です、これは一般的にはとてもすべてを理解ができるようなも

「ではありません」

「え、じゃあ誰も使えないじゃん!？」

俺はつい、身を乗り出す

「はい、ですからそれを補助するために、特に複雑な部分を言語化した詠唱、もしくは形としてあらわした魔方陣を用いるのが一般的です。もし理解できたとしても、魔法を組み立てる際には、かなり微妙な調和のもとに本質は成り立っていますので、ただ付け足すだけというわけにはいきません。よって、既存の魔法を使う以外、普通の人が魔法を使う方法がないのです」

「なるほどね、つまりはわからないことを具体化したってことか」
「そういうことです」

わからない事を具体化か……もしかして

俺は、突然ペンを持ち文章を日本語で書いていく。

「どうしたんですか？突然、わけのわからない記号を書きだして？」
「これは俺の住んでたところの言語だよ」

今まで俺は書くイメージもそれを頭にとどめるイメージもできていた。でもそれができなかったのは記憶するものがはっきりしていなかったからだ、つまり実際に書き、それと並行してイメージする。そして書き終わった時には、目の前に保存すべき記憶があり、頭の中には書いたというイメージあとはそれを合わせてとどめるだけ。

「できた……」

俺がそつつぶやくと不思議そうにミリイが訊いてくる。

「何ができたんですか？」

「記憶の保存だよ」

ミリイは少し驚いた顔をしたがすぐにいつもの表情に戻り、口を開く

「おめでとつございます」

俺は喜びを隠せず笑顔でそれに答えた

「ありがとう」

その時俺が感じた達成感は、今までの人生の中でも特に大きなものであった。

今までの何もしていなかった日々では味わえなかった達成感、俺はその時少しこっちの世界にこれてよかったと思った。

第10話 エコって大切だよ

記憶の保存に成功してから1日、いまだに俺は勉強を続けていた。

記憶が保存できるようになったら、少しははかどるようになるかと思っていたが実際のところ、保存するためには一度記憶として確かな情報にしなければいけないので、たいして変化は見られない。ついでに言ってしまうと、魔力が全く足りないから保存しても無駄である。結果として、俺は勉強から解放されることはなかった。

「なあ、この造形魔法ってなんだ？」

「造形魔法ですか、これは総体魔法の一種なのですが少し特殊でして見せたほうが早いかもしれませんね」

そういうとミリィは、手のひらの上に火の玉を作って見せたそれをふわふわと動かし始めた。

「おお、すげえ」

「今回は球体を作りましたがほかにも好きな形にすることができま

す」

なるほど、便利なもんだな

しかし、すぐに疑問が浮かびあがる

「あれ、でもこれがあればほかの魔法いらないんじゃない？」

俺の問いに対して、ミリィは軽く首を振り否定する。

「残念ながら、この魔法の殺傷能力はほかの総体魔法に比べて弱く、火ならば、ただの火を作りそれを自由に扱えるだけでしかありません」

「ほかの魔法って、ただの火じゃないの？」

「はい、ほかの魔法は火に敵を燃やすなどの概念が含まれているために通常の火より強力になっております。造形魔法にもそのような概念を組み込むことはできますが非常に難しく、そのようなことをする人はあまりいませんね」

「そうか、じゃあ使えなくてもいいんだな」

そんな俺の単純な考えをミリイはまた首を振って否定する。

「いえ、これは総体魔法を使うに当たって基本となる、波長の同調作業の練習にもなりますので多くの人は、使うことができます」

「じゃあ、俺もそれつかえるようにならないといけないのか……」

そんな事を少し遠い目をして言うと、ミリイがささず言葉を挟んでくる。

「まずは大気中の魔力に気付けるようになってからの話ですけどね」
「頑張ります……」

俺はその後ろ総体魔法の勉強を続け簡単な魔法の詠唱なども覚えながら肝心の魔力が感じられないので、どうしようもない。

俺がその後もページを読み進めていくと魔石に関する説明が書いてあった。

——魔石

魔力を含み蓄えることができる石であり、物によっては魔力を注ぎ込むことにより発火するものや水を生み出すものもあり、その用途は様々、現在は人工魔石も出回っており生活の基盤となっている。

「この魔石って、みんな使ってるんだよね？」

「はい、日常生活の中でも料理や明かりなどで用いられていますね、この部屋の明かりもすべて魔石によるものです」

それならばと俺は疑問をミリィに投げかける。

「でも、俺魔力なんて注ぎ込んでないけど勝手に明かり点くぞ？」

「魔石は空気中の魔力を吸収して自動的に魔力を補給しますので多少使う程度なら何の問題もありません」

「便利なもんなんだな、魔石って」

はつきり言って、明かりが点く仕組みは全く分からないし興味もないが、なんとなくすごいと思った。

「あれ？空気中の魔力はなくなるの？」

自分で質問していてなんだが、これではまるで『なんで、なんで？』と訪ねる子供のようだ。

「基本的にはなくなりませんね、生き物が体内で生成した魔力は少しずつ大気中に漏れていきますし、死んだときにも自然の中に取り込まれます。そのあと魔力がどのような経緯でほかの属性に変化するかはわかっておりませんが、そのおかげで自然の中から魔力がなくなるということはありませぬね」

俺が自然の神秘に感動していると、ミリィが再び口をひらく

「ちなみに、そのことに関しては前のページに書いてあります」
「えっ!?!」

俺はあわててページをめくると、確かにそのことについて詳しく書いてあった

俺は、あははとごまかすように笑うも、表情を一切変えないミリイからなんとなく怒気のようなものを感じた。

――2日後

俺がいつものように勉強をしていると突然部屋の扉が開いた。

「リユーヤ、今から街に買い物に行こうぜ!」

「グレイ、ノックしてくれっていつも言ってるだろ」

俺は無駄だと思いながらも注意してみる。

「おお、悪い」

そういつてなぜか部屋を出ていくグレイ、俺は何事かと思って首をかしげる。

そして、部屋にノックの音が響く

「リユーヤ、今から街に買い物に行こうぜ!」

「やり直しても遅えーよ!」

そういつて俺は近くにあった枕をグレイに向かって投げつけるも、

グレイは難なくそれを受け止める

「まあ、気にするな」

そういいながらグレイが枕を投げ返してきたが、俺もそれを難なくキャッチする……顔面で

「それで、街だっけ？」

「そうだよ、お前今まで一度もこの家出たことないだろ？」

確かに俺はここに来てからというものの一度もここを出たことはない、せいぜい庭の散歩程度である。

外に出てみたくなかったと言われれば外の世界も少し見てみたいが、今までは勉強に追われる日々でとてもそんな余裕がなかった。

「ミリイ、今日の勉強って……」

「いいですよ、数学がなくなった分、予定よりも早く進んでいますし、たまには息抜きも必要かと」

「悪いな、明日は2倍頑張るから」

「グレイ様ではリユーヤ様をお願いいたします」

そういつてミリイはグレイに頭を下げる

「何言ってるんだ？お前もついてこいよ、俺とリユーヤだけじゃつまんねえだろ？」

「わたくしもですか……？　かしこまりました」

そういつて再び頭を下げるミリイを見てグレイは満足そうな顔を

する。

「俺はライラたちも誘ってくるから後でもう一回迎えに来るな」

そういつてグレイは嵐のごとく去って行った

そのあとグレイがまた部屋にやってきたがエリスは訓練がありこれず、ライラも用事で出かけていたそうだ。

何はともあれ、俺達の買い物は始まった。俺の住んでいるレインさんの家はこの国の首都にある。

——首都ソリユード

コーランド王国の首都ソリユードは巨大な港を有し、貿易・漁業の中心として栄えている、魔法学の発展に伴い、今は国内最大規模の魔法研究所が建てられ、魔法学の発展にも大きく貢献している。人口は約100万人

最近、読んだ本に確かそんな説明が書かれていた。

この世界においては魔物の被害を防ぐためにこの規模の街には防壁が作られていおり、生活する範囲が限られているので、100万人と聞くと少ないようにも感じるがむしろ多いほうなのだろう。現に街を歩いていると多くの人で賑わっている。

「結構賑わってるんだな」

「当然だろ、首都だぜここ」

首都と聞くと東京の事を思い浮かべるが、今は帰れぬ故郷に思いを馳せてもしようがない。

「ところでどこ行くんだ？」

「まず、飯でも食おうぜ」

俺もその案に賛成し 그레이 についていくがなんだか視線が気になる。

그레이 には好奇とも取れる視線が向けられているようだが、俺に向けられる視線はひとを邪険に扱うようなそんな雰囲気を感じ取れる。

俺の自意識過剰かもしれないし気にせず歩くか。

そのまま、気にしないようにしながら歩いていくと 그레이 が一つの店の前で立ち止まった。

「ここにしようと思うけどいいか？」

「俺は何もわかんないから任せるよ」

「私も大丈夫です」

俺もミロオも否定しない事を確認した上で 그레이 はしゃべりだす。

「そうか、じゃあはいるぞ」

그레이 が扉を開けて店に入ると鈴の音が鳴りそれに気づいた店員がこちらにやってくる

「おう、 그레이 また来たのか」

「ここ以外じゃ、落ち着いて飯食えないからな」

どうやら 그레이 はこの常連のようで、店員にいつもの席で、と

言つと店員は俺たちを個室の席へ案内してくれた。

その後メニューを解読するのがめんどくさい俺はグレイに注文を任せ、ミリイはスープを頼みグレイは俺のと合わせてサンドイッチを2つ頼んだ。

すぐに食事は運ばれてきて、食事をしながら俺たちは会話をする。

「ほかの店だと食事中にほかの客がこっちろじろ見るもんだから落ち着けないんだけど、この店は個室用意してくれるから周り気にしないで食えるんだよ、リユーヤも街中じゃ目立つちまうしな」
「あ、やっぱり俺見られてたんだ」

ただの自意識過剰じゃなくてよかったと安心する。

「なんだ自覚なかったのか？」

「いやそんな気はしてただけど、気のせいかと思ってたよ」

「お前の髪と目の色は、あんまり好まれていないからな」

そついったグレイはなんとなく悲しそうだった

「そつなのか？俺の住んでたところじゃ普通だけど」

そつ言つて俺は黒い前髪をいじる。

「それが普通つてホントにお前は変わった奴だな」

そつ言いながら笑うグレイだがなんだかいつもと雰囲気違って見えた

「でもなんで、この髪がいけないんだ？」

俺がそう訪ねると一瞬の間を置いて 그레이が答える。

「それは、子供のころに誰かが聞かされるおとぎ話が原因なんだよ」

第11話 本格的に剣と魔法っぽくなってきた

むかしむかし、この世界ができるよりも前の話です。

この世界ができるよりも前の世界では多くの人々が幸せに暮らしていました。しかし、ある日突然現れた悪魔によって人々の幸せは壊されてしまいました。

悪魔は人々の幸せを壊してもまだ満足はせずついに世界を壊してしまいました。

それに怒った神様は悪魔を倒し、新しい世界を作り上げました、それが私たちの住むこの世界です。

「と、まあこんな感じの話なんだが」

「うん、よくありそうな話だな、で今のどこに俺の髪と目の色が嫌われる理由があるんだ？」

今の話は単なる勧善懲悪のストーリーとしか思えない。

「この話に出てくる悪魔なんだが、それが黒い髪と瞳であつたつていうのが伝わっていてな、そこから黒い髪や瞳は嫌われる理由になつたわけだ」

「それって、本当かもわからないのにみんな信じてるの？」

「信じてる信じて無いは関係なく、ほとんどの人が心の隅で黒い髪と瞳は不幸を持つてくると思ってるな」

なるほど、俺はこの国じゃあ嫌われ者つてわけか……

「今まで、その風潮をただそうとした人はいなかったのか？」

「もともと、黒髪か黒い目の人間なんてめつたに生まれない上に、

大抵は生まれたらすぐに捨てられて問題になる前に揉み消されちゃうのが多いからな」

被害が少なくてその被害もほとんど表に出てこないのならば、確かに問題となることは少ない。それじゃあ、確かにただそうとする人がいても対処の使用がない。

「なあ、グレイ」

「なんだ？」

「俺って、迷惑じゃないのか？」

一瞬グレイはあっけに取れた顔をしたが、次の瞬間には大爆笑を始めた。

「なんだよ、俺はまじめにいつてんだぞ！？」

「ああ、悪い悪い、あまりにも馬鹿なこと聞くもんだからつい」

黒い髪や瞳が嫌われているのなら、それを預かったレインさんたちにも迷惑がかかる。そう思ったのが馬鹿な考えなのだろうか？

「迷惑だなんて思ってるわけないだろ、親父はそうゆうの気にしないって。それにその、えーっと名前なんて言ったけ？」

「ミリイ・ディアスです」

ミリイのフルネームなんて初めて聞いたな。

「そう、そのミリイに聞いてみな、たぶん気にしてないと思うぜ」

そついわれて、俺はミリイの方を向き、恐る恐る尋ねてみた。

「気にしてないの？」

「特に気にしたことはありませんし、気にする理由もありません」

その回答を聞いて、俺はなんだか少しうれしくなった。

「まったく、お前が気にしてちやいみねえだろ」

「ああそうだな、気にしないことにするよ」

そう言っただけ俺たちは食事を続け、次にどこに行くかという話になった。正直な話、俺はこの街のことなど何も知らないので任せるしかないのだが。

「とりあえず、リユーヤもそろそろ戦闘訓練だろ？」

そういえば、以前そんなことをミリイが言っていた気がする。

「はい、魔法学の勉強が終わり次第、戦闘訓練に入るつもりです」

「じゃあ、武器だな、いい店知ってるから次はそこ行こうと思うが
いいか？」

今まで平和な国で生きてきただけに、武器という響きに多少の違和感を覚えるが、それよりも気になる事があった。

「でも、俺金ないぞ？」

「いいんだよ、俺が買ってやるんだから」

さすがにそれは悪いだろと思い、断ろうとして口を開く。

「いや、そうゆっわけには……」

「大体、お前ここの支払いもできねえだろ？」

ああ、確かに何も気にせず食べてたけど、俺って金持っていないだよな。

「じゃあ……頼む……」

その後、 그레이がミリイの分も払うといいだし、ミリイは断ったが結局 그레이が支払いをした。

店を出て、俺は 그레이についていくと次第に人通りの少ないほうに進んでいく。そして、気が付くと、周りには誰もいなくなり、路地裏に入っていた。

道を間違っていないかと聞いても、 그레이は大丈夫というばかりで、全く気にしている様子はない。

「なあ、やっぱりまちがってないか？　周りに店らしい場所なんてないぞ」

「だいじょうぶだって、ほらついたぞ」

そう言って立ち止まった 그레이の目の前にあるのは、ぼろい一軒家でとても武器屋には見えない。そんなことはお構いなしに、 그레이が店に入っていく、俺もそれに続く。

「おう、店長久しぶり」

「おお、 그레이の坊ちゃん久しぶりだねー」

店長と呼ばれた人物は見た目は完全な老人で、髪はすべて白髪になっており眼鏡をかけていた。

その後も、 그레이は店長と世間話を続け俺とミリイは完全に蚊帳の外であった。

「ところで、その二人は誰だい？」

そういつて店長は眼鏡を片手で支えて俺たちを見る。

「ああ、こいつらはおれんとこの居候とその世話係で、リユーヤとミリイだ」

それに続くように俺とミリイが挨拶をする。

「ところで今日は何の用だい？　まさか友達紹介して、世間話しに来たわけじゃないだろう？」

「ああ、そうだった。こいつの武器を買いに来たんだが、何かいいのないか？」

グレイがそういうと、老人は俺のことをしばらく見定めるように見ていたが、待っておれとだけ言って、部屋の奥のほうに行ってしまった。

しばらくして老人が戻ってくると、その手には革製の鞘に入った全長80センチほどの剣を持っていた。

「ちよつとそこの、少しこれを持ってみなさい」

俺は、言われたとおりに剣を両手で受け取る。鞘から抜いてみると、それは幅広な片刃の曲刀で、思っていた以上にその剣は重かった。

「ちよつと、振ってみなさい」

俺は軽く剣を振ってみる。振った感じに違和感はなく、思ったよ

りも使いやすかった。

「うん、よさそうだな。店長、これいくらだ？」

「手入れ用の道具と合わせて、これくらいでどうだい？」

「いや、それはちよつと高くないか？」

その後も値段交渉を続けるグレイたちをよそに俺は、初めて持った武器に興奮して素振りをする。

「おし、買った」

「まいどあり」

俺が素振りに夢中になっている間に交渉は終わり、剣は後で送ってもらふという話になったらしく、俺たちは武器屋を後にした。

その後も俺たちは、グレイの案内で街を回った。

—— 2日後

「リユーヤ様、起きてください」

「ん、おはようミリィ」

俺はいつも道理の朝を迎えた、違うところは今日から戦闘訓練が始まるということくらいである。

朝食を終えて部屋に帰ってきて俺はミリィに尋ねる。

「それにしても、戦闘訓練でどんなことするんだ？」

「まずは自然の中にある魔力を感じれるようになっていただくことと、素振りといったところですね」

「魔力って言われても、釈然としないんだよなあ」

俺はいまだに自分の中の魔力以外を感じたことがない。

「体内の魔力は感じられていますよね？」

「それは、なんとなくは分かるよ」

すでに違和感だとは感じないが、体の中にある魔力を感じることはできる。

「それと似たようなものを、空気中に見出すこと。これができなければ、基本的に魔法は使えませんから頑張ってください」

俺はそういわれて、周りに意識を集中するが魔力など感じられなかった。

「何も感じない……」

それから1時間ほどの時間をかけてみたが結局、魔力を感じることができなかった。

「見つけれないのなら仕方ありませんね。今日はこれくらいにしておきましょう、では、次は素振りをしましょう」

そのあと俺はミリィに姿勢が悪いとか怒られながら剣をふるう。

何時間も剣を振ったせいで、終わったときにはすでに腕が筋肉痛になっていた。

第12話 夏は海派？ 山派？ それとも自宅派？

あたりには木が生い茂り、目の前にはどこまでも続く坂道、そしてそこを苦しそうな顔一つせず歩いていくメイドとちびっ子、それに息を切らしながらついていく俺。情けないなんて思ってもらっちゃ困る、それでも頑張ってるほうだ。

「リユーヤ様大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫だと思う……」

実際のところはもう倒れるが、目の前を女二人が楽しそうに歩いているのに大丈夫じゃないとは言えない。

「情けない男だな」

エリスさん、ここは頑張ってるんだからそんなこと言わなくてもいいんじゃないですか？

大体なぜおれがこの二人と登山をしているのか、それを説明するには昨日のことを話さなければならぬ。

——訓練開始3日目

あれから毎日、時間をとって魔力を感知しようとするが、成果はなし。

「あー、わかんねえー」

今日も今日とて成果はなく、おれはうなりながら芝生の上に転がる。

最近はよくある光景なので、ミリイも特には気にしていないようだ。芝生の上で唸っている俺の視界の隅に誰かがこちらに近づいてくるのを見受けて、俺は上体を起こす。

「こんにちはリユーヤさん、ミリイさん」

「あれ、ライラどうしてここに？」

ここは訓練用に俺が借りているスペースなので、ライラにとっては特に用のない場所のはずだ。まあ、もしもあるとしたら俺がミリイに用がある程度だろうな。

「リユーヤさんが魔力の感知ができずに苦労していると聞いたので、少し提案をと思って」

うん、ライラは本当にいい人だ、どこぞのちびっ子なら来たとしても俺をあざ笑って帰っていくだろうに。現に、このまえエリスが偶然ここを通りかかった時に鼻で笑われた。

「提案というのは？」

俺ではなくミリイが反応したが、どんな提案も俺にはどんな効果があるのか理解できないからこれが順当だ。

「魔力が感知できるようになるまで、山の中で過ごしてはどうかと思ひまして」

ライラ曰く、人が生活し魔力を使うことで空気中の魔力の濃度が下がるので、人里離れた山奥に行けば魔力の濃度も濃く感知しやすいのではとのことである。

「確かに、今のまま続けるよりも効果はありそうですね」

「はい、それで別荘の一つが山奥にありますのでそこに行かれてはどうかと、すでにお父様の了承は得ております」

この後も半ば俺は置いてけぼり状態で話は進み、次の日の朝に出發することになったわけだ。

この時は俺も山での修行という語感に、少しわくわくしていた。

次の日の朝、目を覚まして、俺とミリイの荷物を保存して家を出ると、なぜかエリスがそこにいた。

「なんでエリスがいるんだ？」

「私も行くからに決まっているだろう」

もう俺の口からはため息しか出なかったが、ため息を3回くらいついたあたりで鳩尾に強烈な一撃を決められて今度はため息も出なくなった。

ついでにエリスの荷物も俺が保存させられた。

——そしてそれから約5時間ほど歩いて今に至る。

「ミリイ、ちなみにあとどれくらいで着くんだ？」

「山を登り始めて2時間くらいですからあと3時間ちょっと、といったところでしょうか」

3時間か……ふう、死ねるな……

「一旦、昼食にしましょうか」

俺の様子を見て限界だと悟ったのかミリイが休憩を提案してくる。なんだか余計情けない気分になったが、ここは渡りに船と思い賛成する。

「エリスちゃんいいかな？」

「ミリイが言うならばしかたないな」

待て、今なんだか不思議なワードが聞こえたような。

「ミリイ、今エリスのことなんてよんだ？」

「エリスちゃんですが、何かおかしかったですか？」

全くをもっておかしすぎる、俺はすぐにエリスの方を向き口を開く。

「おい、エリスなんで俺の時は怒ったのに今は怒らないんだよ！？」
「もともと、そう呼ばれることは嫌いではない、ただ貴様に言われると虫唾が走るのだな」

簡単に言うと俺のことが嫌いなわけね。うん、わかりやすい。それにしても、この二人仲いいな、いつのまにかミリイも敬語じゃなくなってるし……

そのあと昼食をとり、少し休んでから再び山を登り始める。

そこから1時間くらいは俺も元気だったのだが次第に疲れがたまり。2時間後には談笑して前を行く二人をよそに黙々と歩き続ける。

さらに1時間ほど歩いたとき、遠くのほうに建物が見えてきた。

「ミ、ミリィ…あれが目的地か？」

「はい、もう少しですので頑張ってください」

俺は最後の力を振り絞り、歩きそしてついに家の扉の前に着いた。
そして、扉を開けると……

「おう、遅かったな」

グレイがいた

「なんでお前がいるんだよ!？」

「ライラもいるぞ」

「いや、まてなんでお前がもうここにいるんだよ、おかしいだろ!？」

ここまででは1本道だったし、追い抜かされたような記憶もない、
まさか俺たちより早く家を出たのだろうか？

「そりゃあ、転移で来たに決まってるだろ？」

転移？

「あの、光って移動するやつか？」

「ああ、それだ」

俺は膝から崩れ落ち、地面に両手をついてうなだれる。

「ミリィさん…なんで俺たちは歩いてきたんですか？」

「足腰を鍛えるのにちょうどいいと思ひまして」

ああ、そうですか……

とりあえずその日はすぐに休み、次の日に備えた。

——昨日早く寝たせいか、まだ日が出てこないうちに目が覚めてしまった。

やることもないので、シャワーを浴びベッドに寝転んだところで朝食の準備ができたといってミリイが迎えに来た。

俺は朝食を食べ終え自室に戻る途中で、今日の予定についてミリイに尋ねる。

「基本的にやることはいつもと変わりません。まず、魔力感知、それから剣の素振りですね」

「やることは、いつもと一緒にか」

「まあ、今できることはこれくらいしかありませんので。魔力を感じられるようになったら、もう少し別のこともやっていこうと思っています」

とりあえず、魔力を感知しろってことか。

昨日は疲れていたからか気づかなかったが、なんとなく空気中に普段は感じない何かがあるようなそんな気がする。これが魔力だというのならば、山に来た甲斐もあるだろう。

しかし、それから3日間、何かがあるような気はするものの、それをはっきりと認識はできなかった。

「うーん、だめだな」

そう言っ て俺は地面に転がる。

「そうですか。では、少し休憩にしましょう」

「なら、少し散歩にでも行ってくるよ」

俺がそういうと、ミリィが少し考える。

「魔物が確認されたという情報ありませんし、少しくらいなら大丈夫でしょう」

俺はその言葉に安心して、森の中へと入っていった。

森の中を歩きはじめて数分、木漏れ日を浴びながら俺は歩き続ける。耳には鳥の鳴き声と自分の足音だけが聞こえ、非常にリラックスできる時間を過ごしていた。

「こつこつ風な、ゆっくりできる時間はいいもんだな」

自然と一人ごちってしまった。

「魔力みたいな何かがあるような気はするんだけど、どうもそれはつきりしないんだよねあー」

そう言いながら空中で手を握る動作をしていた俺の耳に、草むらから音が聞こえてきた。

第13話 あるーひ、もりのなか

何者かが草を揺らす音に驚き、音のしてきたほうを見つめていると、草むらが揺れ、音がした。

俺は少し距離をとり、なおもその場所を注視する。

いったいなんだ？何か危険な生き物じゃなければいいんだが……

俺の中に不安がよぎった瞬間、その生き物は姿を現した。

黒色の体毛が全身を覆い、その口からは牙が見え、手には鋭そうな爪を生やした生物、俺が知るその生物の名は……

——その頃

コーヒーカップを片手にグレイ、ライラ、エリスは談笑をし、傍ではミリイがポット片手に待機していた。

「それにしてもリユーヤはどこいったんだ？」

「森の中に散歩に行くと言っておりました」

「うーん、そうか」

グレイが少し不安そうな顔をし、それにミリイが疑問を覚える。

「何かいけなかったでしょうか？」

「この山、クマが出るって聞いたけど、たぶん大丈夫だろ」

そう言われてミリイは少し心配そうな顔をして森のほうを見つめ

た。

——そんなことはつゆ知らず、俺はそのクマと対面していた、ただし、一ついうならば目の前に出てきたそれは明らかに小さい。

「なんだ小熊か」

そうつぶやき、その場を立ち去ろうと振り返り、歩き出そうとしたときに背後から聞こえる動物のうなり声、普通に考えれば子供がいれば親がいる、当然今回も例外ではない。

再び後ろを見るとそこにはさっきの小熊とは比較にならないようなクマが2本足で立ちあがっていた、その全長は2メートルほどであろっか。

お、落ち着け俺、あの熊は小熊を守ろうとしているだけのはずだ、ならばゆっくりと退けばなんにもしてこないはず。

ゆっくりと後退する俺、しかしさっきまで立ち上がっていたクマは4本の足で地を踏みしめ突撃をしてきた。

もうここまで来たら、落ち着いてなどいられない俺は背を向けて走り出す、依然聞いた話を元に山を下るように走る、そしてそれを追いかけて来るクマ。

こんなところで死んでられるか、魔法さえ使えれば倒せるだろうに、なんで俺は使えないんだよ。

魔力はそこら中にあるはずなのにそれが見えてないだけで使えない、そのことが悔やまれる。

なんとか今は逃げていられるがいつ追いつかれるかもわからない。

俺は必死で魔力を感じようとする。

一瞬、何かを感じる

その感覚は今まで感じたことのないものであった、そしてそれが魔力を感じることものだと本能的に理解した。

さっきの感覚を頼りに集中する、息も切れ始めてきて追いつかれるのも時間の問題である。

魔力……魔力…魔力

そして再び、さっきの感覚がやってくる。

「見つけた」

それは確かに口で説明できるようなものではなく、感覚の問題である、そこに魔力があるのがわかるそうとしか言えない。

俺は火の魔力を集めることをイメージし集め始める、そして俺はつぶやくように詠唱を始める。

詠唱の最後の一言を述べると同時に手をクマのほうに向けて立ち止まる。

「敵を討ちしは火弾」

そして俺の手の中に集まった火の魔力は……拡散していった。

当然魔法は発動しない。

この時、俺は忘れていた。

魔力を自身の魔力と同調させなければ魔法は発動できない。

俺に突進してくるクマ

魔法が発動せずに立ち止まっている俺

俺はとっさに保存していた剣を手元に出し、それでクマの突進を防ぐ。

直接の衝撃は防げたがそれでも、俺は弾き飛ばされ地面を転がる。

俺を突き飛ばしたクマは俺の目の前まで来て立ち上がり、その両手を振り下ろす。

俺は横に転がりそれを何とかよけるがクマとの距離はいまだに近い、そのうえ俺はさっきの突進を受けて手がしびれている。

はつきり言つて絶望的な状況である、俺が保存していたのは今、手に持っている剣だけであり、今の俺に残された選択肢は勝つ見込みのない戦いをするか、誰かが助けに来るのを信じて逃げ続けるかのどちらかである。

逃げても追いつかれるのはさっきの様子から確かだろう、しかも山を下りながら逃げているのだから誰かが来る可能性は下がっている、く、なら……戦うしかないか。

ここ最近ミリイに叩き込まれた構えでクマに対峙する。

はっきり言って勝ち目はないが、このまま逃げて背後から一撃を食らって死ぬよりはましだ。

まずは手のしびれが取れるまでの時間を稼がないといけない、こんな状態では切りかかって薄皮一枚裂いて終りである。

ある程度距離をとった俺に対してクマは一向に攻撃を仕掛けてこない、徐々に手のしびれも取れてきてもしかしたらこのまま逃げられるのではなどと思っていた矢先に、再びクマが突進してくる。

俺がそれをよけようとおもって腰を落とすが、クマは俺から数歩手前で立ち止まり威嚇をしてくる。

そのあとクマはなかなか攻撃してくる気配を見せず、俺は徐々に距離をとっていく、そしてクマから10メートルほど距離をとったあたりで、再びクマが威嚇をしてきて何事かと思うと何とも残念なことに小熊が俺の後ろにいないか、俺は知らず知らずのうちにクマの逆鱗へと手を伸ばしていたようだ。

それに気が付いたときには時すでに遅し、俺を敵とみなしたクマは再び突進してくる、今度は手前で止まることもなくおれは必死で横に跳んでよける。

安堵するまもなくクマが突撃してくるのでそれをまたよける、クマを倒せる可能性があるとするればあの突進の瞬間だけだろう、すでに3回見て大体のタイミングは計れている、あとはそのタイミングに合わせて剣をふるう勇氣と覚悟それだけである。

魔法がつかえたらなどと周りに魔力を感じながら、ありえない可能性に思いをはせる、そんなことをしているうちに再びクマはこちらに向かって走ってくる。

まだだ、もう少し、今だ！

「うおおおお——！！」

俺は気合とともに剣を振り下ろす。

その剣はクマの突進の速度と相まって、クマの脳天に直撃しクマの頭蓋を砕く、それでも勢いの止まらないクマに俺に弾き飛ばされ俺は地面に打ち付けられる。

肺にダメージを受けせき込む、クマの様子を確認しようと思っていたんとか立ち上がると、クマは頭から血を流して動かなくなっていた。これも生きるためだ、しょうがない、俺は熊を殺したことを自身の中で肯定しながら屋敷を探して山の中を歩いていく。

それから十分ほど歩くと以前上った山道を見つけなんとか屋敷に帰れた、俺の様子を見て駆け寄ってくる人影を確認すると俺は安心から気を失った。

第14話 風邪で学校休んだ時とかって暇だよ

俺が目覚めると、周りはこの別荘に来てから俺が使っている部屋であつた。

俺が上体を起こした時、部屋の扉が開く。

「ミリイ、できればソックスをしてくれるとうれしいかな」

「リユーヤ様、お目覚めになられていたのですか、申し訳ありません」

そういつて頭を下げるミリイにたいして、逆に申し訳ないような気がしてくる。

「えっと、そんなに気にしてないから頭上げてくれ」

俺がそう言うのとやっとミリイは頭を上げてくれるが、まだ何か言い足りないといった表情をしている。

無理に聞き出しても、ろくなことはないから向こうが話す気になるのを待つか。

「とりあえずいくつか聞きたいことがあるけど大丈夫かな？」

「はい、私がお教えられることなら」

そのあと俺は、ここに誰が運んでくれたのかや、なぜ怪我が治っているのか、俺はどれぐらい寝ていたのかななどを訪ねた。

それに対しての答えは、まずここに運んだのはミリイで散歩に行

って帰ってこない俺を心配して探していたところ、体中にいくつも小さな傷を作った状態でふらふらと歩いている俺を見つけ駆け寄ったところで俺は気を失ったらしい。

おそらく、小さな傷などは気づかぬうちに木が何かに引っ掛けてできていたのだろう。

怪我は肋骨や腕の骨が折れていたそうだが、エリスが直してくれたそうだが、なぜエリスなのかはわからない、とりあえず後で礼を言っておこうと思う。

俺が気を失っていた期間は約1日ほどだったらしい。

俺もクマに襲われて、山の中を駆け回ったことを話す。

「そうか、ところで気を失っていた間の看病はミリイが？」

「はい」

服を着替えているがまさかこれまでミリイがやったのだろうか、できることなら違って欲しいが、怖くて本当のことが聞けない。

そんなくだらないことを俺が悩んでいる、とミリイが口を開く。

「申し訳ありませんでした」

そういつてミリイが頭を下げる。

俺は突然のことに戸惑ってしまった。

「え？ な、何？ なにかしたの？」

「今回のことは私が山の危険度を見誤ったことが原因です」

その声色からは自身を戒め、後悔しているような悲痛な雰囲気を感じられる。

「ほら、でも俺はこうして生きてるわけだし」

「魔法がつかえないリユーヤ様が生きて帰ってこられたのは奇跡です……」

そう言いながらミリイはうつむく、その様子を見て俺は口を開く

「奇跡でもなんでもいいじゃん」

そういつとミリイが顔をあげ何かを喋ろうとするのを手の平をミリイの前に突き出して制す。

「今、俺は何の問題もなく生きてるんだから、次から気を付ければいい話だろ？」

この話はもう終わりでいいよ」

我ながら少しお人好しな気もするが、実際謝られたところで俺には何の得もないのだからこれでいいのだろう。

「わかりました、次回からは気を付けます」

そう言って、部屋を後にしようとするミリイに声をかける

「あ、ちょっと待ってくれ」

「なんでしょうか？」

「いや、腹が減って……」

腹をさすりながら俺は苦笑いをする

「では、何か軽く食べられるものを持ってきますから、そこで安静にしてください」

そういつてミリィは部屋を後にする、それから数分後扉が開きミリィが来たのかと思いそちらのほうを見ると、そこにはグレイがいた。

「おう、気が付いたって聞いたから、ちょっと顔出しにきたぜ」

「できればノックしてくれるとありがたかったけどな」

そんないつものやり取りに安心したのか、グレイはベッドの脇に椅子を持ってきて座った。

それからはクマとどう戦ったのかなどを聞かれ、俺は話を少し大袈裟にしながら話してやった。

「それであんな怪我してたのか」

怪我のことを言われてふと思い出す。

「そういえば、エリスが怪我を治してくれたって聞いたけど、なんでエリスだったんだ？」

「ああ、エリスの属性は回復だからな、今回のリユーマの怪我は結構ひどかったからエリスに頼むのが一番だったんだよ」

なるほど、あいつの属性そんなだったのか。

そんな話をしているとミリイがサンドウィッチを持ってきてくれ、俺はそれを軽く平らげた

「そういえば俺、魔力感知できるようになったぞ」
「ほんとか!？」

グレイは驚きを言葉にし、皿を片付けに部屋を出ようとしていたミリイは振り返る。

俺は証明のために火の魔力を手に集めてみせる。

「なるほど、確かに集まっていますね。それでは、次からは同調の練習に移りましょう」

「じゃあ、今すぐ準備するよ」

そう言っただけでベッドから出ようとすると、俺はミリイに肩をつかまれベッドに寝させられる。

「今日はやめておきましょう、まだ体力が回復していませんでしょう」

俺はそれに対して反論を試みるも、ことごとく断られ結局、その日は訓練を認められずベッドの中で過ごした。

——次の日の朝

俺はミリイに起こされ朝食をとりに食堂に向かう

俺はすでにいた3人にあいさつを済ませ席に着き、俺の隣ですでに食事を開始していたエリスに声をかける

「俺の怪我エリスが治してくれたんだろ？　ありがとな」

それに対して一瞬視線をこちらに向けたが、すぐに視線を元に戻す

「気にするな当然のことをしたまでだ」

相変わらず可愛げのない奴だな、などと思ってみるが世話になつたし、それに後が怖いので黙っておこうと思う。

そのあと食事を終えた俺はミリイとともに庭に出た。

「よし、じゃあ魔力の同調のやり方教えてくれ」

「では、魔力を集めてください」

俺はうなずき、右手に火の魔力を集める。

「その状態のまま体内の魔力を左手に出してください」

俺は言われたとおりにし、両手に別々の魔力を持つ。

「次はどうするんだ？」

「その二つの魔力を重ねるようにしてみてください」

俺は右手と左手の平を近づけて行き魔力を重ねあわせようとするが、なかなか重ならない

「あれ、上手くいかないぞ？」

「もう少し待っていてください」

言われた通り、待っていると徐々に魔力は合わさり一つになった。

「おお、これが同調か」

「はい、これは自然界に存在する魔力がほかの魔力と波長を合わせようとする性質を利用した方法です」

「でも、今のじゃ時間かかりすぎじゃないか？」

「そうですね、リユー様は火の魔力とは相性が良くないみたいです。とりあえず別の属性も試してみましょう」

すべての属性との同調を終え、俺は最後に同調させていた土属性の魔力を解放し、魔力が分散していく。

「リユー様は、水との相性が一番良いみたいです、風もなかなか早いのですが、ほかの二つはかなり遅いですね、土のほうがまだ火よりは早かったです、戦闘中に使うには少し厳しいところがあるかと」

「じゃあ、俺は火と土は戦闘中は使えないってことか？」

俺の言葉にミリィは首を縦に振る。

「魔力の性質を使わずに波長を変化させれば可能ですが、魔力に慣れていない今のリユー様には厳しいですね」

「出来ないものはしょうがないか、それでこれからは何の練習をすればいいんだ？」

「今の魔力の同調を片手で行えるようになっていただきます」

何だそんな事かと思い、俺は早速実践してみようとする。

「そんなの簡単だろ、右手に水の魔力を集めて右手から魔力を……」
そういつて魔力を右手から出そうとした瞬間に水の魔力が拡散していく。

「あれ？」

「今やっていただいてわかっていただけたかと思いますが、魔力を片手に集めながら放出するという全く逆の概念を持った行動をするのでどちらかが疎かになると失敗してしまいます」

なるほど、じゃあ右手に魔力を出してから水の魔力を集めれば……
あれ、水の魔力が集まってこない

「その方法では魔力を集めようとしても魔力が反発しあい集めることができません」

「集めてから魔力を出しても反発するんじゃないのか？」

「反発はしますが集めるのと違い、すでに手中にあるので片手に二つの魔力を保持することが可能です」

つまり、それしか方法はないってことか。

「では、練習を始めましょう」

第15話 べ、別に負けたって気にしない

「おし、できた」

俺の右手には同調に成功した水の魔力を納まっている。

同調の訓練を始めて二日目、なんとか5回に1回くらいは成功するようになってきたが、それは魔力だけに集中すればのこと、最終目標は戦闘中に使えるようになることなので、他のことをしながらも100%成功するようにしなければ意味がないということなので、まだまだ道のりは長い。

「今日はこれくらいにしておきましょう、剣のほうも練習しないといけませんし」

「了解」

そう言っただけ俺は魔力を霧散させ、代わりに右手に剣を出す。

「大体の基本の形は教えましたので、今日からは組手形式の練習をしたいと思います」

「組手って、もしかしてミリイと?」

ほかに相手が思い浮かばなかったので、俺はそう尋ねる

「はい、そうですが?何か問題でもありましたでしょうか?」

いかにも問題なさそうな雰囲気言い放つミリイ、しかし俺からしたら十分に問題である

「いや、流石に女性に切りかかるのは気が引けるといふかなんといつか……」

もし怪我をさせてしまったらという不安から俺は口ごもる

「安心してください」

次の瞬間に俺の視界が回転し、気が付けば天を仰いでいた。

俺は、一瞬何が起こったかわからなかったが、ミリィに足払いを食らってこけさせられたことに気付く。

「組手といってもリュ・ヤ様は私に一太刀も入れることはできないのでご安心ください」

そう言って笑顔で俺に答え、手を伸ばしてくる

俺はミリィの手を借り立ち上がりながら、安心よりも情けなさに襲われた。

これまで数日間訓練を重ねて、クマも倒せたこともあって多少は強くなった気でいたが、どうやらこの世界では熊殺しは何の自慢にもならないらしい。

俺はそのあとミリィ相手に組手をするも一太刀も入れれないどころか圧倒的すぎる力の差に愕然とするばかりだった。

——それから三日後

俺は片手での同調もすでにこなせるようになっており、今は組手

中に魔法を使えるようになることを目標に練習を続けているが、成功回数は今までで1度だけでとても戦闘中に使えるような状態ではなかった。

「魔力ばかりに集中していますと、攻撃を受けてしまいますよ」

俺が同調に集中している隙についてミリィが足払いをしてくる。

いくら手加減をされているからと言って魔力に集中していた俺は避けることができずに転ばせられる。

「一度は成功したんですから頑張ればできますよ」

そう言っただけで励ましながら手を貸してくれるミリィ。実際のところ一回成功したといっても打つ方向を間違えて外しているので成功と呼べるか怪しい

「じゃあ、もう一回頼むわ」

そう言っただけでミリィと、ある程度の距離をとる。

「ではいきます」

その声と同時にミリィは駆け出し俺は剣を持って構えながら同調を開始する。

俺はミリィが間合いに入る瞬間を見計らい剣を横に薙ぐ、それをミリィは姿勢を低くして回避しそのまま足払いを繰り返してくる。

俺はジャンプして避けそのまま空中で蹴りを繰り返すが、ミリィ

は後ろに下がりよける。

そして珍しく今回は魔力の同調に成功した俺は詠唱を開始しながらミリイと距離をとる。

「逃がしませんよ」

そう言って駆け出すミリイに対して俺も前方に駆け出す。

あと数秒で間合いに入るといった距離に来た時に俺は剣を再び横に薙ぐ

「その距離では当たりませんよ」

そう言って蹴りを繰り出すとするミリイ、それに対して俺は剣を切り返す。

切り返しに気付いたミリイは蹴りを中断してすれすれで剣を回避する。

そして俺の詠唱は完了する。

「敵を穿つは水弾」

その一言とともに俺の左手から水の水弾が放たれる、距離は1mもない、一瞬けがをさせてしまうのではという不安がよぎるが、水弾はミリイの手前20cmほどで弾け飛んだ。

「よかった」

怪我をさせずに済んだと安心した瞬間に、ミリイの蹴りが脇腹に入る。

「ぐふっ」

そのまま俺は脇腹を抱えてうずくまる。

「あ、すみません、思っていたよりいい動きだったものでつい強めに蹴ってしまいました」

ミリイは少しあわてながらかみこみ俺の様子を伺う

「だ、大丈夫だ」

俺はそう言ったが明らかに無理をしているのはバレバレだろう。

「少し休みましょうか」

そう言ってミリイは苦笑いをする

少し休みダメージも抜けてきたところに俺はミリイに疑問を投げかける。

「さっき俺が魔法撃った時なんで途中で消えたんだ？」

まさか同調が不完全だったとかそんなのでは困るので聞いてみた

「あれは私が弾いたんですよ」

「え、でもそんな素振りはなかっただろ？」

その質問を受けてミリィは右手の上に水の玉を作り出す

「確かに私は先ほど魔法も使用していなければ触れてもいません、しかし」

そう言ってミリィが左手を軽く振ると水の玉が先ほどのように弾けた。

「武器を使いました」

そういえばミリィの武器を知らないな、などと思いつつ尋ねる

「そういえばミリィの武器ってなんだ？」

「私の武器はこれです」

そう言ってミリィが袖をまくり腕輪を見せてくる

「その腕輪は？」

まだ理解できない俺はさらに尋ねる

「これは魔力を糸状にした魔力糸というものを出すことのできる魔道具で作り出した魔力糸は自由に扱えてさらにかかなりの強度があります」

それが何なのかは分かったがそれだけではまだ足りない。

「でもそれだけじゃさっきみたいに水を弾くのは難しいんじゃない？」

「はい、ですが私は固有属性の能力でそれを可能にしています」

そういえばミリイの属性って聞いた事なかったな。

「ちなみにミリイの属性は？」

俺は期待を胸にそう尋ねた

「私の属性は音です」

「音？」

俺が訊き返したのに対して、ミリイはうなずき口を開く

「はい、私の場合は作り出した魔力系を音の振動により高速振動させることにより攻撃、防御に使用します。この道具は一つで最大20本までの魔力系を作成できるので両手で40本の魔力系を作成できるので便利なんですよ」

「なるほど、便利なもんだな」

「はい、ですが魔力の消費が激しいのであまり使いたくないのが本音です」

俺が感心していると、ミリイがそろそろ再開しようかと提案してきたので俺は再び組手を開始する、この日はそのあとも何度か魔法を発動させられたが、結局俺が地べたに転がるという結果は変わらなかった。

——次の日

「魔力の扱いも多少慣れてきたようですし次の段階に入りましょうか」

組手の休憩中にミリイがそんなことをいい出した

俺はタオルで汗を拭きながらそれを聞き小首をかしげる

「次の段階ってなんだ？」

「次の段階では強化魔法を覚えていただきます」

第16話 頑張ればきつと報われる

「強化魔法？」

俺はどこかで聞いたことがあるような気がするが思い出せずに小首をかしげる。

その様子を見て呆れたようにミリイが口を開く。

「もう忘れたんですか、この前勉強した中であつたと思いますが自身の魔力だけで使用できる特例の総体魔法です」

そう言われてこの前勉強した中にそんなのがあつたななどと思いつ出す。

「確か、魔力で肉体を補強するとかつてやつだったけ？」

俺がそういうとミリイはうなづく

「おおむねはそんなところですね。この魔法は体内で魔力を解放し、その魔力の持つ力を肉体の力に反映させるといったものです」

その説明を受け俺は疑問を持った

「聞く限りは簡単そうだが、なんで今まではやらなかったんだ？」
「確かに口で言うのは簡単ですが、実際に行うには体内に魔力を収め続けられるだけの制御能力が必要です」

俺はその説明を受けて納得した、今は多少の魔力を手のひらの上

に留めておくだけでいいが、体中となればその魔力量は膨大になり当然制御することも難しくなる。

「つまり、練習あるのみってことだな」

「はい、そういうことです」

俺は早速体中に魔力を巡らせていく。

俺が意外と楽だななどと思っているとミリィが口を開く。

「リユーヤ様そんなに魔力を垂れ流して何故そんな自信ありげな顔ができるのですか？」

俺はその言葉を聞いて驚いた、確かに魔力は体の中に感じるが魔力の供給をやめると減って行くのがわかる。

「あれ、これって俺が思ってたよりきついかも」

ミリィがため息をつく。

「そんな簡単にできるのならば始めから練習させてますよ」

なるほど、それもそうだな。

その後も俺は肉体強化の練習を続けるが途中で魔力切れになりいつもよりも早く訓練を切り上げる。

俺が部屋に戻ろうとしているとどこかから掛け声のようなものが聞こえてくる。

俺は声のする方へ行ってみるとそこではグレイとエリスが組手を

していた。

エリスは自分の背丈ほどもある細身の剣を振るが、そのすべてをグレイは躲していく。

「ほらどうしたエリス、そんなんじゃ俺には当たらないぞ」

エリスはグレイに挑発され剣速を上げるが、グレイは涼しい顔でそれを躲してゆき隙について背後に回る。

「ほら背後とられたらダメだろ？」

「予想の範囲内です」

そう言い終わるよりも早くエリスは剣を回し逆手に持ち替えたかと思うと自分の脇から後ろに向かって剣を突き出すが、グレイは自分に向かって迫ってくる剣を見ても涼しい顔のままである。

「悪くはないけど、少し甘いな」

そう言いながら体を半身にし、避けると同時にエリスの首筋に手刀を添える。

ちなみに今のは、ほんの数秒の間の出来事であり俺から見たら全く何が起こったのかわからなかった。

「はい、これでまた俺の勝ち」

そう言いながら笑うグレイに、不満げな顔になるエリス。

「兄上に勝てるわけがないではありませんか」

「まだ兄貴として負ける訳にはいかないからな」

そう 그레이 が言っていると ミリィ は余計にむくれる。

「ところで、リユーヤはいつまでそこで固まってるんだ？」

「いや、俺にはついていけないような次元の戦闘じゃなかったからな、ただただ見とれてただけだよ」

俺が肩をすくめながらそう話すと、不機嫌な エリス が毒を吐く。

「貴様が付いていける次元の戦いであつたならば、練習にはならないではないか」

全くを持ってその通りだがここでただただ言われるだけなのも性に合わない

「そういうお前も、まるで 그레이 の練習相手にはなつてなかったみたいだな」

正直いって、大人げない発言だとは思っている。

俺と エリス は睨み合う

「ならば私が稽古をつけてやろうか？」

エリス が高圧的な姿勢でそう言ってくる、下からなのに高圧的とは言いいえて妙な話である。

「お前と俺が戦うつてのか？」

確かに今俺は魔力切れで手に剣も持っているが、先ほどの様子を見たかぎり勝てる見込みなどありはしない。

「そうだ、私が貴様に直接剣技というものをたたきこんでやろう、強化はせずに戦ってやるから安心しろ」

今にも切りかかってきそうなほどの気迫を出しながらエリスは不敵な笑みを浮かべる。

その様子を見て俺は顔から恐怖の色を消して、一度は言ってみた
い名言を吐く

「だが断る」

その言葉を聞いた瞬間にエリスの眉間にしわがより、青筋が浮かび上がる。

「ならば無残に斬られるがいい!!」

そう言ってエリスは剣を振りかぶる。

俺は言いたいことは言った死んでも悔いは……残るよなやつぱり。

俺がさっきの発言を悔いるも、なかなか剣は振り下ろされない、それもそのはずであるエリスの後ろで 그레이が剣を両手で挟んで抑えているのだから。

「エリス、リユーヤを斬っちゃダメだろ」

まるで諭すように言う 그레이。

グレイに諭されて少し落ち着いたのかさっきまでの気迫が弱まっていくなのがわかる

「申し訳ありません、少し感情的になりすぎました」

少し気まずそうにエリスがそういうと、グレイがこちらを向く

「リユーヤもあんまりエリスを怒らせるなよ。まあ、エリスなら斬っても大抵の怪我ならすぐに治せるから問題ないっていえば、ないような気もするけど」

いや、問題あるだろ、それだと俺が痛い思いするし。

俺は身の危険を感じとりあえずエリスに謝るが睨まれ、そそくさと逃げるようにその場を後にした。

それにしても俺が訓練してる間にあいづらも訓練してたんだな、などと思いながら自室に戻る。

俺はシャワーで汗を流し、せっかく時間もあるので勉強の復習を開始する。

俺は一体いつからこんな真面目君になってしまったのだろうか？

それから数日は徐々に上手くはなっていたが強化をすると必ず魔力を浪費し、魔力切れを起こして訓練は終了、そのあとは勉強の復習といった生活を繰り返した。

「強化もだいぶ上手くなりましたね」

今の俺の体からは魔力は漏れ出していない、しかしここから体を動かすと集中力が足りないのか魔力を抑えきることができなくなってしまう。

「でも、動けないんじゃ強化した意味ないだろ」

「ここまで来ればもう少しですよ」

確かにもう少しなのだろうがそのもう少しがきつい、確かに体が軽く感じ動きもかなり良くなっているが、ずっと魔力に集中している分精神を摩耗していく。

「こんな状態で戦えるのかよ」

俺はつい愚痴をこぼす

「慣れればなんてことはないですよ、むしろ慣れてください、そうでなければ戦えません」

この世界に来て、俺の持つ魔法というものに対して考えは大きく変わった、まさか魔法がこんな血のにじむような努力の上に成り立っているなどとは考えたこともなかった。

それから俺は訓練を続け試験が来週に迫った日になってようやく強化を使いこなせるようになった、今の俺からしてみれば同調など朝飯前である。

まあ、これも単に毎日訓練に付き合ってくれたミリィのおかげであらう。

俺は強化を使いこなせるようになった日に山から下り試験に備えた。

第17話 テストって受けるときより返される時のほうがつらい

俺が正座している目の前で、ミリィがため息をつく。

「呆れて言葉も出ませんよ、いったい今まで何をやっていたんですか？」

何と言われれば勉強や訓練などいろいろやっていたが、今、口を開いたら殺られると思い、黙ったまま床を見つめる。

「まったく、あんな簡単な問題ばかりなのにこの点数……」

なんとか、反論しようと思って俺は口を開く

「数学は満点じゃないか……」

それでもミリィの気迫に押されて徐々に声が小さくなっていく。

「ええ、そうですね私が教えていない数学“だけ”はよかったみたいです」

よほど自分が頑張って教えたことを俺が生かせなかったのか、さつきからこんな調子で俺は説教を受けている。

俺が試験の時、どんな感じだったかというと

——「はい、始めて」

やる気のない感じで試験官の中年男性が灰色のぼさぼさ頭を掻き

ながら開始の合図をする。

俺はその合図とともに、1教科目の歴史のテストに臨む、もともと理系の俺に歴史をやらせるのも問題だが、全く知らない世界の歴史の問題を解けというのだ余計にたちが悪い。

出来はなんとかあったかなといったところだった。

2教科目の言語学にしても同じようなものだった。

3教科目の数学はつきり言ってこいつは楽勝、いったいこの世界の科学はどこで止まっているのだろうか？

4教科目魔法学、魔法というものに今まで触れたことがない割には頑張ったと思う、うん頑張ったそう思いたい。

さて問題の実技試験、つまり戦闘だ。

俺は試験官につれられ、校庭に移動する。

校庭にはぼつんと人形が置かれていた。

人形といっても、魔道具の一つで魔力を注ぎ込んだ者の命令に従い動くものである。

「お前の相手はあれだ」

はつきり言って人形があいてなのは都合がいい、人形は動きと頑丈さは人間のそれを超えるが魔法を使うことができない、しかも肉体強化さえ使えば大抵は人のほうが動きはいい。

これなら勝てると思っていると、試験官が説明を始める。

「今回の試験はあくまで実力を測るためのものだ、ただ勝てばいいってもんじゃないからな。」

そういつて試験官が人形に魔力を注ぎ込むと、人形は立ち上がる。

俺も肉体教科を施し、剣を出し構える。

そして試験官の開始の合図で俺は人形に向かって走り出す、しかし人形はその場から動かない。

俺は、そんなことは気にせずに切りかかるが人形は一太刀目を避ける、二太刀、三太刀目も同様に避けられる、そこで俺は気が付く。

この人形、避けることだけを命令されている

人形から攻撃してこないのならば俺の負けはない、しかし俺の攻撃も上手くはない、つまり、どうやって倒すのかを見て実力を判断するということだろう。

俺の使える技はせいぜい風と水の初級呪文と拙い剣技程度である、これでどうやって倒すか。

正直な話、水と風の属性は火や土に比べて威力が弱く決定打にはなりえない、やはり魔法を牽制に使い隙について剣でとどめを刺すしかない。

俺は再度人形に切りかかる、人形はやはりそれを楽に避ける、しかし今回はこれだけでは終わらない。

「敵を弾きしは風弾」

風属性の魔法は確かに威力は弱いが速度はある故に牽制には向いている、一度攻撃を避けて体制の整っていないところにこの魔法が当たれば体勢を崩せる。

予想どおり人形は風弾を避けきれずに体勢を崩す、俺は体勢を崩した人形に向かい剣をふるうが、人形は回避を試み、そのせいで俺の剣はかする程度のとどまり、再度距離をとられる。

風でダメなら、次は水か？

いや、風でもかすった程度なら水では当たりもしない可能性が高い、ならあれを試してみるしかないか……

ここ1週間で練習してきて、まだ完全ではないにしても形はできている。

俺は成功することを祈り人形に向けて走り出し袈裟切りを繰り返す、当然のようにそれを避けた人形に向けて風弾を撃ち体勢を崩す、ここまでは先ほどと何も変わらない。

俺は右手に持つ剣を袈裟切りし終わった体制から切り返す、当然先ほどのように人形は無理やり回避をしさらに体制を崩す、しかし今度は剣がかすることはなかった、すでに俺の右手には剣はなく、代わりに左手に剣を握りしめており、俺は人形の首めがけて剣をふるう。

当然そのあと繰り出される左手の斬撃を避けることはできず人形の首が飛び動かなくなる。

「はいそこまで、おつかれさん」

その様子を見て試験官が終了を告げる。
結果は後日グランツ家の屋敷に送ると言われ俺は付き添いについできていたミリイとともに屋敷へと帰った。

——以上が試験の様子だ。

まあ、これで分かってももらえただろうが、筆記試験は数学以外壊滅的状况だった。

そんなことは一言も言っていないって？

出来が良かったと思ったとき以外はたいい壊滅と相場は決まっている、よかったと思っただけでも壊滅状態な時もあるが。

とりあえず、少しでもミリイの機嫌をよくするために何か言い訳をしなければ。

「あ、でも実技のほうでは最後に練習してたあれ出来たよ」

「保存を利用した武器の持ち替えのことですか？あんなのはできて当然だと思っていました」

そういうミリイの顔はいつもと何も変わらないが、雰囲気は怒りを見て俺は縮こまる。

「そ、そうだな」

今のミリイにとっては焼け石に水だったようだな、普段なら多少の賛辞をおくってくれるところだろうに。

筆記科目の復習はしたって言いながら隠れてその練習ばかりし

てたせいで、筆記試験のほうは散々だったんだけどね

どうやってミリイに怒りを鎮めてもらおうかと悩んでいると、そんな様子の俺を見てミリイはため息をつく。

「まったく、ぎりぎり合格できたからいいようなものの、もしできていなかったら」

うん、そうなんだよ受かってるんだよ俺、たぶん数学が満点だったから他をカバーできたからだけど受かっちゃってるんだよ。

なのにこんなに怒られるのっておかしくないか？

37日間で大学受験の勉強、最初から初めて受かったようなものだよこれ？

まあ、受かったってだけでほぼ奇跡なのにこちらのメイドさんは不満たっぷりみたいでもうどうしろってんだよ。

「聞いてるんですか？」

「は、はい！」

うん、黙って正座しておこう、いい加減足しびれてきたけど今は黙って怒られるしかないよ。

だって……さっき部屋に突撃してきた 그레이 が一瞬顔を引きつらせるくらいには怖いんだよ。

きっとミリイは教育ママになるんだろうなあー、などと考えつつ正座し続けること約1時間、俺はやっとのことで解放され今後はミリイのことは怒らせないようにしようなどと誓いつつ眠りにつく。

ちなみに、そんな誓いは次の日には忘れていたことは言うまでもない。

第18話 引っ越しの時の段ボールって邪魔だよな

「それにしても試験の時もそうだが、学校まで遠すぎないか？」

今、現在俺は学校のある街へと向かう車の中にいる。

車と行っても俺の元いた世界のものとは違い、風の魔石により車体を浮かせての移動をするものであり、揺れの面でいえば自動車よりも優秀だろう。

「しょうがないですよ、王立学園には王都だけでなくほかの街や村からも人が集まるので私たちがいくリブヤタンが北西、ベヘモットが北東から南東の一部、南東および南西の一部の者はジズに通うことになっておりますからどの場所からもしやすいところに作るしかないんです。」

魔物がはびこるこの世界においては戦えないことは死を意味するらしく、義務教育期間は12年で学費は無料の全寮制らしく夏休み、冬休み、春休み以外はその学園を中心として形成された都市で生活するらしい。

「それにしても、転移ってどこにでも使えるわけじゃないんだな」

「はい、これから行く学園では王都の中心部と同様に転移で入り込むことが禁止されております」

まあ、実際問題そんな簡単に入り込めるようにしていたら危険すぎてたまらないもんな。

そんなことを考えながら窓の外で流れていく自然豊かな景色を眺

める。

街は基本的に城壁で囲まれており、一步その外に出れば自然豊かな地形が広がっており、まるで城壁の中と外とは別の世界のようなものである。

車に乗って移動すること約1時間、目的地となるリブヤタン王立学園を中心とする街が見えてきた、その規模は王都ほどではないがおそらくこの世界では大きいほうであろう。

俺は街の中の様子を眺めながら、車に乗っていると校門の前に着いたようであり、車は停止する。

「相変わらずでかいな、この学校は」

そう言いながら俺は車を降りて学校を見上げる。

「まあ、この敷地内に全部で16の寮と初等部、中等部、高等部の校舎がありますからね、それなりの敷地面積は必要ですよ」

ちなみに、この国では初等部、中等部、高等部はすべて6年制らしく、歳からいえば俺は高等部一年。

俺とミリイが今日ここに来たのは編入の手続きのためである、寮の入居だのなんだのめんどくさいのがあってそのためには本人が直接学校に来ないといけないらしい、全くを持って迷惑な話だ。

俺はそのあと事務室のような場所で学生証や学生服などいろいろと渡され、ハンコ代わりになんかよくわからない紙に魔力を注ぐ。

そして、16号棟が俺の入る寮だということを告げられ俺とミリイはその寮に向かう。

寮につき、管理人室にいたおばさんに部屋番号を聞き俺は部屋へと向かう。

「えーと、ここか」

俺は自分の部屋を見つけ鍵を使い扉を開く、まさかのタッチ式カードキーだったことには驚いた。

「リユー様、では私は自分の部屋に参りますので」

「ああ、荷物俺があずかってるんだったな、部屋まで運ばなくていいのか？」

「はい、大丈夫です」

実は、俺の世話係としてミリイもこの学園に編入することになっている。

別に一人でも問題はなかったのだが、知り合いがいるに越したことはないので快諾した。

俺は保存していたミリイのカバンを出しミリイに手渡す。

「では、後程お迎えに上がります」

「ああ、またあとで」

まだ、こっちで色々と買っておかないといけないものがあるらしく部屋に荷物をおいたら街に買い物に行くことになっている。

俺はミリィに別れを告げた後に部屋の中に入る、部屋の間取りは1DKといったところだろうか、それなりに広く収納スペースも多い。

この寮は食事が付いていないため、寮の食堂で金を払って食べるか、自炊するのが基本である。

まあ、俺は料理はそこそこできるので自炊しようかと考えている。

とりあえず、このなにもない部屋では何もできないので荷物を出して、床に座りミリィを待つ。

そのあと、ミリィが迎えに来て買い物に行き、家具や料理器具、その他もろもろを買い部屋へと帰ってきた。

流石に荷物の量が多くなり、保存に使う魔力が回復速度を上回り、寮に戻った時にはほぼ魔力切れ状態だった。

流石に家具などもあるので今度はミリィの部屋まで荷物を運び込んだ。

俺がミリィに言われた通りの配置に家具を置いていき、他の荷物を置き部屋を後にした。

その後俺の部屋も家具を置き荷物を片付け、ちょうど一息入れようと思ったところでミリィが俺の部屋へやってきた。

「どうした？」

「夕食ができましたのでお迎えに上がりました」

買い物時に夕食の話になり今日はミリィが作ってくれるということになっていた。

俺が料理ならできると伝えたら、『数学以外にもできるものがあったんですね』などと皮肉を言われた。

「ちょうどひと段落したところだったんだよ」

そう言いながら俺は部屋を出てミリイの部屋に行く。

食事を終えた俺は両手をあわせる。

「ごちそうさん」

「お粗末さまでした」

ミリイの料理はかなり上手く、軽々と平らげることができた。

食べ終わった皿を片付けだすミリイに俺は話しかける。

「そういえば、ミリイもここに通ってたのか？」

「はい、義務教育でしたので」

「じゃあ、友達もここにいるのか？」

俺の問いに対してミリイは首を横に振る。

「いいえ、私は使用人養成のための特別クラスに通っておりましてので中等部卒業と同時に皆この学園を出ました」

俺はその話を聞いて疑問を持った。

「使用人で、養成しなきゃいけないもんなのか？」

「はい、仕える主人の身の回りの世話は当然のこととして身辺警護

もこなせなければ使用人にはなれませんから」

「じゃあ、ミリイもここで頑張ったんだな」

「まさか、またこの学園に戻ってくるとは思いませんでしたかね」

そう言ってミリイは微笑む。

そのあと、俺は自分の部屋に戻り残りの荷物を片付けてから眠りについた。

――次の日の朝

カーテンの隙間からは朝日が差し込み、部屋をノックする音が部屋には響き渡る。

そんなことは気にもせず布団の中で丸くなる俺。

しばらくするとノックの音はしなくなり、諦めて帰ったかと思うところで耳元で爆音が鳴り、俺は飛び起きる。

「おはようございます」

まるで何もなかったかのようにいつも道理に挨拶をするミリイ。

「ああ、おはようじゃなくて、なんで部屋の中に入って来てるの！？」

「以前、ノックをしても反応がなければ部屋に入って起こしていいと言われましたので」

「うん、言っただけそうじゃなくてどうやって入ったんだよ！？」

そっういとミリイは納得がいったような顔をする。

「そのことでしたか、これです」

そう言つてミリイが見せてきたのは寮の鍵である、しかも俺の部屋番号がかいてある。

「あれ、俺も鍵持つてるぞ?」

そう言つて保存していたこの部屋の鍵を出す。

「これは合鍵です、使用人だと言つたら寮母さんがくれました」

俺のプライベート空間はこの瞬間に崩れ去つた。

「そのカギをよこさない」

「申し訳ありませんが、できません」

「そのカギをよこしてください」

「断ります」

「お願いです、そのカギをください」

「ダメです」

俺はその日帰りの車の中でも鍵を渡すように頼んだが、ミリイは断固としてそれを拒んだ。

第19話 第一印象を大事にしないと

俺の睡眠を妨げる声が、今日もまた俺の部屋に響く。

「リユーヤ様起きてください」

「今日は朝飯はいらないから、もう少し寝させて……」

それに対していつも通りの反応をする俺。

「朝食なんてとっている時間はありませんよ」

さて、こんな反応は今までなかったな。

一体どういうことかと思い、重い瞼を開き制服姿のミリイの姿を見て俺は飛び起き、時計を見る。

そう、今日は俺の登校初日であり現在の時刻から遅刻までのリミットは10分という状況であった。

俺はミリイがいることなど気にせずに着替えを始める、初日から遅刻などしてはいられない。

今日はまだ夏服なので着替えるのにはそれほど手間取らないが、それでも1分ほどはかかってしまう。

着替え終わると同時に俺は部屋を飛び出し鍵を閉める。

すでに俺が起きたのを確認して先に学校に向かったミリイはすで

に見当たらず俺は強化を使い、自分の部屋のある4階の廊下の窓から飛び出す。

着地した時に足が痛かったが気にせずに走り出す。

後ろで窓から飛び降りるな、などという怒声が聞こえた気がしたが気のせいであろう。

俺の寮から学校の入り口まで本気で走って約8分、そこから目的の教室を見つけたどり着くまでの残された時間は約1分。

俺が本気で走る横を制服を着た生徒が何度か追い抜いて行った、おそらくは俺と同様の理由だろう。

俺が学校に着いたのは予想通り8分後だった、そこから目的の教室のある3階まで階段を駆け上がる。

3階に着き周りを見渡すとミリイらしき人物が腕時計を見ながら廊下の遠くの方で待っているのが見えた。

俺が全力で走り、ミリイのもとに着いたときにミリイが口を開く。

「ギリギリ間に合いましたね」

間に合ったことに安堵しながら俺は必至で肺に空気を取り込もうとする。

その様子を見てため息を一つ吐く。

「はやく部屋に入らないと意味がないですよ」

息を切らせている俺を余所に、ミリイは部屋の扉を開き部屋の中へと入っていき、まだ呼吸は落ち着いていないが俺もそれに続く。

部屋の中にいた人数は5人、そのうちの1人は俺が編入試験を受けたときの試験官だった男である。

この学校ではクラス単位ではなく5人を基本とした班による行動を基本としているらしいので、残りの4人はおそらく俺の班員であろう。

赤髪をポニーテールにした女は俺を見て一瞬、顔をしかめるがすぐに表情を戻す。

短い金髪の男はその金色の双眸を輝かせながらミリイを見ている。ウェーブがかかった明るいオレンジ色の髪をした女は茶色の瞳を輝かせ俺の方を見てくる。

長い紺色の髪をした男はその長い前髪の間隙から見える紺色の眼で俺たち二人を無感動に観察する。

俺たちの様子を見て灰色の髪をした男が口を開く。

「とりあえずこいつらが編入してきた二人だ、自己紹介とかは面倒くさいから俺がいなくなった後にしてくれ。

とりあえずミリイとリユーヤ、俺が一応お前らの担当教官のジャン・ローランド、とにかく面倒事は起こすなよ」

そういつてジャンはすぐに部屋を出て行ってしまった。

しばしの沈黙。

その沈黙を破るかのように金髪男が口を開く。

「とりあえず自己紹介しようか。俺はジン・ヘルムート・ルツセルだ、ジンて呼んでくれ」

それに続いてオレンジの髪の方が口を開く

「私はリタ・シエルヴァジオよろしくね」

この二人からは明るく友好的な雰囲気を感じられた。

次に口を開いたのは紺色の髪の男。

「ノア・リーヴィスだ」

たった一言自分の名前を述べそして黙り込む。

次に口を開いたのは赤髪の女。

「クレア・ソロリオ・フォン・イグレシアです」

後半2名はなんとなく友好的な雰囲気ではない、とりあえず俺とミリイが自己紹介を終えるとジンが口を開く。

「ところでミリイちゃんは彼氏とかいるの？」

まあ、ミリイのこと見て目を輝かせていたんだから大体の予想はつくがいきなり直球で来るとは。

確かに、世間一般で言えばミリイは美人の類だからジンがこのような行動に出たのもうなずけなくはない。

まあ、そんなジンの下心などお見通しなミリィはやりわりと断るが、それでもなかなかジンは折れない。

そんな二人にやり取りを見ていると、突然リタが目の前に現れ俺は驚く。

「あの、リタさん何かご用でしょうか？」

「うん、ちょっと聞きたいことが、あと呼び捨てでいいよ」

「えっと、聞きたいことって？」

俺がそう尋ねるとリタは目をキラキラと輝かせる。

「その髪の毛は地毛なの？」

なるほどね、確かに珍しい髪の毛の色の人がいたら多少気になるのは当然だ、リタの場合はその好奇心が人よりも大きいだけであろう。

「地毛だよ、ついでに目の色も自前だ」

リタは、俺の言葉を聞きまるで憧れの人に会えたかのようなそんな顔をする

「すごい、ちょっと触っていい？」

そういうとリタは俺が了承してもいないのに髪の毛を摘まんて観察し始める。

「この髪の色は不吉なんだろ、なんで嬉しそうに見てんだ？」

そういうとリタは一瞬ぼかんとしたがすぐに何かに気付いたよう

だ。

「ああ、確か人間の間じゃ、この髪の色って嫌われてるんだっけか」

人間の間？

「まるで自分が人間じゃない、みたいな言い方だな」

「うん、私人間じゃないよ」

はて、この子はいったい何を言っているのだろうか、もしかして電波な人なのだろうか？

俺がそんなことを考えているとリタは髪を掻き上げ耳をあらわにしながら口を開く。

「私は魔族なの」

リタの耳は人間のそれとは違、い横に長く綺麗なオレンジの毛でおおわれており一瞬犬をほうふつとさせる。

「犬？」

思わずそうつぶやいた俺の言葉お聞きリタの耳がぴくつと動いた。

「ひどーい、犬じゃなくて狼、狼人族！」

一瞬、狼だつてイヌ科じゃないかと言いそうになったがここでそんなことを言ったら怒られるだろうから黙っておこうと思う。

「それで、魔族の間じゃこの髪は別に嫌われてないのか？」

とりあえず話を変えて逃れようとする俺。

「うん、それどころか羨ましがられるくらいだよ」

まさか、嫌われ者から羨ましがられる対象にまで跳ね上がるとは思っていなかった俺は驚く。

そのあとも散々髪をいじられ、終いには髪を抜かれたが、なんと
いつかここまでやられるともうどうでもよくなってくる。

ジンはことごとく断られ続けてすでに心が折れたようだ。

そこでクレアが口を開いた。

「とりあえず二人のランクは何？」

第20話 飯の恨みは恐ろしい

「ランク？」

正直な話、何のことかさっぱりだ。

とりあえず、ミリイのほうに視線を向け助けを求める。

ミリイは俺の言いたいことがわかったようで軽くうなずいてから4人に向けて口を開く。

「私は特級、リユーヤ様はランクなしです」

なんとなくランクなしという言葉に戦力外通告を受けたような気分になる。

恐らくはその想像は外れてはいないだろう、多少驚いた様子の4人からの視線が痛いのが証拠だ。

一瞬の沈黙の後クレアが口を開く。

「つまりミリイを入れる代わりに星無しのお守りをしろってことね、ジャンの奴も面倒くさいことをしてくれるわね」

その言葉に違わぬように顔を忌々しそうに歪め、いかにもいやだと言わんばかりの雰囲気である。

俺は聞きなれない言葉にミリイに耳打ちで尋ねる。

「星無しって何？」

それに対してミリィも耳打ちで答えてくれる。

「自分のランクを表す襟章が星形をしていることから、ランクなしの人のことを言います」

そう言ってミリィが自分の生徒手帳を見せてくる、その表紙には銀色の星がつけられていた、おそらくはこれがその襟章だろう。

「ちなみにそれってどれくらいのランクなの？」

「私は下から数えて4番目のランクです」

それがすごいのかどうかはわからないがとりあえず、俺が歓迎されないであろうことは解った。

しかし予想外の反応がノアから帰ってきた。

「ランクだけがすべてではない、ランクを持たないというだけで邪魔者扱いするのは早計だ」

ジンもそれに続いて口を開く。

「そうだが、魔法だけでしかランクは決まらないんだからそれだけで役立たずかどうかはわかんねえよ」

「ジンは役立たずだったけどね」

ぼそりとクレアが呟くように言う。

「役立たずっていうなよ！」

「事実でしょ」

ジンとクレアは言い合いを始め、それを笑いながらリタが眺めている。

そんな様子を苦笑いしながら俺も眺めているとノアが俺のほうに歩いてきた。

「このチームを仕切らせてもらっている、何か困ったことがあったら言ってくれ」

恐らく口数が少なかったり、愛想がよくなさそうなのはノアの気質なのだろう。

ノアの話によると、ジンが下から二番目のランクの初級魔道士、ほかの3人は三番目の一級魔道士らしく、今のところランクだけで見たらミリィが一番上らしい。

「なあ、あの二人は放っておいてもいいのか？」

俺はいまだに口論をやめようとしないうちにジンとクレアを指さして、ノアに尋ねる。

「いつものことだ、気にしないでくれ」

そこにリタも口を挟んでくる。

「そうそう、夫婦喧嘩に口出すのは野暮だよ」

その言葉が聞こえたのか、ジンとクレアがリタを睨む。

「夫婦喧嘩じゃない!」

俺からしたらここまで息が合っていれば十分夫婦で通ると思うのだが、そんなことを言つと俺まで睨まれそうなので黙っておこう。

そのあとノアから明日からの授業の日程などを教えられ、横でミリイが書き留めていたので俺は聞き流す。

ノアの話が終わると、どうやら夫婦喧嘩も収まったようでクレアが口を開く。

「もう、ランクはいいから固有属性と得意な属性を教えて」

「俺の属性は保存で、得意なのは水それに続いて風」

「私の属性は音で、得意な属性は火と風です」

俺たちの話を聞いてくレアが少し驚いたような顔をする。

「二人とも固有属性が特殊型ね、その能力について軽く説明してくれる?」

俺とミリイはそれぞれ自分の能力について説明し、俺は実際に保存していた剣を出して見せる。

「なるほどただの役立たずかと思っただけ、荷物運びとしては優秀ね」

「それは褒めてるのか?」

実際のところ褒められていたとしてもあまりいい気分はしないが。

「褒めているわよ、あなた一人いれば荷物運びだけで言ったら何十

人分にも匹敵するじゃない」

「そいつはどうも」

俺は苦虫をかみつぶしたような表情でそう答える。

そんなやり取りを俺たちがしているとリタが割り込んでくる。

「とりあえず、2人とも連絡取れるようにしようよ」

連絡といわれて思い出したが確か編入したときに渡されたものの中に連絡用の魔道具があったことを思い出す。

「これってどうやって使うんだ？」

形はただのカードであり、使い方は全く分からない。

「とりあえず魔力を流してみて」

言われた通りに俺は魔力をそのカードに流してみる、すると目の前にディスプレイが展開された。

「おお、すげえ」

完全に中世な雰囲気の世界だが、結構近未来的なものがある。

俺はリタに教えられながら操作を覚えていく、さながら初めて携帯電話を持たされた人間と大差ないであろう。

なんとか、全員の登録を済ませその日はそれで解散となった。

——その日の夜さつそくジンから連絡があつた。

内容は単純に今から晩飯を食べないかというものであつたが、今日はもう食材も買い終わつており自炊をするからまた今度にしようと伝えたはずだ。

しかし今現在、なぜジンとリタは俺の部屋で飯を食っているんだ。

「なあ、なんでお前たちは俺の部屋にいるんだ？」

その問いに対してジンがさも当たり前のようにこたえる。

「それは飯を食べるためだろ」

「いや、聞きたいのはそんなことじゃなくて」

俺が困つたように言つとリタがジンに対して口を開く。

「ジン、リユーヤは何で私たちがリユーヤの部屋で食事しているのかを聞いているんだよ」

うん、リタさんその通りだ、でもそのあとに何もなかったかのよう
に食事を再開するのはいかなものかと思うぞ。

「なるほど、そんな俺が晩飯代を浮かせるために決まつてるだろ」

俺はこのバ力をなぐつてもいいのだろうか？

「とりあえず殴るのは後にしとくが、それだとリタの居る理由の
ならないぞ」

俺の問いにリタが答える。

「ジンがただでご飯食べさせてくれるっていうから、ついてきたらリユーヤの部屋だったの」

なるほど悪いのは全部ジンってことか。

俺はジト目でジンのことを睨むが、ジンはうまそうに飯を食い続けるだけだった。

多少多めに買っていた食材は3人分の食事に消え、次の日の朝俺はパンだけをかじりながらジンに今度飯をおごらせる算段を立てていた。

第21話 平和ボケっていうけど、まだ戦闘狂よりまだよな

退屈だ。

今授業をしているのはせいぜい高校1年で学ぶ数学、わざわざ授業を聞いても何の足しにもならない。それだったら寝てた方がよほど有意義だ。

段状になっている教室の一番後ろ、窓側の席で周りで真面目に授業を受けているほかの生徒たちを眺めてあくびを一つ。

授業は10グループ程で一つの授業を受けるので今教室には50人くらいの生徒がいることとなる。

さっきから教師がこっちを睨んでいる気がするが、今授業をしているのはせいぜい高校1年で学ぶ数学、わざわざ授業を聞いても何の足しにもならない。それだったら寝てた方が有意義だ。

そんな感じで俺は1時限目を過ごし、不真面目な態度と俺の黒髪黒目という容姿も相まってか、周りの視線が多少痛い気もした。

2時限目は魔法学の座学だったのでとりあえず真面目に受けようと思ったが、気が付いたら寝てしまっていた。

「リユーヤ様、もう昼休みですよ」

ミリイに肩をゆすられ目を覚ました俺は、まわりを見渡し既に他の生徒が教室を出ていることを確認する。

「なんだ、授業終わったのか」

俺は伸びをしながら立ち上がる。

「なんだじゃありませんよ、寝ていて勉強になるんですか？」

まずいな、このままだと昼飯を食えずに説教される。

「わ、悪かった次からはちゃんと受けるから」

そういう俺をまるで信頼していないかのような眼差しでミリィは見詰めてくる。

「わかりました、今回は見逃します」

うん、誠意を持って謝ればなんとかなるものだな、まあ、誠意があつたかどうかはわからないが。

とりあえず俺はミリィとともに学食に向かう、廊下ですれ違つ生徒たちからの視線が容姿のせいか多少痛い別が別に気にするほどのことでもない。

学食では友達と談笑している声や食器の音が響く、俺は空席を探してみるが出遅れたせいかどこの席も埋まっている。

「おい、リユーヤ」

俺を呼ぶ声が聞こえた気がしてあたりを見渡すとジンが手を挙げて俺のことを呼んでいた。

「こっちの席あいてるから一緒に食おうぜ」

「ちょうど席探してたんだよ」

ジンは6人掛けのテーブルを占領しており、グループの3人は今料理を取りに行っているそうだ。

そのあと帰ってきた3人と入れ替わるように俺たちも料理を取りに行く。

料理の受け取り口も長蛇の列を成しており、テーブルに戻った時にはすでに3人は食事の大半を食べ終えていた。

俺たちも席に着き食べ始めるが3人は当然俺たちよりも早く食べ終わり、自然と会話をはじめめる。

「クレア、次の時間ってどこで授業だっけ？」

そんなリタの問いを聞いてクレアがメモ帳を取り出し確認する。

「次は第3訓練場よ、次の授業でミリィと星無しの実力もはっきりするわね。」

別に今更なんと呼ばれようと気にはしないが、俺の実力がはつきりしたところで役立たずにしかないだろうし。

そんな自虐的な考えを浮かべながら、俺は食事を口に運んでいく。

「そうだな、二人の戦闘能力がどれほどなのは、グループとしての戦闘時の陣形にも関わってくる」

ノアは今後のことを見据えているようだが、俺自身まだ戦闘というがどのようなものなのか判然としていない、ミリイと組手をしたことなら何度もあるがあれはあくまで練習であって戦いではない。戦うということがどういうことなのかもわからないのに、生きる上で必要だからと戦いを強いられる、まったく他に方法はないのだろうかと思えてしまい、俺はその疑問を自然と口にする。

「なあ、やっぱり戦わないといけないのかな？」

もともと俺は戦いなどとは縁のないような場所で18年間も生きてきたのだ、この疑問は俺の正直な気持ちだ。

俺の言葉を聞いてちょうど食事を終えたジンが口を開く。

「リユーヤ、この国での最大の死因を知ってるか？」

俺は首を横に振る。

「魔物だよ。あいつらは仲間以外の生き物なら何でも殺そうとする、それが原因で絶滅した動物だっている。戦えないってことはあいつらに出会ったら死ぬしかないってことだ」

俺はその話を聞き自身の認識の甘さを知る、魔物などせいぜい時々出会う災害的なものだと思っていた、しかし、今の話を聞く限りでは魔物とはそんなに珍しい物ではなく、むしろいることが普通の存在、今まで街を出ることのなかった俺には分からなかったことだ。

「リユーヤ様がいた国は平和だったという話は聞いております、魔物もいなければ人と人の争いも少ないと、しかしこの国では魔物もいますし、人同士の争いもあります、どうかそれだけは覚えておい

てください」

正直な話まだ納得はできないが、郷に入っては郷に従えと言う、俺も少しは考えを変えて行かないといけないのかもしれないな。

「わかったよ、俺も死にたくはないし」

その一言を言い俺は食器をかたずけるために立ち上がる。

次の授業は戦闘の実習、みんながミリイのように手加減をしてくれるわけではない、いつまでも、呆けてはいられないな。

俺は5人とともに第三訓練場へと向かう、向かうといってもまだ学校の地形を理解できていない俺は5人の後をついていくだけだが。

この制服、伸縮性に富みそれなりに頑丈らしく戦闘の阻害にもならない、入学時に4着ほど渡されたがおそらくは壊れることを前提としてのことであろう。

今は夏服だから白のワイシャツに深緑のタータンチェックのパンツだけで、冬服は上に紺色のブレザーとネクタイ、必要に応じてベストやセーターの着用が許可されている。

訓練場に着くとみんなそれぞれに練習を始め、周りでも何人かの生徒が素振りなどをしていた。

俺も剣を出し素振りをしながら、周りの生徒たちの様子を確認するが皆明らかに俺よりも動きがいい。

俺のグループのメンバーはというと、リタは投げナイフを走り回る人形に向かって投げ命中させていく、ノアは大鎌を軽々と振り回

しているはつきり言っ
て俺が剣を振る速度よりもよほど早い、ジンは2丁の拳銃を使っ
て逃げる人形を撃っているがリタの投げナイフよりも命中精度が低い、クレアは細剣で素振りをしているが動きが早すぎてついていけそうにもない、ミリイは言わずもがな、武器を使われなくても勝てる気がしない。

そんなことを思いながらも俺は剣を振り続ける、そんな俺にクレアが近寄ってくる。

「あんたそれで本気なの？」

本気ではないが本気を出したところで、さして変わらない。しかし、それを言うと馬鹿にされるのは目に見えている。

俺が困っていると、ちょうど教官が訓練場に入ってきて連絡を始めたので、俺はクレアの質問から逃れることができた。

「とりあえず、二人一組になって組手形式の練習でもしてくれ」

この教官、誰かと思ったらジャンじゃないか、相変わらずやる気が感じられない。

とりあえず、誰かと組まなければいけないらしい、いつも道理ミリイと組もうかなどと考えていると俺の肩をジンがたたく。

「俺と組もうぜ」

どうやら、俺は今日、ジンにばる雑巾にされるようだ。

第22話 夜更かしだけはやめておけ、いやマジで

ジンは2丁の拳銃を持った腕を下げ、俺の様子を伺っている、どうやら向こうから攻めてくる気はないらしい。

今の距離が20mほど、相手の武器が遠距離武器である以上、懐に潜り込めなければただ一方的にやられるだけだ。

俺は強化を施しジンに向けて駆け出す。

「やっと来たか」

ジンはその一言とともに二丁の拳銃の銃口を俺に向け、引き金を引く。

音もなく発射された弾丸は魔力そのものであり、速度は普通に魔法を撃つよりは早い、俺の知っている銃弾よりは遅いだろう。

俺は横に跳びそれ避けるが、休む間もなく次の銃弾が迫ってくる。俺はなんとかそれを躲していくが一向に向こうが弾切れを起こす気配はない、おそらくは魔力を撃っているのだから空気中から集めれば制限数などほばないに等しいのだろう。

「いつまでも避けてるだけじゃ俺にはかてねえぞ」

そんなことを言われても、避けるだけで精いっぱいなのだ、相手との距離は約10m強行突破出来なくはないだろうが弾丸を食らうことは必至だ。

俺は覚悟を決め、ジンへ向かって走り出す。

俺が今確認できている俺に向かってきている弾丸数は4発、これから増えることも計算に入れるのならば計7発程になるだろう。

まずは1発目を体をそらし躲す、2発目は姿勢を低くし避ける、3発目の弾丸は剣で防ぐ、4発目を躲しきれずに右脇腹に食らうが強化と制服のおかげで大きなダメージはない、しかし明らかに動きが鈍り躲す余裕はなくなる、俺は剣で顔面に向かってくる弾丸を防ぎ、そのまま姿勢を低くし強行突破を試みる。1発は頭上を通り過ぎ、もう1発は左肩に命中する。

なんとか剣の間合いに入り、俺はジンの左肩から斜めに切りおろす様に剣をふるうが、それを軽く後ろに下がりジンは躲す、振り下ろした剣をそのまま切り返すが、ジンは右手の銃をホルスターにしまい、代わりにナイフを取りだしこれを防ぐ。

ナイフと剣が合わさる瞬間に俺の手元から剣が消える、ジンは予想外の事態に一瞬驚いた顔をするが俺の左手から突き出される剣に気付き、半身になって躲し俺の額に銃口を当て、口を開く。

「全く、攻撃ばかりで防御が全然なっていないな」

そう言いながらジンは額に当てていた銃をしまう。

「しょうがないだろ、今まで戦いとは無縁だったんだから」

本格的に戦いを学んできた人間に、せいぜい戦うといっても喧嘩程度しかない人間が勝てるはずもない。

「なら俺は武器なしで戦ってやるから安心してかかってきな」

この時は武器なしなら何とかなるかも、などと思っていたが実際は俺の攻撃はかすりもせず、投げられ、蹴られ、殴られ、授業が終わるころには満身創痍といった状況だった。

「大丈夫かりゅーヤ？」

散々痛めつけた本人が今頃になって俺を心配するが、どうせ心配するならもう少し早くしてほしかった。

「大丈夫だ……」

実際はかなりきついけど、俺はそういつて強がる。

今日の授業はこれで終わりなので、俺はふらつく足取りで部屋に帰りすぐに汗を流す。

俺がシャワーを浴び終えゆっくりしていると部屋にミリイがやってきた。

俺は、何かあったのかと尋ねる。

「いえ、今日は随分とやられていましたので治療にと思ひまして」

ああ、見られてたんだななどと少し恥ずかしくなり、ごまかすようにひきつつた笑顔を浮かべる。

ミリイが俺に手を向けしばらくすると体の傷が治っていく。

「なあ、俺にもその魔法つかえるのか？」

「回復魔法ですか？」

俺は首肯で意思を示す。

「この魔法は魔力消費が激しいのであまりお勧めはできませんよ？」

はつきり言つて、ほかの人に比べて圧倒的に魔力の量が少ない俺にとって魔力の消費が激しい魔法など使う余裕はないが、いざという時に使えるかもしれないのなら学んでおいて損はないだろう。

「そうか、とりあえずけがはもう大丈夫そうだ、ありがとな」

覚えたいのなら教えようか、といわれたがいつまでもミリイに頼つてもいられない、自分で調べてみると告げ俺は晩飯も食べずに床に就いた。

——次の日の授業を終えた俺は学校の図書館へと向かう。

流石これだけでかい学校なだけはある、図書館もかなりの大きさがある。

図書館の中では多くの生徒が机に座り勉強をしていたり、本を探していたりする、図書館では静かにするというのはこちらの世界でも共通のようだ。

俺は妙に静かな図書館独特の雰囲気の中を進み、魔法に関する書物の棚から回復魔法について書いてありそうな本を探していく。

とりあえずそれらしい本を見つけ、俺は1時間ほど図書館でその本を読むが複雑すぎて、その時間では理解できなかったので借りて

いくことにする。

部屋に帰ってから読み続け、なんとか本質を理解したころにはすでに外は明るくなっていた。

「もう、朝か……」

そうつぶやくと同時に部屋に響いてくるノックの音、当然ながらノックをしたのはミリイであり、それはもう学校に行く時間だということを表してもいる。

おれはそのまま、ミリイに連れられ眠くてふらつく足取りのまま学校へと向かう。

「勉強するのは結構ですが、限度というものを考えてください」

俺は軽くうなずくだけでそれに答えるが、実際眠すぎて何も考える余裕などなかった。

その日の授業も終わり、静まり返った教室にミリイの声が響く。

「この間、授業中は寝ないようにと言いましたよね？」

俺はミリイの前でうつむき小さくなった状態で正座をしている。

「はい……」

「そんなことで今後やっていけるとでも思っているんですか？」

「思っていないです……」

「大体、私はレイン様よりリユーヤ様の世話を任されているんです、もしリユーヤ様が学業をおろそかになどしていたら、私もそれなりの方法で対応しないといけなくなります」

それなりの方法というのが気になり俺は視線を上げ尋ねる。

「たとえば？」

「徹底的な監視下に置いたうえで生活をしていただくことになるやもしれませんね」

「いや、それはちよつと……」

「それが嫌ならちゃんとしてください、大体、リユーヤ様は……」

その後も説教は続き解放された時には、正座のしすぎで足の感覚がなくなっていた。

この日の教訓は、夜更かしだけはやめておこうということであった。

第23話 まったく、周りについていけないよ

今日で回復魔法の勉強を始めて5日目、初日以来夜更かしはしないようにしているので勉強の進む速度はそれほど速くはないがそれでもかなり進んできて、既に形はほとんど見えてきており、残すところ1割ほどといったところであろうか。

晩飯を食べ終えた俺は、今日も勉強を開始する。

昔ならばここまで何か一つに一生懸命に取り組んだりはしなかったが、今はこれが楽しくてたまらない、おそらくはこれまでの勉強と違って、結果が目に見えてわかることが楽しいのだろう。

それから3時間ほど勉強をし、もう後は実践を残すのみといったところまで来たが、誰かが怪我をしていなければ発動すらできない魔法のようで実際に発動するのかを確かめるには怪我をするしかないが、発動しなければただ自分で怪我をした馬鹿になってしまう。

とりあえずは明日の戦闘の授業で怪我をするだろうからそこで試せばいいだろう、と思いその日は早めに就寝することにした。

——次の日の昼食後、俺はいつも道理、訓練場へと向かい素振りを始める。

授業開始予定時間から10分ほど遅れてジャンが来て連絡を始めた。

「えーと、今日から魔法を含んだ戦闘の訓練に入る、それに伴い怪我人が出るだろうがそこらへんは適当にやっといってくれ、じゃあ開

始」

そういういつも道理、ジャンは出ていく、この怠慢教官のおかげで今まで魔法の使用が禁止されていたことすら俺は知らなかった。

魔法を使われるということで、俺は生命の危機を感じ取り今回はミリイに手加減をしてもらおうなどと調子のいいことを考えていると、ジャンが戻って来て余計な事を言い出した。

「今日からは2人組じゃなくてグループごとで訓練しろよ、後これが各グループの訓練場の場所割りな」

壁に何かの紙を貼り、また訓練場を出ていくジャンを呆然と眺めることしか、俺にはできなかった。

呆然としている俺にミリイが話しかけてくる。

「リユーヤ様、第17訓練場に移動しますよ」

俺はミリイに連れられ、ほかの仲間たちと合流し、第17訓練場に移動を開始する。

移動の間みんなが、どのような方法で訓練をするかについて話し合っていたが、俺はどうやって今日の訓練を生き抜くかを考えることで精いっぱい、ほとんど聞いていなかった。

目的地に着き、ノアが今日の訓練の方法について話し出した。

「まずは、新しく入った二人の力量を正確に測るために自分が二人の相手をしよう」

俺の力量など計る間もなく、ほぼ皆無に等しいというのに、全く世話が焼けるやつらだ。

「まずはミリィからだ」

「わかりました」

俺を含めたほかの四人は、二人の戦いに巻き込まれないように離れる。

それを確認したノアが口を開く。

「準備はいいか」

「はい」

その後一拍を置いてノアがしゃべりだす。

「では、行かせてもらおう」

その言葉と共にノアが駆け出し、ミリィはその行く手をふさぐように魔力系を展開する。

ノアは大鎌で魔力系を断ちながら進んでいこうとするが、ミリィの魔力系による攻撃により思うように進めていない。

その様子を見てクレアが呟く。

「このままだとミリィの勝ちね」

俺は、それに疑問を覚えた。

今の状態は両者ともに攻めきれずに拮抗しているように見え、ミリィは魔力系を生成していることを考えれば魔力切れが起きてミリィ

イのほうが不利になるように思える。

「なんでだよ？」

「ミリイの様子を見てみなさい」

俺はミリイの様子を集中して試みる。

口がかすかに動き手元におそらく火の魔力が集中しているように見える。

「魔法か？」

「そうよ、しかもあの量の魔力と詠唱の長さからして中級魔法ね」

確か、俺が今使えるのが初級魔法で、初、下、中、上級の順に強くなっていくはずだが、中級がどれほどのものなのかわからない。

「それってどれぐらいの威力だ？」

「どの魔法をどれぐらいの規模で使うかにもよるけど、そこら辺の魔物なら消し炭になるくらいね」

魔物がどれほどのものかわからないが、なんだかすごそうだと
いうことだけは解った。

「それって、ノアが食らったらやばくないか？」

「ええ、大変な事になるわね」

そういいながらクレアは、流暢に見ているだけである。

「止めなくていいのかよ!？」

俺が慌てて、ミリィにやめるように言おうと思った時にジンが話しかけてくる。

「まあ、待てって、ノアも気付いてないわけないだろ、もう少し見てな」

「そんなこと言ってる場合じゃ……」

「星無しだまってなさい、あんた相手に使おうとしてるなら私だつて止めるわよ、それにもう魔法は完成したようよ」

その言葉を聞きミリィのほうを見るとミリィの左右に巨大な炎の槍が1つずつ浮いており、ミリィが両手をふるうと同時にその槍がノアに向けて飛んでいく。

ノアは魔法を確認すると同時に後ろに飛び退き、鎌を地面に突き立て両手を前に向けると、ノアの手前5m程の位置で炎の槍が掻き消える。

「え、今いったい何が？」

俺は全く意味がわからずに、クレアに尋ねる。

「ノアの固有属性は風、今は同等威力の風の魔法で相殺したのよ」「そうだったのか……あれ、でもそれならなんでミリィの勝ちだった？」

魔法を撃つても相殺できるのなら負ける理由がない。

「まあ、見てなさい」

俺が二人に目を移すとノアが手を挙げる。

「魔力切れだ」

「ノアはミリの魔力系を切るときも風の刃を鎌にまわせてたから魔力切れは仕方ないわね」

あー、なるほど固有属性の魔法は全部自分の魔力で出すんだっかな。

戦いを終えた二人がこちらへと歩いてきて、ノアが口を開く。

「すまないが、俺はリユー・ヤの相手をするだけの魔力が残っていない、誰か代わりに相手をしてやってくれないか？」

その言葉を聞きすぐにジンが手を挙げる。

「なら、俺がやってやるよ」

それを聞いてリタがうなずく。

「リユー・ヤの相手なら、ジンが適当かもね」

「ほら星無し、さっさと行きなさい」

またしてもジンにボロボロにされるのかと、俺は少し憂鬱になりながら訓練場の中央へと歩いていく。

俺がつかえるのは、自分の属性の保存と多少の剣技に水と風の初級魔法をそれぞれ1つずつと回復魔法が多分使えるくらい、一体どうやってこれで戦えというのか、先ほどの戦いを見せられたら余計そう思ってしまう。

「もう、準備はいいか」

そう言ってジンは俺に二つの銃口を向ける。

何もしないで負けるのも味気ないか、と思い俺は剣を構える。

「ああ、来いよ」

第24話 い、いつか見返してやるからな！

俺は今回はジンと距離をとったまま、ジンの様子をうかがう。

俺が突っ込んでいかないことを悟ったジンは引き金を引くが、その弾丸の軌道は明らかに俺の足元を狙っている。

ジンが何をしたいのかはわからないが俺はその弾丸を避けるために数歩分後ろに下がる。

弾丸が地面に着弾した瞬間に爆発が起こり、俺は何が起こったのかもわからぬままに爆風で吹き飛ばされる。

体制をたてなおし、再びジンの方を見るとすでに次の弾丸が迫ってきており俺は横に飛び退く。

俺はとにかく避け続けるがこのままでは落ちがあかない、それにして最初の爆発はなんだったのだろうか。

俺は隙を見つけジンへと一気に近寄る、目の前には弾丸が一つこの程度なら剣で防げる、そう思い俺がその弾丸を剣で防いだ直後、目の前で爆発が起こった。

剣は俺の手を離れ、はるか後方に飛んでいき俺自身も後ろに飛ばされる。

爆発自体のダメージもあり、立ち上がろうとするが力が入らずに立ち上がれない。

「そこまで」

俺の様子を見てノアが制止の声をかける。

俺はその場に大の字になって倒れこむ、先ほどの爆発はなんだったのか全く分からないが、ジンのやったことであることは間違いない。

俺は傷ついた体を癒すために回復魔法の詠唱を始め最後の一言を唱える。

「我に癒しを」

それと同時に体の痛みが引いていき、急激に魔力が減っていくのがわかる。

このままでは魔力切れになると思いある程度ところで回復を中断し、立ち上がる。

「リユーヤ大丈夫か？」

俺のことをボロボロにした張本人が俺の元へとやってきて、手を差し出す。

「それなりにきつかった」

そう言いながら俺はジンの手をつかみ立ち上がる。

「ところで、さっきの爆発はなんだったんだ？」

弾丸に混ぜて魔法でも撃っていたのだろうか？

「あれは俺の魔力を弾丸にして撃ち出したんだよ、この銃はこのグリップのところの魔石から魔力を送って魔力を固形化させて撃つことと、直接魔力を注ぎ込んで弾丸を作り出すことの二つができる訳」「それでお前の固有属性って？」

俺の問いを聞いて、ジンはニヤリとする。

「爆発だよ、そいつを弾丸にすることによって着弾と同時にドカーンとなるわけ。どうだ、すごいだろ？」

なるほど俺はわざわざ自分から爆弾に向かっていたわけか。

「爆発の規模もろくに操れないから、仲間を巻き込んだり、近くで使うと自分も吹き飛んだりするくせに随分とエラそうね」

クレアが冷やかな視線とともにジンのことを罵る。

いつの間にやら、みんな俺の所に集まってきたらしい。

「こ、これから上手くなるからいいんだよ」

必死の反論もまるで負け犬の遠吠えのように聞こえる。俺に勝ったのに負け犬とはいええて妙だ。

「ジンは危なっかしくて見てられないよー」

「まったくだ」

リタやノアにまで口々に責められジンはぐうの音も出なくなっ

しまった。

「とりあえず、星無し」

俺は突然のクレアの呼びかけに姿勢を正す。

「は、はい」

声が裏返ったが気にしない。

「あんたは役立たず決定、後ろで荷物持ちでもやってなさい」
「はい……」

まあ、役立たずなことは分かってたけど、直接言われると結構響くもんだな。

そのうち役立たずじゃなくなってやると一人誓う。

「じゃあ次はあたしとクレアだねー」

そう言いながらリタはカバンからナイフホルダーを取りだし腰回りや腕などに取り付けていく。

リタとクレア以外の4人は先ほど同様に離れる。

リタの準備の様子を見てクレアが口を開く。

「リタ準備はいい？」

「大丈夫だよー」

本当に今から戦うのかというぐらい陽気な声でリタが答える。

リタの様子を見てクレアがこちらを向く。

「ノア、合図お願い」

「わかった」

俺は本当に始まるのだろうかなどと考えていると、横からジンが話しかけてきた。

「一瞬だから見逃すなよ」

俺がどういうことだと聞こうとしてジンの方を見た瞬間にノアが口を開く。

「始め」

俺はすぐに視線を二人に戻したはずだが、さっきまでかなりの距離が開いていたはずなのに、クレアがリタの懷に潜り込んでいる。

一体、どんな速度で移動したのかわからないがかなりの速度であったことは間違いない。

クレアはリタに対して突きを繰り出すが、リタをそれを後ろに跳んで避けながらナイフを二本投げる、次の瞬間、一瞬でクレアは横に移動するがリタはそれを追うようにナイフを投げていく。しかし、俺が見た限りではリタの投げたナイフには隙間があり、そこを抜けて行けばいいのではと思えてしまう。

とりあえず解説のジンさんにでも聞いておくことにする。

「なあ、なんでクレアはナイフの間を抜けて行かないんだ？」

「間を抜けないんじゃないかって、間がどこだかわかんねえんだよ」

余計俺は混乱する、そんな俺の様子を見てジンがさらに解説を始める。

「リタの固有属性は隠蔽って言ってな、物の存在を隠すことができないだよ」

なるほど、つまり間にナイフがあるかもしれないから、迂闊に近づけないってことか。

俺はさらに疑問をジンに尋ねる。

「でもそれなら自分の姿隠した方が早くないか？」

「最初から認識されていないものしか隠せないっていう制約があるらしいから、それはできないらしい」

もうここまで来たらとことん聞いておこうと思いさらに尋ねる。

「ちなみにクレアの動きが速すぎるのはなんでだ？」

「あいつは加速の固有属性だから一瞬で自分の出せる最高速の二倍の速度がだせるらしい、強化で速くなってるのに、さらに二倍だからあんなでたらめな速度になるんだよ」

つまり、クレアは最初の一撃で決める気だったのだろうが、それを読んでいたリタに避けられたってことか。

そんな戦況の把握をしているうちに、クレアが動いた。

クレアはリタに向かって大きめの火の弾を放ち、リタがそれを恐らくは闇属性の魔法であろう黒い槍状の魔法で相殺する。

その一瞬の隙を突き、クレアはリタの懷に潜り込み喉元に剣先を突き付けた。

「あちゃゝ、まけちった」

リタは、まるで負けたことを気にしてないかのような様子で。

クレアは涼しい顔のまま細剣を収める

今日の訓練後は各自での練習ということになり俺は素振りをしてその日の授業を終えた。

第25話 休日は寝て過ごすものだと思っている

この学校に来て初めての休日、さすがに休日はいつもはうるさいメイドさんも起こしには来ないようで、気分良く寝ていた昼下がりに俺の部屋にノックの音が飛び込んでくる。それを俺は無視し続けると次第に激しくなっていたが、しばらくすると諦めたのかその音もやんだ。

これで気分よく眠れると思った瞬間に鍵の開く音がし、扉が開く、鍵が開いたからミリイであろうという予想をし俺はそのまま眠り続ける。

足音が次第に近づいてきて、気が付いたことだが、どうやら一人だけではなく何人かいるようだ。

俺はそんなことは関係ないともいうかのように、ベッドの中で動かずにいるとなんだかひきだしをひく音と共に聞きなれた声が聞こえてくる。

「なにか、面白いもんじゃないかな」

この声はたぶんジンであろう。あいにく、俺の部屋には特に面白いものなどないが、できれば部屋の中は荒らさないでもらいたい。

そんな俺の望みは届くわけもなく、俺の部屋が荒らされていく。

荒らされゆく俺の部屋に、想いをはせながらも俺はなおも布団の中から動こうとはしないでいると、クレアの声が聞こえてきた。

「こいつ起きないわね、しょうがない」

次第に近づいてくる足音に俺は一抹の不安を覚えた。

衝撃が腹を貫く。

「じふっ……」

俺はクレアに腹を殴られベッドの上で腹を抱えてうずくまる。

「やっと起きたわね、早く準備してきなさい」

そう告げるとまるで何事もなかったかのような涼しい顔をして部屋を出て行き、みんなもそれに続いた。

一体、なぜ俺は殴られなきゃいけないんだ等と文句を言いながらも、俺は着替え部屋を出る。

部屋の前の廊下では、私服姿のメンバーが待っていた。

夏休みが終わったといってもまだ暑さの残る季節なのでみんな夏らしい恰好をしている。

とりあえず、俺が腹を殴られてまで起こされた理由を尋ねねばならない。

「今日は何の用だ？」

「買い物行くから荷物持ちよろしく」

さも、当然のようにそう言い放ちクレアは歩きだす。

荷物持ちなんかをするために俺は起こされたというのは、頭に来るが、逆らったら俺の体がもたなそうなのでとりあえずは我慢しよう。

前を歩きながら、どこの店に行こうかなどと楽しそうに話している女子3人後ろをまるで興味なさそうについていく男3人という構図は買い物の間中、変わることはなかった。

服を買い、俺に渡すという作業が続けられ、俺は魔力の回復速度と減る速度が同じになるギリギリまで荷物を渡されたが、それだけでは足りず、3時間後には、男3人は大量の荷物を両手に持ちなんだか疲れた顔をしていた。

いまだに買い物が続けている女性3人の元気はいつたいどこからやってくるのだろうか？

そんな無駄なことを考えながら少しでも疲れないように近くの公園のベンチに腰かけて、買い物袋が増えるのを待つ。ちなみに、買った物のうち、8割はリタのものであり男3人に至ってはほとんど物を買っていない。

休日ということもあってか、街はそれなりの賑わいを見せ、カフェのテラスでコーヒーを飲んでいる人や俺たちのように大量の荷物を持っている人が見受けられ、公園では子供が遊ぶ姿も見受けられれば、友人と談笑している人、昼寝している人などが見受けられる。

やはり、この髪と目のせいで人に見られているような感じがするが、この感覚もそのうち慣れるのであろう。

そんな風に、周りの様子を観察していると、買い物を終えた女子3人が戻ってきたようだ。

「おい、次の店行くよー」

そう言っただけ俺たちを呼ぶリタの両手の荷物を見て、ため息を吐く。

次の店への道中、俺はほかの男二人に話しかける。

「なんでお前らはついてきたんだ？」

俺は、荷物持ちしないと後が怖いからだが、ジンとはかくノアは断ってもよかったはずだ。

「荷物持ちするとリタが晩飯作ってくれるし、今回はリユーヤがいるからそんなに荷物持たないで済むと思ったんだが、読みが外れちゃったな」

そう言いながらジンが軽く肩をすくめ、ノアがそれに対して軽くうなづく。

その後も買い物は続き、最終的には6人全員が両手に大量の荷物を持った状態で寮へと帰ることとなった。

寮に帰ってきた俺たちはクレア、ミリィ、の部屋にまずは荷物を置き次にリタの部屋へとやってきた。

リタの部屋に着きまずは両手の荷物、そして保存していたものを放出していきそれをリタが片づけていくという作業が続く。

「一体、どれだけ買ったんだよ」

俺がそうつぶやくとリタが苦笑いをする。

「いやー、いつもはみんなの両手がいっぱいになったところでやめるから、こんなにはならないんだけど、今日は買いすぎちゃった」

そう言いながらも手が休まることはなく、すべての荷物が片付くまでにかかなりの時間を費やした。

片づけも終わり料理を作ってくるからと言ってリタはキッチンへ、クレアとミリイもその手伝いに行き、ノアは本を取り出して読み出し、俺は特にやることもないのでボーっとするが、となりでジンが頻りにキッチン^{しき}のほうの様子を確認している。

そんなに飯が待ち遠しいのだろうかなどと考えていると、ジンが立ち上がる。

「リユーヤ、ちょっとクレアたちが来ないか確認しといてくれ」

どうやらジンは無謀にも女子の部屋を物色しようとしているらしい。

「断る」

「えー、いいじゃないかよ」

わざわざ自分から地雷原に足を踏み込むほど俺は馬鹿じゃない。

俺の協力が得られないと諦めたのか、ジンはダンスに向かい取っ手に手をかけた。

「あんた何やってんの？」

ジンが固まる。

キッチンと居間をつなぐドアのところにはクレアがたっており、ジンを睨んでいる。一瞬、クレアが俺の方を見るが、首を振って俺は無関係であることを示す。

クレアはジンの襟をつかみ、そのままキッチンに引きずっていく、引きずられるジンの目には涙がたまっていた。

それから5分後リタが居間にやってくる。

「晩御飯できたよー」

俺はそれを聞いて立ち上がる。

「じゃあ、運ぶの手伝うよ」

そのあと、俺たちは食事をしながら楽しそうに話をする。ジンは、その様子を部屋の隅で正座しながら黙ってみている、自業自得なのではないが、なんとなく哀れに思えてきた。

その日結局、ジンがリタの料理にありつけることはなく、一人寂しく寮の食堂で晩飯を食べたらしい。

第26話 楽な方法を探してみても、そうそう上手くいくもんじゃない

この学校に通い始めて早十日、ようやく学校での生活にも慣れ始めてきた、そんな日の昼休み一人で学食に向かっている途中、知り合いと廊下で出くわす。

「お、リユーヤじゃんか」

「 그레이にライラ、久しぶり」

「お久しぶりですね」

こっちに来てからは、 그레이たちと会っていなかったので実に十数日ぶりの再会である。同じ学校といっても広いので出会う機会など、なかなかあるものではなかったのでこれも当然と言えば当然な気もする。

「なんだよ、こっちきてから一回も連絡こないから忘れられたかと思ってたぜ」

「連絡取るうにも連絡先知らないから無理だろ」

「確かにそりゃ無理だな、今から飯か？」

そういつて 그레이は笑う。

「そうするつもりだけど」

「じゃあ一緒に行こうぜ」

俺にとってはミリイの次くらいにこちらの世界では親しい人からの誘いを断るわけがなく、俺は快く了承する。

それにしても、兄妹で一緒に食事をとるとはこの二人は随分と仲

がいいんだな、一応、俺も妹とは朝飯と晩飯は一緒に食べてたが、わざわざ学校で一緒に食おうとは思わなかったな。

俺はグレイとライラと話しながら、学食へ向かうのだがなんだか周りの視線が気になる、髪や眼に向けられるものとはなんとなく異質な一体なんなのかはわからないが、時々殺気のようなもので感じるのは気のせいであろうか？

「なあ、なんかさつきから周りの視線が気になるんだが？」

グレイはその話を聞いて何か気づいたのか、笑みを浮かべて耳打ちをしてきた。

「ライラは人気あるからな」

なるほど、そういうことが。

確かにライラはかなりの美人だから人気があるのも仕方ないだろう、と考えながらライラのほうを見ていると、状況がうまく呑み込めていないのか、ライラは小首をかしげる。

「リユーヤさん、どうかしたんですか？」

「いや、なんでもない」

その視線に耐えたまま、ようやく学食に着き空席を見つける。

席はグレイが見ていてくれるというので、俺とライラは二人で注文に向かった。

二人で歩いている分、先ほどよりも視線に含まれる殺気が増した

ような気がしたが気のせいだと思いたい。

俺は 그레이の分の食事注文して元の席に戻ると 그레이が知らない男子と話していた。

「わかった、明日でいいか？」

そう 그레이が言うと、その男子はうなずきすぐにどこかへ行ってしまった。

「何かあったのか？」

「ちよつとな、まあ、そんなことより早く喰おうぜ」

どんな内容であつたのか気になるが、言わないのなら聞いただけ野暮というものだ、と思い俺はそのまま席に着き食事をとる。

—— 昼休みも終わり今日も演習の授業が始まる

最近、みんなの動きを見ていてジンが弱いとか言われている理由がわかってきた。

爆発という魔力の特性上、防ぎにくくはあるが、他の4人が避けるのが上手いのか、ジンが狙うのが下手なのか避けられ、近距離になつてしまうと爆発で自分もダメージを食らうので使えなくなり詰むというのがいつもの流れであつた。

俺の場合は、近接戦闘でも勝てない上に避けられないのでどうしようもないが、これから練習していけば近接戦では勝てるくらいにはなれると思う。

それにしてもそのほかの四人は、全く勝てる気がしない。

クレアは加速による突きで開始と同時に負けが決定するし、ジンの銃弾がよけないのにリタのナイフがよけられるわけもなく、ノアは1撃防ぐのがやっとで2撃目の魔法と鎌の2段攻撃を防げやしない、ミリイは手加減してくれてるけど、本気で来たら何もできずに終わる自信がある。

戦闘において、俺は明らかに遅れているのだから今更追いつくなどとは思わないがせめて、足手まといにならない程度にはなりたい、そのためには基礎的なことは当然として工夫が必要だが、どうすればいいんだか……

そんなことを思いながら、素振りをしてその日の授業を終えた。

さて、俺の足りない頭で考えて見てもろくな答えが出るとは思えないから、先人の知恵を借りようと思い図書館へと足を向ける。

本を探しては読むこと1時間、『これだけで強くなれる！』や『強くなるための一冊』など色々な本を読んでみたが、どれも最終的にはとにかく練習しろとしか書いていない、確かにその通りなのだが、そんなことは言われなくてもわかるから、もっとわからないようなことを書いてもらいたい。

今度は武器による戦闘の教本ではなく、魔法についての本を探して見ることにしたが、自分の属性の魔法でさえ完全には使いこなせていないのだからとりあえず、自分の属性ぐらい扱いこなせるようになるうと思ひ、保存属性に関する本を探してみるがなかなか見つからない。

やっとのことで見つけた本には、すでに知っている情報以外には

『旅商人にとっては夢のような属性だ』としか書いてなかった。

旅商人になろうにも旅の途中で魔物に倒されたら、夢半ばで終わってしまうじゃないか。

結局いくら調べての魔法の保存のやり方さえ分からない、見つけた資料によると魔法の保存に成功した前例は一名のみで、その人物がその方法を語らなかったために、いまだにその方法は分かっておらず、その人物の後にはほかに保存属性の人は現れなかったためにその方法も研究されていないらしい。

その人の戦闘時の記録などから、一つだけ俺にもできそうなものを見つけ、俺はその方法を試すために自室へと帰った。

——次の日の昼休み

昨日見つけたものを昨日の夜に試してみたが、あまりにも魔力の消費が激しすぎて普段から使おうと思えるような代物ではなかった。もしもの時に使えば大きな効果があるだろうが、その時に魔力がなければ使えないので使い勝手の悪さは変わらない。

ついつい、悩みが口をついて出てくる。

「一体、どうすりゃいいんだか……」

そんなことを呟きながら廊下を歩いていると校庭のほうで騒がしいことに気付き、窓から見てみると校庭に人だかりができています。なんとなく、気になり俺も外に出てその人だかりの中へと加わった。

第27話 俺は何もやってない、信じてくれ！

人だかりの真ん中には、昨日グレイと学食で話をしていた生徒とグレイが向かい合って立っていた。

一体これから何が起こるのかわからないが、仲良く食事に行くのでないことは確かであろう、状況を詳しく知りたくて人ごみをかき分けていくのもいいが髪と目の件があるからできれば目立ちたくないの、後ろから二人の様子を眺めつつ周りの声に耳を傾ける。

「また、決闘か」

「今学期、始まってからは初めてだな、まあ十日に一回くらいだからいつも道理か」

「ここで勝ってもフラれるだろうに、よく頑張るよな」

「お前どっちにかける？」

「そんなのグレイ先輩に決まってるだろ、あんな貧弱そうなやつにかけてられるかよ」

わかった事はこれから始まるのが決闘であることと、結構な頻度でこれが行われていることと、グレイが勝つであろうということ。

とりあえずグレイの戦いを見たことなどなかったし、少し興味もあるので観戦させてもらおうと思いい俺は人だかりの後ろで戦いが始まるのを待った。

しばらくすると人ごみを開いて学校の教官らしき人物がやってきた。

「この決闘は校則第17条に基づいて行っ、両者異論はないな」

二人がうなずきそれを確認した、教官が紙を取りだし何かを書き込む。

「ここに両者の決闘を認める、ではそれぞれ戦闘準備を」

そう言われると同時に、二人は離れ15m程の距離を開ける、グレイの相手の生徒は両手にダガーを持ちかまえ、グレイは特に何も武器を持たずに構える

「始め」

教官のその一言を聞くと同時にグレイが駆け出し、相手はそれを阻むように5つの火弾を放つ。

詠唱などの時間が全くなかったことから相手の属性は火でほぼ間違いないであろう。

俺はその火弾をグレイは避けるものだと思って見ているが、一向に避ける気配など見せずにまっすぐにグレイは突き進み、火弾はグレイに直撃した。

どうやら、ただの火弾ではなかったようでグレイに当たると同時に火が膨れ上がり、あたり一面を火がつつむ。

俺はなぜか動揺などしていなかった、グレイに火弾が当たったところも確かに見たが最後まで余裕の顔をしていたグレイがやられたとは到底思えなかった、そしてその予想は当たった、火の海の中から飛び出してきたグレイは煤一つつかない完璧な状態で相手に向かってそのまま駆ける。

相手は動揺を隠せないようで、先ほども大きな火弾を放つが、グレイはそれを避けずに突き進む、そして火弾の中を通り抜け相手の目の前までたどり着き、相手の足を払い転ばすと同時に相手のダガーを奪い、相手の首元に突き付けた。

一体、なぜ火が効かなかったのかはわからないが、実力の差は圧倒的だっていうことは俺にも分かった。

「そこまで」

教官のその一言の後に回りの生徒は『大穴が外れた』だの『やっぱり駄目だったか』だの言いながら解散していく。

人が減っていき、目立つ髪色の俺は目につくのか、どうやらグレイは俺に気付いたようでこちらに向けて手を振っている。

まあ、さっきまでグレイは注目されてたわけだから、こんなことをすれば俺が目立つわけで、髪の色とかそういうこともあってか周りはざわつき始める。そんなことも全く気にせずにこちらにまっすぐ歩いてくるグレイは、かなりの大物だと思う。

「なんだよ、リユーヤも来てたのか」

「まあ、一応……」

そんなことよりも今は周りの視線のほうが気になる、はやくここをはなれないと。

「なあ、グレイはもう飯食べたか？」

「いや、まだだが」

「じゃあ、学食行こうぜ！　今すぐ行こう！　すぐ行こう！」
「まあ、いいけどそんなに急がなくても時間はあるぞ？　おい待って」

そんなことを言うグレイを無視して、俺は早足でその場を離れる。その速度を維持したまま俺は、学食まで向かった。

学食について、結構空いていたのでそのまま料理を取り適当な席に座った。いつもならすぐにでも食事を始めるところだが、今回は気になったことがあったので食べるよりも話し始める。

「ところで、なんで決闘なんかしてたんだ？」

他人が気やすく立ち入っていい話なのかは分からないが、決闘なんてものをするからにはそれなりの理由があるのだろう。

グレイはあたりを見渡し手から俺に耳打ちをした。

「昨日も言ったが、ライラはそれなりにモテるんだよ。それでまあ、以前は結構な頻度で告白されてたわけだ」

まあ、それについてはよくわかったが、それと決闘がどう結び付くのか教えてほしい。

「それでまあ、ライラも優しい性格だから断るのに罪悪感を覚えちゃってな」

まあ、確かにライラは、相手が落ち込むの見て喜ぶような人間ではないだろうな。

「それでうちの親父が『兄より強い人がいい』っていうように言った結果、ライラに告白する前に俺と決闘する風習が付いちまったわけだ」

「何ともばかげた理由の決闘だな」

「まったくだぜ、おかげで俺は十日に一回は、ああやって賭けの対象になるわけだ、ちなみに今日の奴はこれで三回目の決闘だ」

そこまでするならいつそのことフラれたほうがいいんじゃないだろうかと思えるほどに哀れな奴だな。

「グレイも断ればいいのに」

グレイはそれに対して首を横に振る。

「いや、決闘を断るつてのは負けるのと等しいから結局、俺は負けたことになっちまうからな。ライラのためを思ったら俺は勝たなきゃいけないんだよ」

何とも優しい兄貴だな、俺だったら妹のことなど気にせずに断るだろうに。

「まあ、正直な話、俺も決闘自体は嫌いじゃないがな」

「俺は決闘なんてお断りだな」

今の状況で勝てるわけがないし、勝算があつたとしても戦いたいとは思わない。もともと俺の目標はできることなら帰りたい、それができないなら平和に暮らしたいなのだから決闘などもつてのほかだ。

「そつも言つてられないぞ」

「なんでだよ、そもそも俺は決闘なんて仕掛けられるような理由は何も……」

まさか、黒い髪だからなんて理由で決闘にはならないだろう。

「今日戦ったやつなんだがあいつはライラのファンクラブの一員だな」

ファンクラブまであるのか、全くライラの人気はすごいな。

「それで今、ファンクラブの間ではお前の話題で持ちきりらしい」

少しライラと世間話して一緒に飯食って連絡先交換しただけでこれかよ、めんどくさいなまったく。

「ああ、理由はなんとなくわかったが、決闘なんて仕掛けられたら断ればいい話だろ？」

「まあ、そうだが」

そこで口ごもる 그레이 に不安になる。

「あいつら、なぜか知らんが、こっちの了承とる前に決闘を組んできやがるからな」

「はい？」

「裏で教員とつながってるんだろ？が、組まれた決闘は無視すると学校での成績にかかわるからな」

なんてこった、そんな不条理がまかり通っていいものかいやいけない、でもどうしようもないのが現実なわけで。

周りを見渡すと何名かが視線をそらす。

グレイは元からこの視線に気づいていたのだろう。

「まあ、頑張れよ」

そう言っグレイは俺の肩に手を置いた。

頑張りたくなどないが、いったい俺はどうすればいいのだろうか
？ 冷や汗が頬を伝い流れ落ちて行った。

第28話 旅行に行くなら北？ 南？

あれから二日がたったが、今のところ誰かに決闘を申し込まれてはいない、できればこれから決闘などしかけられないでいられば良いのだが……

俺はそんなことを考えながら、この後の戦闘訓練の授業のため訓練場へと向かう。

訓練場に着くと、いつもはみんな練習をしているのだが、今日はみんな集まって何かを話し合っている。

「みんな集まって何の話してるんだ？」

「お、リユーヤ来たか。ほら、これだよ」

そう言ってジンから渡された紙に俺は目を通す。

「実地訓練？」

「そう、そこに書いてある訓練の内容から一つ選んで受けれてな、内容にあっただけの期間学校は休みになるから、早く終わらせれば長期休暇がとれるんだよ」

書いてある内容を見ると休暇期間が少なくとも七日多くて十五日のがある。

「じゃあ、この一番長い十五日休みが取れるのをやるのか？」

「今回はそれじゃなくて、こっちの九日休みのとれるやつにしようかと思ってる」

「なんでだよ十五日のやつのほうが……」

そう俺が言いかけると呆れたようにクレアが口を挟んでくる。

「バカね、あなたがいるのにそんな任務できる訳ないじゃない」

「ああ、そっか……」

まあ、実際足手まといにしかないだろうから仕方ないが。

「とりあえず星無し、あんたは今回はただ荷物運びして、後ろで見
てればいいから」

「わかったよ」

口ではこう言っで見せるが、何の役にも立たない自分が少し悔し
かった。

全体的に話がまとまってきたことを確認し、ノアが口を開く。

「出立は明後日の朝五時、それまでに各自準備をしておいてくれ」

それだけを聞くと各自訓練の準備に入る。

俺も軽く準備運動をしてから、訓練に臨んだ。

——その日の夜、俺は訓練場で人を待っていた。

夜の闇の中から聞こえてくる足音に気付きそちらの方を向くと、
そこにはよく人物がいた。

「呼び出して悪かったな 그레이」

「別に用事もなかったから問題ないぜ、それで何のようだ？」

そういいながら、グレイはいつものように微笑んでいる。

「少し特訓を手伝ってほしい」

「何だそんな事なら任せとけ」

そうグレイは笑顔で答え、俺は内心ほっとした、断られるとは思ってなかったがもし断られたなら明後日までにこの技を完成させることはできないだろう。

「別に同じ班のやつらやミリィに頼んでもよかったんじゃないのか？」

「なんかさ、隠れて特訓ってワクワクするじゃん！」

ただこれだけの理由で俺はグレイに手伝ってもらったんだが、まあ、きっと共感してくれるだろう。

「確かにそれはワクワクするな！」

ほらなやつぱり。

「それじゃあ、さっそくで悪いが相手してもらっぜ」

そう言い俺は腰を落とし構える。

「武器はいいのか？」

「あいにく、武器を使ってもこいつは変わらないんでね」

その一言と同時に俺は駆け出した。

——2日後午前5時

「ねむい……」

「リニュー様、しっかりしてください」

そんなことを言われようと眠いもんは眠い。

結局、おとといの夜から特訓したのだが、上手くいくかどうかは五分五分といったところ、上手くいけばそれなりに効果はあるのだが失敗すると効果は半減どころか魔力の無駄使いに。

まあ、俺が戦うような事態にならないことを祈りながら俺は歩き出す。

基本的に移動は徒歩、そうでなければこの前のつた車を使うらしいが、この世界でも車を運転するのに免許がいるらしく誰も免許がないということ、しょうがなく歩いての移動である。

今は街を出て街道を進んでいる、街道といっても軽く整地されている程度で石畳などの敷かれている街中に比べるとだいぶ歩いていて疲れる。

皆荷物を俺に預けているので、はたから見たらのんきに散歩している集団に見えなくもないだろう。

俺は伸びをしながら、空を見上げ晴れてよかったなど考える。

目的の街に着くには、歩いて半日ほどらしいが、途中で休憩などを挟むので1、2時間ほど長くなる予定だ。

最近は夏の暑さも和らぎ、過ごしやすい温度になってきたので以前山に登った時に比べれば強化も使える分かなり楽だ。

——歩くこと4時間

街の外は危険だということもあつてか、街を出てから今までにすれ違った人や車の数は数えられるほどしかない。

「そろそろいったん休憩にして、今日の事について話し合いたい」

ノアの呼びかけに反応して俺たちは道の脇の草むらに腰かける。

「まず、今日の目的地に着いた後の行動だが、基本的には被害状況の確認、及び魔物がどれほどのものなのかに関する聞き込みをする」

これは昨日ジンから聞いた話なのだが、この実地訓練は軍を出すほどもないがある程度被害が出ている事件を訓練という名目上、学園の生徒にやらせているらしい。つまり被害の方もそれほどもなく、魔物の強さもそれほどではないことが、事前に保障されているようなものだ。しかし極稀に生徒の手におえないような魔物が出てくることもあるので気を抜くことはできないらしい。

「今入手できている情報では、魔物は名前のない下級の犬型の魔物で、群れで行動する種類らしく、数が増え食料を求めて村を襲った可能性が高い」

そこまで聞いてリタが手を挙げる。

「でも、群れで行動するならその群れのボスまで下級とは限らないんじゃない？」

確かにボスが群れのほかの魔物よりも弱いということはないだろう。

「いや、すでにボスらしき魔物の存在も確認されているが村からの報告ではほかの魔物よりも一回り大きい程度だそうだ」

「そっかー、でも、もしかしたらもっと強いのがいるかもしれないから気を付けたほうがいいよね」

「そうだな、そのあたりは事前にリタに調べておいてもらうことにしよう」

「りょーかい」

そういいながらリタはふざけたように敬礼をする。

「戦闘の際の陣形などの連絡は事前調査をした後に行う、ではあと20分後には出発するからゆっくり休んでいてくれ」

その後、俺たちは二度の休憩を挟みながら、なんとか暗くなる前に村に着くことができた。

「つかれたー」

俺はベッドの上に倒れこむ。

「この程度で疲れてたら、魔物なんかと戦えねえぞ」

そう言いながらジンが俺の隣のベッドに腰掛ける。

宿では三人部屋を二部屋予約し男女で分かれ、今はノアが村や宿についての説明を受けに行ったので、今部屋にいるのは俺とジンだ

けである。

「とりあえず、晩飯食ったら酒場に行って情報収集だな」

俺はそれを聞いて飛び起きる。

「おお、酒場行くのか」

ファンタジーな世界の情報の集まる場所と言ったらやっぱり酒場なのだろうか。

俺は酒場についての想像に胸を躍らせていた。

第29話 酒は飲んでも飲まれるな

宿で晩飯を食べ終え、俺たちはそのまま酒場へと向かった。

それにしても、学生服で酒場に入ってもいいのだろうか？

基本的に実地訓練中の行動は、制服を着る決まりらしいが、これでは目立って仕方ない。

そんなことを考えているうちに酒場に着く、酒場からは明かりと喧騒があふれだしてきており、ほぼ俺の想像していたものと変わらないであろうことが、店の外からでもわかる。

店の中の人々は、程度の違いはあるもののほとんどの人がこの空間を楽しんでいるようで笑みを浮かべている。

俺はそんな周りの様子を見ながら、ノアたちについていき席に着く。すぐに、ウェイトレスが俺たちのところまでやってきた。

「いらっしやいませ、ご注文はお決まりでしょうか？」

俺は、俺たちの居る丸テーブルのどこにもメニューらしきものがないことを確認する。恐らくは酒場にあるものはたいてい決まっているからメニューなどないのだろう。

とりあえず俺は何があるかわからないから黙っていると、ノアが応対する。

「晩飯は済ませてきたから、適当な飲み物を」

「学生さんみたいですけど、お酒は大丈夫ですか？」

そう聞かれてノアがこちらを向いたので、大丈夫だと頷いて見せ、ミリイも同様の反応をした。

「大丈夫だ」

「わかりました、ではすぐにお持ちしますね」

そういうとウェイトレスはカウンターの方へと向かって行った。

それにしてもこんなところでどうやって、情報を集めるのだろうか？ 方法がわからない俺はとりあえず黙っていた方がいいだろう。

「それにしても、本当に騒がしいところね」

そう言ってクレアが少し煩わしそうにする。クレアは酒場が嫌いなのだろうか？

「私もそんなに酒場は好きじゃないな」

「私もあまり」

どうやら女性陣はみな酒場がお気に召さないらしい。まあ、酒場好きな女ってのもどうかと思うが。

そんな話をしているとウェイトレスがトレーに6つのジョッキに入ったビールらしきものを乗せてやってきた。

「確かにちよつと女性は酒場に入りにくいですよね」

どうやら俺たちの話を聞いていたようで、苦笑いしながら話しかけてきた。

それに対して、ノアが頭を下げる。

「聞かれていたか、済まない」

「いえ、普通のことですし大丈夫ですよ」

そう言ってウェイトレスは微笑む。

「そうか、ところで、一つ聞きたいことがあるのだが？」

「なんですか？ 私にこたえられることなら答えますよ」

「最近この街にやってくる魔物の話を聞きたいのだが」

そういうとウェイトレスの人は少し困った顔をする。

「私は直接見たわけじゃないので、何とも言えませんね」

「そうか、感謝する」

そう言ってノアが頭を下げると、ウェイトレスの人は何かを思いだしたような表情を浮かべた。

「あつ、でも魔物を見たって人ならいますよ、ほらあそこで飲んでいる2人です」

そういつてウェイトレスが指示した先には、おっさん二人組が飲んでいた、もうずいぶん飲んだのか顔が赤かった。

「感謝する」

ノアがそう言うと、ウェイトレスは会釈をしてどこかへ行ってしまった。

「ジン、いつも通りに頼む」
「あいよ」

ジンは勢いよく返事をして立ち上がり、ジョッキを持ちおっさん二人の方へとジンが歩いていく。

おっさん二人にジンが何かを話しかけているが俺には聞き取ることができない。あ、乾杯した。

状況はよくわからないがジンはおっさん二人と仲良さそうにしている。

「では、こっちも乾杯しようか」

ジンは、放っておいていいのだろかなどと考えながらも俺はジョッキを持つ。

「乾杯！」

全員の声が重なり、ジョッキのぶつかり合う音が響いた。

とりあえず一口、ビールの味など覚えていないが確かこんなものだったと思う。

俺はジョッキを置きジンの様子を伺うと、すでに肩を組んで飲むほどに仲良くなっている、放っておいても問題なさそうだな。

10分ほどが経ち、ジンが俺らのところへ戻ってきた。

「聞いてきたぜ」

ノアはジョッキを置き口を開く。

「さっそく話してくれ」

「了解、基本的には事前情報と大差ないが、どうもひとつ間違いがあったみたいだ」

間違いという言葉に全員が怪訝そうな顔をする。

「どうも、あのおっさんたちの話だと、群れのボスの大きさが、ほかの魔物の大きさの倍以上もあったらしい」

「倍以上か……無名の魔物といってもそこまで行くと中級くらいにはなってもおかしくないな」

中級といわれても、どの程度のものなのかわからない俺にとっては、どうしようもないことだ。

「気をつけたほうがいいわね」

俺はこっそりとミリィに耳打ちをする。

「中級ってそんなにすごいのか？」

「そうですね、あえて言うなら、初級魔法しか扱えないリユーヤ様では、何の役にも立たない程度には強いですね」

このメイドさんは俺の心を見事にえぐってくれやがる。

そろそろ店を出ようかという雰囲気になった時、俺たちにハゲたおっさんとヒゲモジャのおっさんの酔っ払い二人組が近づいてきて

話しかけてきた。相当酔っているようで、足元がふらついている。

「おう、その嬢ちゃんたち俺らと一緒に飲まないか？」

その二人の様子を見て眉をひそめクレアが答える。

「わるいけど、私たちもう帰るところなの」

そう言って追いつ返そうとするクレアの腕をハゲが掴む。

「いいじゃねーかよ、そんなさえねえ奴らはおっておいて、向こうで飲もうぜ」

俺がさえないのはともかく、他の二人は十分にさえていると思うぞ。

そんなことを考えている俺をよそにさえている二人が動く。まず、ジンがハゲの手首をひねりクレアから手を離させる。

「いてててて」

「おいおっさん、悪いが俺達は帰るって言ってるんだ黙って帰らせてくれ」

その様子を見て、ヒゲがジンに殴り掛かる。

「女おいて黙って帰んな」

ジンへと向かっていく拳は途中でノアによって妨げられ、そのま
まノアは相手の腕をひねりそのまま背中の方へと回る。

「いい加減にしてくれ」

そう言ってノアが手を放し、ひげの背中を押すと、ヒゲは肩をさすりながら舌打ちをし、自分のテーブルの方へと行ってしまった。

同様にジンもハゲの手を放すと、ハゲも逃げるようにしていなくなった。

「これだから酒場は嫌いなものよ」

まあ、嫌いな理由はよくわかったが、本当にああいうことであるんだな。

そのままカウンターでノアが支払いを済ませ、俺たちは店を出た。

第30話 やってみれば案外できるもんだよ

あたりには草が生い茂り、木々が立ち並ぶ中に俺たちは座っていた。

「見てきたよ」

リタの声が聞こえ、その方向を見ると次第にリタの姿が見え始める。

ノアが立ち上がり、リタに話しかける。

「状況はどうだった？」

リタは肩をすくめる。

「あんまりうれしい状況じゃないね、洞窟の入り口に6匹も見張りにいたから中までは確認に行けなかったけど、統率はかなり取れているみたい。見張りの動きにも無駄がなかったしあれは気づかれずに入るのは無理そう」

ジンが立ち上がり、ホルスターから銃を抜く。

「じゃあ、俺が入口ごと吹き飛ばしてやるよ」

それを止めるかのようにクレアが口を開く。

「入れなくなったらどうする気よ？」

ジンはクレアに言われてはつとする。

「それもそうか……」

その様子を見ていたノアが指示を出し始めた。

「今回は前から順に俺、ミリィ、リタ、リユーヤ、ジン、クレアの
一列になって洞窟に突入する。戦闘時に苦戦が強いられるような場
合は各自の判断に任せる、以上」

「了解」

全員が声をそろえて答えた。

洞窟の近くまで来ると、ノアが手を挙げて止まるように促す。

ここからすでに魔物は目視できる距離にいる、見た目は少し大き
めの体毛が紫の狼といったところである、リタの魔法により臭いと
音を隠しているので今は気づかれていないが、この近さまで来れば
いつまでも気付かれないというわけにもいかない。

ノアは俺たちの様子を確認すると、一気に駆け出した。

ノアの存在に気付いた見張りの魔物が、一匹は遠吠えをし、残り
はノアに向かって駆け出した。

ノアは飛びかかってくる魔物を鎌で切り裂き、その間にリタが離
れたところにいる魔物の眉間や首にナイフを飛ばし絶命させていく。

「一気に突入する」

その指示を聞き、俺たちも飛び出し洞窟へと入っていった。

洞窟の中ではミリイが作り出した火の玉を明かりとして進んでいく、先ほどの遠吠えを聞いた魔物の仲間がやってくることは間違いないだろうから、常に気を付けなければならない。

「来るぞ」

ノアのその言葉を聞き全員が構える。ノアの言葉通りに次第に近づいてくる足音と獣の声。

獣が見えたその瞬間に二つの炎の槍が放たれ、獣たちの鳴き声が洞窟に響いたがすぐにその声は止まり、洞窟のところでどこかに火のついた魔物の死体が転がった。

「相変わらずスゲーな」

ジンが笑いながらそうつぶやくが、全くを持っておれも同意見だ。

「今のは少し数が多いようでしたので、勝手ながら待機していた魔法で片付けました」

「いや、問題ない先を急ごうできれば外にいた魔物が戻って来て挟み撃ちにされる前に突破したい」

確かにノアの言う通りだ、面倒くさくなる前に片付けれるなら片づけてしまいたい。

俺たちは洞窟の奥へと進んでいくが、特に分かれ道があるわけもなく、魔物も襲ってこないここまで簡単であることに安堵しながら

らも何か違和感を感じていた。

「少し待ってください」

ミリイの呼びかけに反応して全員が止まる。

「この先に広い空間があります、おそらくそこが最深部かと思いますが、どうも様子がおかしいです。魔物が全くいません」

一体どういうことなのか分からないが、ノアは何かに気付いたようであった。

ノアは駆け出し俺たちもそれに続くが確かに奥には魔物はいなかった。

その様子を見てノアが焦ったように声を上げる。

「今すぐに村に引き返す、全員急げ」

その言葉を聞き俺を含め全員が理解する。

魔物は村へ向かったのだと。

俺たちは走った、いくら急いでも俺が遅いという事実は塗り替えようがない、俺の次に遅いジンでさえもすでに米粒ほどの大きさになっってしまったている。

ここから村まで来るときは歩いて50分ほど、クレアであれば2、3分もあればたどり着けるであろうが、俺では良くて7、8分といったところであろうか。それでも走らないよりはましだ、だから俺

は走ったとにかく走ったそして山を抜けた村が見えたときにはすでにみんなは戦いを始めていた。

村を囲っていた木製の柵はなぎ倒され壊されている家屋も見受けられる、そのなかで逃げる者もいれば俺たち同様に戦っているものもいる。

しかし、大きな問題が一つあった、魔物の大きさがおかしいのだ。

明らかに先ほどまで戦っていた、魔物とは大きさが違う2倍、いや3倍はあるであろう魔物が数十匹もいる。

つまり、いままで魔物のボスだと思っていた魔物が普通のサイズで基本だと思っていたものがただ小さかったただけであつたのだ。

膝が震えている、正直な話怖くてたまらない、逃げれるのなら逃げたい、それが正直な俺の思いだ。

けれど、仲間たちが戦っている、俺だけ逃げるわけにはいかない。

こういう時のために俺は特訓をしてきたんだ、グレイとの特訓を思い出せ、俺はできる。

俺は深く息を吸い、強化を施していく。

そして俺は駆け出した、みんなの様子を見てみると先ほどと違い一撃で仕留められていない、おそらく体が大きくなった分、体毛が邪魔をして上手く攻撃が通らないのであろう。

それでも、威力のある魔法を駆使して敵を仕留めて行っている、

しかし俺がつかえるのは初級魔法だけ、これではとても仕留められたものじゃない、でも俺にはあれがある。

ジンの背後から近づく魔物を見つけ俺は駆け出す。

ジンも背後の魔物に気付いたようだが、目の前にも魔物がいて両方を相手にすることはできそうにない。

今のままでは間に合わない、だから俺はここであの技を使った。

俺は一瞬で魔物との距離を縮め、その首を切り落とす。

俺が移動した場所には魔力が帯のように残り、俺の体からは魔力が溢れ出している。

ジンが目の前の魔物に爆発を浴びせ、俺のところへ驚いた顔で駆け寄ってくる。

「おい、リユーヤ今いったい何したんだよ？」

「説明はめんどくさいから後でだ、言っておくがそう何度もできる技じゃないからここからはほとんど手伝う程度しかできないぞ」

正直な話ここまでうまくいったことに俺自身が驚いているくらいだ、次やつても今と同じくらいうまくいくかどうかも解ったもんじゃない。

「まあ、なんでもいいが助かった」

そして、次の魔物へと向かうジンの後ろに俺はついて駆け出した。

第31話 一瞬一瞬を本気で生きよう、時には本気以上で生きよう

みんなの活躍のおかげで魔物の数は減り、残りは数えられるほどしかいなくなったとき、森の中から遠吠えが聞こえてきて、魔物たちが引いていく。

「全員集合しろ」

ノアの呼びかけに全員がノアのもとに集まる。

「想定していたよりも敵が強い、とりあえず学園に連絡はするが、おそらくはこのまま任務は継続することになる」

まあ、こんな状況の村を放って帰るなんてさすがにできる訳がない。

この世界では、ガスなどは使っていないので家屋の倒壊は見られなくても、火事などは見受けられないのは、不幸中の幸いだらう。

怪我をした人々を、街の医療施設の人たちに任せ、俺たちは宿にいったん戻った。

学園に状況を伝え終えたノアが、部屋の中へと入ってくる。

「全員集まっているな、予想通り任務は継続だが、期間は3日延長された。今回の戦闘で向こうもかなりの数が減ったはずだが、おそらくはまだ頭は出てきていない」

「だろうな、最後に森の方からした鳴き声がボスだ」

確かに、魔物たちは最後に鳴き声がして引いて行った。当然その声の持ち主がボスだろう。

「今回の戦闘の状況を報告した。魔物のランクは下級の中でも上位に位置されるものであり、そのボスは中級であるという見解だ。今回の目的は変わらず、魔物の掃討だ、皆今日はゆっくり休み明日に備えてくれ」

そう、ノアが告げるとクレアが手を挙げる。

「星無しは参加させないほうがいいんじゃないの？」

「クレアはジンを助けたときのリユーヤの動きを見ていたか？」

ジンの問いに対し、クレアは肩をすくめて対応する。

「見てなかったわ、あまり余裕がなかったから」

「俺も、しっかりとみていたわけではなかったが、明らかに普段とは逸脱した力を見せていた、現に魔物を一太刀で絶命させていた」

ノアの言葉に、信じられないといった顔で女子陣が見てくる。

「俺もよく見てなかったんだが、確かにリユーヤに助けられたぞ。一体何したんだ？」

隠していても、どうしようもない、まだ魔力も残っているし実際に見せたほうが速いか。

「実際に見せたほうが解りやすいだろうから、いったん外に出ようか」

俺がそういうと、みんなが立ち上がり俺たちは外に出る。

「じゃあ、ちょっと待ってるよ」

俺は準備をしながら、全員の様子を伺う。

ジンは何だかワクワクしているようだが、他の4人は、俺が一体何をするのかを見逃さないように、注意深く俺のことを観察している。

「おし、準備できた」

より一層、皆の視線が集中する。

俺は、ここから50メートル程の位置にある木に狙いを定め、剣を構え、駆け出す。一步目の踏込の瞬間に俺の体から魔力が吹き出し、一瞬で木までの距離を埋め、剣を横に薙ぎその勢いのまま気の後方10メートルほどの位置で立ち止まると、木が倒れる。

全員が、一体何が起こったのか解らないといった表情をしている。

「なによ、今の……!？」

一番最初に、驚いた表情とともに口を開いたのはクリアだった。

「飛び込みながら木を切り倒した、一歩で」

口で言えばそれだけの話だが、実際はもう一つ行動をしている。

「だから、なんでそんなことができるのよ!？」

「保存の応用技だよ。強化の際に体に満たした魔力をいったん保存して、もう一度強化をかけた後に解放する。これだけで強化の効果は一瞬だが二倍まで上がる、これをいくつもかけたってだけの話だよ。まあ、次第に抑えきれない魔力が抜けてくから、一発だけの必殺技ってとこだ」

実際は、魔力の消費も激しい、文献で見たのは魔力が溢れ出していたなんて書いていなかったから、おそらくはもつとうまい方法があるのだろうが、今の俺にはこれしかできない。

次の目標は魔法の保存だが今はこれで我慢しておこうと思う。

俺がみんなの方へと歩いていくと、ノアが口を開く。

「なぜ、今までは使わなかった？」

「正確には使えなかったんだよ、暗中模索しながら、なんとか形になったのは、おとといの夜中だし」

魔力を開放するタイミングをミスすれば、一步目の飛距離と速度が無くなってしまう、最高のタイミングで魔力を開放し正確な飛距離を知ることこの2つができて初めて使える技である。ただ切るときに魔力を開放してもいいが、そんなのは練習がいらぬ上に懐に入り込めなければ意味がない。

ほかに相手の攻撃に合わせて解放することで、相手よりも早く剣を振り反撃するというのも考えたが、解放のタイミングがよりシビアなので、後でということになった。

「クレア、これならリユーヤも戦闘に参加して問題ないだろう？」

「ええ、まさか、こんなことができるなんて思ってもみなかったわ」

どうやら、明日からも俺の戦闘参加が決まったらしい。まあ、こ

んな必殺技見せたっていうのに認められなかったら軽くへこむが。
俺が少し認められたような気がして喜んでいると、ミリイがこちらに歩み寄ってくる。

「私にぐらいは、教えていただいてもよかったのではないですか？」
「いやー、奥の手は最後まで隠してた方が盛り上がるからね」

そんなことを話していると、ジンやリタも近寄ってきた。

「なんか、わかんねーけど、今のすごかったな」
「リユーヤもやればできるんだねー」

正直な話、うまくできるかは心配だった、今のが強化の七倍で、初歩での大体の飛距離もわかっていいる
がこれより多くなるとどうなるかなどはまだ試していない
七倍の時の踏込みはグレイも本気で対応しないとイケないほどだったらしいから、恐らくはそこらの魔物には負けないだろう。

ノアも近寄ってきて俺に質問をする。

「リユーヤ、その技は何回くらい使える？」
「今と同じのなら三回と今のより少し弱いのが一回つてところだが、これ以上強いのはやったことないからぶっつけ本番になるからあまり使いたくない」

俺の言葉を聞いて、ノアが少し悩む。

「では、こうしよう。リユーヤ、お前が相手のボスを仕留めろ」

一瞬の沈黙が流れる。

「いやいやいやいや、俺なんかが仕留められるわけないじゃん」

俺が必死に否定するが、ノアもそれを首を横に振って否定する。

「瞬間的ではあるが、間違いなく、その瞬間にお前の力量は俺たちを超える。相手のボスが中級だというのなら俺たちの攻撃では仕留めるのは厳しい。それに、その技は回数が少ないここぞという時以外に使っては意味がない」

確かに言ってることは理にかなっているが、俺なんかが仕留められるだろうか？　だが今はやるしかないか。

「頑張ってみるよ」

こうして俺は、相手のボスを倒すという重大な任務を請け負った。

第32話 2度目の戦い

「やっぱり、いなかったよー」

そういいながら、リタが姿を現す。

昨日行った魔物の巣を偵察してきてもらったのだが、どうやらもう捨てられてしまっているようだ。

「そうか、ミリイ頼めるか？」

「はい」

ミリイはそう返事をする目と目を閉じ、集中し始める。

「見つけました、2時の方向、3キロほどの位置に多数の反応がありました」

「わかった、2・5キロほど進んだ位置で、もう一度リタに偵察に行ってもらおうでしょう」

そういつて、ノアが先陣を切って歩き出し、俺たちがそれに続く。

「それにしても、ミリイお前索敵なんてできるなら最初からやっておいてくれよ」

「リユーヤ様、申し訳ありませんこれは魔力消費が激しいので、あまり多用できないんです」

「そうなのか、じゃあ仕方ないなー」

ミリイが音属性の魔法を使えるからといってまさか、音による索敵までできるとは思ってもみなかった。つくづく魔法のすごさを感じ知らされる。

しばらく歩き続けると、ノアが立ち止まり、リタの姿が消える。それから数分後、リタが戻って来て魔物の巣穴があったという報告を受ける。

「全員準備ができたな」

全員が頷く。

「俺が先陣を切る、後に続いてくれ」

そう言っただけでノアが駆け出し、それに続いて俺たちも駆け出す。しばらく走っていると、魔物の姿が確認できた。

ノアが一気に加速し、まず一匹目の首を落とし、それと同時にミリイが炎の槍で周りの二匹を貫く。今見えている範囲で生きているのは残り二匹。

二匹は本能的にミリイが危険だと感じたのか、ミリイに向かって飛びかかる。

「甘いんだよ」

そう言いながらジンが銃の引き金を引く。一匹は避けたが、もう一匹は空中にいたため避けることができず、着弾すると同時に爆発が起こり、魔物は動かなくなる。

もう一匹の魔物は、圧倒的な不利を悟ったのか逃げようとするが、飛んできた4本のナイフに足を切られ動けなくなる。その隙を突くかのように、クレアが一瞬で距離を詰め、細剣で魔物の頭を貫いた。

「とりあえず、入口は制圧したな」

「それにしても、今度はでっけー洞窟だな」

ジンの言う通りで、この洞窟は昨日のものに比べると、入り口だけでも倍以上はある。

「作戦は昨日と同じだ、何か質問はあるか？」

ノアが全員の様子を確認する。

「何もないようだな、では突入する」

洞窟に入って少し進むと、7匹の魔物がこちらに向かってやってきた。

「喰らいしは、荒れ狂いし炎の牙」

ミリィのその一言と同時に炎の虎が4匹ミリィの左右から走り出し、魔物たちに襲いかかる。

「炎の塔よ天を貫け」

クレアがそう叫ぶと、魔物たちの足元から一本の太い火柱が吹き上がる。

しかし、それでもまだ2匹残っている。

「飲み込むは、大地の蟒蛇^{うわばみ}」

今度はリタがそう唱え、一匹の岩の大蛇が魔物を飲み込む。

「風の檻よ刻め」

ノアのその言葉が聞こえ、魔物の体が格子状に切り刻まれる。

「なあ、ジン」

「なんだ、リユーヤ？」

「お前は何かしないのか？」

「こ、今回は俺の分の魔物が残ってなかったからな、しょ、しょうがない」

「そうか、でもまた来たぞ」

たぶん、何の準備もしてないんだろうな。しかし魔物はここで俺たちのことを仕留める気なのか、今度は15匹もいる。

「あー、もうやってやるよ！」

「あれ、準備してたのか？」

「今から準備するんだよ！」

俺たちがそんなことを言っている間にも、4人は魔物を次々に倒していく。

「貫け、大樹の槍」

ジンはそう言い地面に手をつく、そこから木の根が魔物たちの方に伸びて行き、魔物たちの手前で巨大な棘となり、貫いていく。

「おお、2匹も仕留めた」

「見たか、これが俺の実力だ」

自慢げに言ってるけど、他の4人はもう何匹も倒しているぞ。

「わかったから、頑張ってくれ」

とりあえず、俺は魔力はできるだけ温存しておかないといけないから、観戦に専念中である。それにしても、ここまで圧倒的に倒せるなら、わざわざ俺がボスを倒す必要はないか？

しばらくして、魔物たちを倒し、再び俺たちは進み始める。

「思っていたよりも邪魔が少ないな、昨日の時点で戦力が減っていたのか、それとも奥に大量にいるのか」

ノアがそんなことを呟くのも納得できる。さっき魔物が来たってことはもうすでにばれているってことだ、それなのに魔物はもうやっつてこない。

「とにかく進んでみないことには、どうにもならないよー」

「確かにリタの言う通りだな、みんな細心の注意を払ってくれ」

結局そのあと魔物は現れないまま、かなりの時間が経過する。

「次は右です」

こうやって、分かれ道に来るたびにミリィが調べて教えてくれているので間違った道を進んでいるとは考えられないのだが、それでも魔物はやっつてこない。

「もうすぐ、多くの魔物が居る広場に出ます」

「わかった。全員、気を付けてくれ」

ノアのその一言で皆に緊張が走る。

そしてその直後に聞こえる魔物の遠吠え。そして、突撃してくる数えきれないほどの魔物たち。

「なんだよこの数!？」

ジンがそう叫ぶのも無理はない、まるで、氾濫した川の如く魔物は押し寄せてくる。前衛の魔物を倒しても、その屍を乗り越えて後ろの魔物たちが突撃してくるので、その勢いは止まらない。

「リユーヤ、真ん中を開ける一気に突撃しろ」

ノアがそう叫ぶが、正直な話どうやってこれの真ん中を開けるのだろうか？

そんなことを考えながらも、俺は強化を保存し準備をする。

そしてノアが鎌を振り下ろすと風の刃によって魔物達の間道ができる

「行け!」

俺はそれを聞くと同時に、一気にその道を駆け抜ける、空中にいる時間を極力少なくし、自分の出せる最高速で駆け抜けながら、俺に伸びてくる魔物の足を斬り落とす。

そして魔物たちの壁を超えたところにいたのは、一匹の小さな黒い狼だった。昨日の魔物と比べても明らかに小さいが、奥にいたのだからおそらくこれがボスなのであろう。

俺は全速力で走りながらそのまま剣を振るう。だが、剣には仕留めた感触はなかった。

俺は後ろを振り返ると、そこには残り1メートルほどの距離の位置で、俺に向かって飛びかかってきている先ほどの魔物がいた。

俺はとつさに伏せて避ける。俺の上を超えて飛んで行った魔物が地面に付いた瞬間に、俺は魔物の姿を見失った。

ただでさえ暗い洞窟の中、明かりは後ろで戦っているミリイたちの魔法によるもの程度、そんな中で黒い体毛のあんな小さい魔物を見つけるのは困難だ。そんなことを思っていると、こちらに向かって2匹ほどでかい狼の魔物が迫ってくる。

俺は、強化を開放してまず2匹の魔物を仕留めボスを探す。強化がかかっている今なら視力も強化されているから見つけられるだろうと思つたが、俺が見つけることができたのは、ほとんど捉えることができないほど高速で走る黒い小さな影だけであつた。

この状態でも、ほとんどとらえきれないのなら普段なら何が起つたかもわからぬままに、攻撃を受けて終わってしまっただろう。そんなことを考えた瞬間に、黒い影がこちらに迫ってくる。

俺はそれにあわせて、攻撃しようとするが当てることができずに、左腕に爪痕が残る。

「速すぎるだろ」

次第に強化の魔力が抜けて行き、魔物の影が追えなくなってくるが、こちらに向かってきているのを臆げながらに確認する。

強化のストックは残り10回分、ここで仕留めなければもう倒せないと思い、俺は今かかっている強化に重ねて、さらに10回分の強化を施した。その瞬間に先ほどまでとらえられなかった魔物の姿がはっきりと見えるようになる。そして、俺はそれに合わせて剣を振る。

黒い影は断末魔の声を上げ、2つの影となって動かなくなった。

第33話 盛り上がるのもほどほどにしておけよ

ボスを倒してから早かった、残りの魔物たちは動揺からか動きが鈍り、ノアたちの手によって、次々に狩られ物の数分で収束した。

「これが最後だな」

そう言いながら、ノアが鎌を振り下ろし、最後の一匹と思われる魔物にとどめを刺す。

「やっと終わったな」

俺は伸びをしながらそう言うが、実際仕事をしたのはボスを倒しただけで、他はみんなに任せていたのでそれほど疲れていない。

「皆、よくやってくれた。特にリユーヤ、まさかシャドーウルフを倒すとはな」

「シャドーウルフ？」

俺は首をかしげる。

「さっきお前が倒した魔物の名前だ、中級の中でも最速の分類に入るほどの速度を持つ魔物だ、大した攻撃力はないがその速さ故に奴を倒すのは至難の業だ」

俺は、そんな魔物だったなんてこと当然知るわけがなく、へーとつぶやく。

「とにかく、すげーってことだよ、喜んでけ」

といいながらジンが俺の背中をはたき、俺は前のめりになる。

俺が、前を見るとクレアがこちらを睨んでいる。

「まあ、合格点ね、次からがんばりなさい」

そう言っただけでクレアは、振り返りすぐに洞窟の出口の方へと歩きだす。

「なあ、あれはもう少し何とかならないのか？」
とジンに尋ねると、ジンは苦笑を浮かべる。

「まあ、無理だな。あいつが口悪いのは、今に始まったことじゃないし」

「あ、やっぱり？」

「うん、やっぱり」

俺はため息を吐き、出口に向けて歩き出し、先に進んでいたミリイとリタに追いつく。

「あ、二人ともおつかれー」

「お疲れ様です」

俺とジンもお疲れと返し二人に並んで歩く、ノアは一番後ろで確認しながら歩きクレアは先頭を歩いている。

「そういえば、この後ってどうするんだ？」

「基本的には、魔物の残党を探して、もういないようなら帰るだけだよー」

なるほど、それにしても残党さがしとは面倒くさいな、一匹でいる魔物など見つけられるのだろうか？

「ま、残党なんてほとんど無視だがな、軽く探していなかったらそれでおしまい」

「そんなのでいいのか？」

「別に魔物の一匹や二匹だったら、俺らでなくても余裕で倒せるからな」

そう言えば大抵の人は戦えるんだつたな、この世界じゃ。

そんなことを考えながら、歩き、洞窟を出るとすでに太陽は天高く上っており、俺たちを照らしつける、ちょうど今は正午程だろうか？

その後も適当に雑談をしながら、山を下り、宿に戻って昼飯を食べ終え、部屋へと戻る。さっきまで戦闘をしていただけに、なんだか気が抜けてしまった。

ベッドに転がり、気合のかけらもない俺に向かってジンが話しかけてくる。

「なあ、リユーヤ今から酒場でもいかねえか？」

こんな真昼間から酒とは、また何とも元気なこつたな。

「俺はいいや」

そういつて、枕をうずめる。

「そうか、みんなで打ち上げやろって話だったのに。まあ、来なくなったら来いよ」

俺はそれに対して適当に手を振って対応し、ジーンが扉を開けて出ていくのを音で確認したのを最後に、俺は眠りについた。

「あれ、寝ちまったのか」

俺重い瞼を開け、部屋の中を確認するが薄暗くなっておりよく見えない。とりあえず、俺は部屋の明かりをつけ、時計を確認する。

「5時間も経ってるのか、そういえば酒場がなんとかって言ったな」

ここにいても、やることもないし、とりあえず行ってみるか。

俺は、部屋の鍵を持って宿を出て、昨日行った酒場へと向かう。昨日行った酒場は、魔物の襲撃では壊れなかったみたいだから多分そこだろう。

酒場に近づくにつれて、次第に人々の騒がしい声が聞こえてくる、なんだか面倒なことになりそうだと思いつつも、闇夜の中、光を放つ酒場の中へと足を踏み入れ、俺は後悔する。

酒場の中はすでに戦場のようになっていた、酔った男どもが暴れまわり、喧嘩をしている者もいればそれを見て、爆笑しながら酒を飲み干すものもいる。

俺は何も見なかったことにして、店を出て行こうとすると、聞き覚えのある声が俺のことを引き留める。

「リユーヤ、やっと来たか、ほら飲めって」

そういつて、ジンがジョッキを渡してくる、俺はジョッキとジンの顔を何度も交互に見る。ジンは顔が赤くなっており、酔っているのは明らかであるが満面の笑みで俺のことを見て、さっさと飲めと無言のプレッシャーをかけてくる。

もうなんだか面倒くさくなった俺は、ジョッキの中のビールを一気に飲み干し、ジンにジョッキを返す。

「おお、いい飲みっぷりじゃん、じゃあ次つて、あれ？ 酒がないじゃねえか、ちよつと待ってるよ」

そう言つて、ジンはカウンターに向かって走り出す。

俺がそれを呆然として眺めていると、肩を叩かれ、振り向くとそこにはミリイがたっていた。

まさか、こいつまで酔ってるんじゃないよな？

「リユーヤ様、ここにいますと延々とお酒を飲むこととなりますので、ひとまずあちらへ」

ミリイが指差した先には、個室らしき場所からリタが顔をのぞかせている。俺も寝起きで酒をそんなに飲みたくはなかったのだ、とりあえずミリイの言うことを聞く。

個室中にはノアとクレアもあり、一応酒は置いてあるものの、それほど飲んでいるような感じではなかった。

「一体これは何の騒ぎだ？」

俺の問いに対して、クレアがため息をついて答える。

「あのバカが、打ち上げをしようとかつていうから来てみたら、村

の人たちまで巻き込んだの大宴会にしちゃったのよ」

ああ、あのバカがやりやがったのか。

そんなことを考えていると、個室の扉が開く。

「リユーヤ、酒持ってきたぞー」

なぜこのバカがここにいるのだろうか？

「なあ、ミリイ、ここにいたら安全なんじゃないのか？」

俺はジンのことを無視するかのように、一切ジンの方を見ずにミリイに問いかける。

「一言もそのようなことは、申し上げておりません」

「ほらリユーヤ、酒」

まいったな、ここで断るのは簡単だが、断ったところで引くだろうか？

「ジン、酒はいらないからお前が飲んでおけ」

「遠慮するなって」

ダメだこいつ、話が通じない。

「リユーヤ様、お諦めください」

俺は他の誰かに助けを求めようとするが、ノアとクレアは視線を逸らし、リタは面白がっているようにしか見えない。

結局その日俺は、酔いつぶれるまで酒を飲まされる羽目になった。

第34話 休みの日は予定があった方が楽しい

頭が痛い。俺は昨日、一体どれほど酒を飲んだのだろうか？ 正直な話、昨日の記憶がまったく無い。

そんなことを考えながら学園への帰り道を俺は歩いていた。

「役立たず二人組、早く来なさいよ」

クレアが、眉を寄せて俺とジンの事を睨むが、いくら睨まれても、これ以上早く歩けない、いや、歩きたくない。頭が締め付けられるように痛く、出来れば歩くことすら遠慮したい程なのだから、歩いているだけでもほめてもらいたいくらいだ。

今朝、俺が気だるさと頭痛を感じながらも目を覚ますと、誰かが連れてきてくれたのか、それとも、自分で帰って来たのかは解らないが、ちゃんと宿のベッドの上にいた。

部屋を見渡すと、ジンはベッドの中で寝ているが、ノアの姿が見当たらない。

とりあえず、シャワーでも浴びようと思いついて立ち上がって初めて、体のだるさと頭痛に気が付く。

それでも我慢してシャワーを浴び、浴室から出てくるとノアがベッドに腰掛けていたので、あいさつをして、状況を尋ねたところ。

俺たちは昨日の深夜まで飲んでいて、酔いつぶれて眠ってしまったのをノアがジンを、ミリイが俺を運んでくれたらしい。しかも、すでに先ほど山に入って魔物の残党も処理してきたという。何とも頭の上がない話だ。

とにもかくにも、もうすぐ学園に向けて、出発するという話だっ

たので、俺はジンをたたき起こして現在に至る。

「リユーヤ、お前、俺より飲んでないくせに俺より遅くないか？」

「馬鹿言つなよ、ほら、俺の方が速いじゃねえか」

俺はジンを後ろから追い抜き、一步前の位置を歩き始める。

「いいや、よく見るよ、お前の方が後ろにいるだろ？」

今度はジンが俺のことを追い抜き、一步リードする。

「ははは、ジンの目はおかしくなったのか？ 俺の方が前にいるじゃないか」

俺は、ジンのことを追い抜きそう言う。

「おいおい、調子に乗るのもいい加減にしろよ」

そう言って、ジンは俺のことを置いて走り出す。

「あ、この野郎」

俺も負けじと走りだし、前方を歩いていた四人を追い抜く。

「ちょっと、あんたたちさつきからうるさいわよ」

そんなクレアの言葉など無視して俺はジンを追いかけて走り、ジンは俺のことをバカにしながら必死で逃げる。

それから十数分後、二日酔いと走った疲れで、街道の脇の草むらで倒れこんでいる俺たちにクレアが罵声を投げかけ、リタが笑って

通り過ぎていった。

そんなこんなで、俺とジンを含めた六人は、日が落ちてすぐに学園へとたどり着くことができた。すでにかなりの時間がたったので、大分二日酔いはよくなったが、体には疲れがたまっており、部屋に帰るなり俺はベッドに倒れこむ。

「つかれたー」

「お疲れ様でした」

「うおっ」

俺のひとり言に対して、いつの間にか部屋に入ってきていたミリイが返してきたので、思はず声を上げてしまった。

「ミリイ頼むから、ノックくらいしてくれ」

「リユーヤ様と一緒に部屋に入ってきましたが、気が付いていなかったのですか？」

「あれ、そうだったの？」

俺は頭をかきながら、ごまかすように笑って見せる。

「もう少し、周りに気を配って生活していただけると助かります、このまえも階段で転びそうに……」

「そ、そうだミリイ、何か用があつて来たんだろ？」

ミリイの説教はいったん始まると、なかなか終わらないので早いうちに、止めないといひどい目に合う。

ミリイは、俺に説教を遮られたのが気に食わないといった顔をしていたが、少しの間をおいて話し始めた。

「昨日、リユーヤ様が酔いつぶれていた時に 그레이様から連絡がありましたので、その内容をお伝えしに来ました」

「 그레이から? 」

그레이からというと、特訓のことか? まさか、ライラのファン
の件で俺に白羽の矢が立ったから逃げるとかじゃないだろうか?

「はい、明日の早朝、実家に一旦帰るらしいのです」

「うん、そうか。気をつけて帰るように言っておくよ」

だから、特訓はできないとかそんな話だろうか?

「いえ、その際にリユーヤ様も、一緒についてきてもらいたいとい
うことで」

「俺が、一緒に帰るの? 」

「はい、そうです」

一体、何があったのかはわからないが当分は休みだし別に断る理
由もない。

「そうか分かった、明日の朝だな、用意しておくよ」

「では、そのように 그레이様に伝えておきます」

そういうともう用はないらしく、一礼して部屋を出ていき扉の鍵
を外から閉めていった。

俺は、あの合鍵をどうにかして奪えないだろうか? などと無理
なことを考えながら明日の準備を始める。

もともと、鞆というものを使わないで済む俺にとって、準備など、
ものを用意するだけの作業であり、ものの数分で終了し。俺は向こ

うでの暇な時間をつぶすために図書館に本を借りに行った。

今日、図書館で探すのは、総体魔法についての本である。いくらなんでもこのまま初級魔法と強化の重複だけでは、前者なら弱すぎて役に立たず、後者なら回数制限が厳しすぎる。そこで、中級魔法を学ぼう……と行きたいところだが、残念ながらそこまで実力はないので、下級魔法の資料を探してはどれが分かりやすそうかと、色々読んでみている。しかし、どれも難しそうな本ばかりで、読んでいて解ったことといえば、下級という割には、かなりの威力があるようで魔法での戦闘の基本的な攻撃のようだ。

もう、何冊目になるかもわからない本を下級魔法に関する本を本棚に戻したとき、俺のことを呼ぶ声が聞こえてきた。

「リユーヤさん、こんばんわ」

俺は声の主を確認するべく、声のしてきた方を向くと、そこには笑顔のライラが本を一冊両手で抱えるようにもっていた。

俺は片手を軽くあげて「おう」とあいさつをすると、ライラがこちらに歩いてきて俺が戻した本を確認する。

「下級魔法ですか？」

「ああ、色々読んでみたんだがどうもしっくりこなくて、そろそろ部屋に戻って寝ようかと思ってたところだ」

俺がそういうと、ライラは本棚を見回し少し背伸びをして一冊の本をとる。

「こちらの本はどうでしょう？」

そう言ってライラが手渡してきた本は、まだ俺は読んでいなかった。中身を確認してみると、今までのものに比べてかなり読みやすい。

「これいいな」

「よかったです、実はこの本は私が下級魔法を勉強するときに使った本でなかなか解りやすかったと記憶していましたので」

「へえー、そうなのか。ありがとな」

「どういたしまして」

そう言ってライラは笑顔を向ける、確かにこんな風に誰とでも接していたらファンクラブの一つや二つできても不思議じゃないな。

「ところで、ライラは何の本かりるんだ？」

「私はこれです」

そういって、ライラが抱えていた本を俺は受け取り表紙の文字を読んで驚く。

「上級魔法の本だよな？」

「はい、実地訓練を終えて時間もありますから、新しい上級魔法でも覚えてみようかと」

そう言っつてライラは微笑む。

上級魔法が一体どれほどのものなのか、正確にはわからないが、中級であれなのだからのものだろう、それに比べて下級を学ぼうとしている俺が、なんだか情けなく思えたことと、ライラのすごさに驚いて、俺はひきつった笑顔になる。

第35話 わかつてはいたけど、人に仕えるのって大変だな

せっかく、図書館から本を借りてきたのだが、その日は疲れがたまっていたので数ページ読んだ所で、眠ってしまった。

次の日の朝、いつも通りミリィに叩き起こされ、ミリィの荷物まで保存させられて、校門まで連れて行かれる。そこには、まだ約束の十分前だというのに、グレイとライラの姿があった。

「二人とも早いなー」

時間前に来るという、何とも殊勝な心がけに対して、俺が驚きの声を上げると、ミリィが横でため息をつく。

「約束の時間の前に来るのが、常識です」

まあ、確かにそうなのだが、俺は十分も前に行こうなどと考えたこともない。よくてギリギリ、悪ければ数分遅れてもいいか、などと考えてしまう。まあ、最近はミリィのせいで早めに行動させられるが。

俺は二人に挨拶をして、しばらく待っていると、少し大きめの車が出て来て、俺たちはそれに乗り込む。

車に乗って数分後、気になっていたことを俺は尋ねた

「そういえばなんで、かえるんだ？ しかも、俺まで連れて」「あれ、言っただけ？」

グレイはそう言ってミリイの方を向く。

「はい、理由の方は聞かされておりません」

「いやー、そうか言っただけだったか」

そう言いながら、グレイは笑って誤魔化そうとするが、俺はジト目で睨み付ける。そんな兄の様子を見かねたのか、ライラが説明を始める。

「実は建国記念式典が近々ありまして、その時にリユーヤさんに、私の付き添いを頼めないかと」

上目使い気味で申し訳なさそうに、そんなことを可愛い女の子に言われたら、断れるもんも断れないだろ。まあ、断る理由もないけどさ。

「え？ 別にかまわないけど、俺なんかが、行っただけみたいなもんなのか？」

普通、そんな式典、貴族でもない俺が出られるわけもない。

「はい、それで従者という形で、付き添って頂くのですがよろしいでしょうか」

「まあ、別に気にしないけど、なんで俺が付添いするんだ？」

「お父様とお母様に、そうしてもらいなさいと言われましたので」

ライラがそういうと、グレイが耳打ちをしってくる。

「ほら、悪い男が近寄らないようにさ」

俺はそれで納得せず、 그레이に耳打ちで尋ねる。

「なら、 그레이と一緒にいてやればいいじゃないかよ」

「ああ、それ無理、その時は許嫁と一緒にいるから」

一瞬、俺の思考が停止した。

「へ？ えーっと、その 그레이さんあなた許嫁がいられるんですか？」

「おう、後で紹介してやるな」

そういつて笑う、 그레이の顔面にめがけて保存していた本を全力で投げつけるが、受け止められる。

「この、裏切り者ー！」

「何が裏切りだよ、別にいいじゃねえか」

그레이がそう言っつて、本を投げ返してくる。以前にもこんなことがあったが、俺だつて成長しているところを見せてやるぜ、などと思気込んでみるが、結果は顔面キヤツチで終わる。

그레이はイケメンだけど、彼女とかそういうのはいないやつだと思つていたが、どうやら違つたみたいだな…… まあ、俺がライラに付き添う理由もよくわかつた。

「わかつたよ、執事でも従者でもなんでも任せとけ」

「ありがとうございます」

そう言つてライラが、笑顔を向けてくる。この笑顔に何人の男どもが犠牲になつたのだろうか、無意識なんだろうか、恐ろしい子。

レインさんの家に着き、レインさんたちに挨拶を済ませると、自室へと向かった。

「いやー、それにしてもこの部屋は広いなー、広いのは良いんだが、なぜ、俺の部屋にいるんですか、ミリイさん？」

「従者としてライラ様に付くのですから、執事としての立ち振る舞いを覚えてもらおうと思ひまして」

なぜだろう、この部屋で勉強と聞かされるとすごく気分が悪くなってくる。

「ちなみに、今回はどんなペースでの勉強になる？」

「基本的に常に勉強のほうはしていただきます、歩き方や扉の開け方他にもたくさんありますが、すべてのものを三日後の式典までに覚えていただくので、頑張ってくださいませ」

それを聞いて、俺は恐怖しながらも尋ねる。

「もしかして、今から常に執事らしい行動をしろってこと？」

「そういうことです、間違った場合は、しっかりと私が正しますのでご安心ください」

当然、俺は安心などできるわけもなく。一歩歩くたびに姿勢が悪いだの何だの文句を言われ、さすがに頭にきて反論しようとしたが、後ろで始動しているミリイの放つ気迫に素直に従うことしか出来なかった。

その日の夜、ミリイの指導からやつとのこととで解放された俺はベッドに倒れこむ。

「つかれたー」

常に、言われたことを守って行動するというのはかなりきつく、どちらかというと自由奔放な俺に取っての精神的疲労はかなりなものである。

「あ、そうだ」

俺は、借りてきた本を取り出し、読み始める。

「えーっと、水の魔法は…… あった」

下級といっても種類も威力もさまざまである、ものによってはほぼ中級の威力に等しいものから、初級の魔法に毛が生えた程度のもので。ちなみに、今から俺が学ぶのは後者だ。出来るだけ強いものを覚えておきたいのだが、当然強いものほど魔力を使う量も増えれば、その魔力の制御も難しくなるので、俺に扱えるかどうかかわらない。ならば、簡単な方から順にやっていって限界を見極めようという考えだ。

その日、おそらくもっとも簡単だと推測される魔法について俺は勉強するが、疲れていたこともあって途中で寝てしまった。

こうして式典の日まで日中は執事の、夜中は魔法の勉強をする生活が続いた。よく考えてみると俺こっちの世界来てから勉強ばかりだな。

ついに今日、建国記念式典だということで俺は今、黒のタキシードに身を包んでいる。

「意外と似合いますね」

ミリィは、まるでそんなことを思っていないかのようにお世辞を言うてくる。

「ああ、どうも」

「口調が、いつも通りになっていますよ」

「申し訳ありません」

とりあえず、何となくそれらしく見えるかな？ 程度にはふるまえるようになったが、それでも時々素が出てしまう。

「いいですか、従者として最低限、主に恥を欠かせないように気を付けて下さい」

「はい、わかりました」

どうも、このしゃべり方は堅苦しくて馴れないが、どうにかなるだろう。

その後によってきたグレイ俺のことを馬鹿にしてくるのを、丁寧に受け流し、レインさんとも挨拶を済ませる。今日行くのは後はライラだけということなので俺たちはライラのことを待つ。

「お待たせして、すみません」

そういいながら、白地に青の装飾をあしらったドレスに身を包んだライラがやってくる。別に時間は十分間に合っているのだから、気にすることもないだろう。

「では、いこうか」

レインさんの言葉に従い俺たちは、玄関へと向かう。式典にはミ
リイが付いてこないで、ここからはすべて一人でこなさなければ
ならない。俺は、そこはかとない不安を胸に、外へと出た。

第36話 演説とかつて人を眠らす魔法だよね？

俺は車を降りてすぐに、目の前の建物を見上げ固まる。白い外壁に紺色の屋根、遠くから見たとしても、その存在感はかなりのものである。

「ここって、王様の城ですよね？」

「ああ、そうだよ」

まあ、建国記念なんだから普通に考えたら王様の城でやるか。それにしても、でっけーな。いつも、レインさんの家からは見えてはいたが、実際に近くで見るとそのでかさを痛感する。

俺は、ミリイに言われたことを思い出しながら、レインさんたちの後ろを付いていく。

しばらく歩くと、城の入り口の前に衛兵が二人立っていて、一旦停止させられた。

「レイン様、申し訳ありませんが、招待状の方を確認させていただきます」

一人の衛兵が、そう言っってレインさんに近づいて来て、レインさんが一枚の紙を見せる。衛兵は紙を見た後に、こちらを一通り確認して道を開けた。

「はい、確かに確認しました、どうぞお入りください」

それに対して、レインさんたちが会釈をして進みだしたのを見て、俺も会釈をして前へと進む。

それから、城の中の無駄に豪華な廊下を、慣れた足取りでレインさんは進む。すでに何度も道を曲がっているの、どう来たかなど覚えていない。俺は歩きながら、周りの無駄に豪華な装飾などには目もくれず、ミリィに言われたことを頭の中で何度も繰り返し返す。

しばらく歩くと、レインさんが立ち止まったことに気付いて、俺も立ち止まる。

「この先が、会場だけど、私は少し国王と話をしてくるから、先に入っていてくれ」

「おう、親父任せとけ」

「わかりました、お父様」

「承りました」

俺たちがそれぞれ返事をしたのを、確認してレインさんは、歩いていき廊下の角を曲がっていった。

「じゃあ、俺たちも行くか」

そういつて、 그레이が扉を開く。

扉の向こうには、すでにかかなりの数の貴族と思われる人物たちが談話をしていた。どうやらこのパーティーは立食形式のようで、座るための椅子などはほとんど用意されていない。

「じゃあ、俺はちょっとミシエル探してくるから。リユーヤ、ライラのこと宜しく」

「かしこまりました」

俺はそう言つて、頭を下げる。おそらく、ミシエルというのは、

グレイの許嫁の名前なのだろう。

俺は、人ごみの奥に消えていくグレイを見送って、ライラの方に向き直る。

「リユーヤさん、お願いしますね」

「お任せください」

俺はそう言っ、ライラの後ろについて歩く。歩きながら周りの様子を見てみると、大抵の人が何かの飲み物のグラスを持っている。

「ライラ様、何か飲み物をお持ち致します」

「はい、お願いします」

俺は近くのテーブルに置いてあったスパークリングワインと普通の白ワインの入った二つのグラスを保存して、ライラの元へと戻ろうとする。そこでライラの方を見ると、ライラがだれか男の人と話していたので、邪魔にならないように遠くで話が終わるのを待つ。

こうやって見回すと、太っていて金や権力の亡者のような、いわゆる悪徳貴族のような人はいない。やはり、人々の上に立つものとして見た目というのは大事なのだろう。

そんなことを思っていると、ライラが先ほどの男性と話を終えたのか、男性は会釈をして何処かに行った。

「ライラ様、お飲み物です」

そう言っ、俺はスパークリングワインを取り出し、ライラに手渡す。

「ありがとうございます」

俺は、軽く礼をしてライラの後ろに控える。

その後、ライラは何人かの人と話をし、俺はそれを後ろで見守るだけであった。歩きながら見ていたが、耳がリタのようになっている人も見受けられたので、国外からもそれなりの人数が来ているのだろう。グレイも探してみたのだが、見つけることができなかった。

しばらくライラの後ろについて会場を回っていると、突如として会場中に音楽が響き渡り、男性の声が聞こえてくる。

「本日は、我がコーランド王国の建国記念式典へとお越しいただき、誠に御礼申し上げます」

俺が声のしてきた方を向くとそこには金色の髪と瞳を持った、恐らくは四十歳ほどの男性がいた。髪 of 長さは襟にしかかる程度で、瞳は猛禽類のそれを思わせる鋭さをもっている。服装は青のマントの襟元に白い毛皮をあしらったものを羽織り、そのほかの部分は白を基調とした中に赤や金を取り入れた服装をしている。その風格からして、一目見て国王だと分かる。確か、名前も覚えたはずだったが、覚えにない。

そんな国王様がそうやって礼をし、それに対して周りの人たちも返礼したので俺もそれに合わせる。

そこからが苦痛だった。国王が、この国の成り立ちやら国情などについて語るのだが、俺にとってこの手の演説は鬼門である。俺は出そうになるあくびをかみ殺して、早く終われと必死の形相で国王のことは見つめるが、一向に終わる気配がない。

やっとのことで終わった時には、俺の精神はすでに削るとられて

いた。そんな俺の様子に気が付いたのか、ライラが話しかけてくる。

「大丈夫ですか？」

正直な話もう帰りたいが、ここで弱音を吐くのもかつこ悪いと思
い、強がってみせる。

「はい、問題ありません」

どうせ、もうこれで終わりだろうと高を括っていた俺だが、まさ
かの事実がライラから告げられた。

「この後、会場を移して、舞踏会もありますけど。つらいようでは
たら……」

「いえ、大丈夫です」

確かにつらいかもしれないが、ここでやめたら男が廃ると思い、
ライラの言葉を遮る。

「わかりました。でも、その前にお兄様を探すのを手伝ってくださ
い」

そう言つて、微笑むライラに、俺はうやうやしく礼をする。

グレイを探すと言つても、結構な数の人がいるのでそんなに簡単
な話じゃない。

それから、数分間探しているとグレイらしき、茶髪の男性を見つ
ける。

「ライラ様、あちらの方がグレイ様ではありませんか？」

俺がそう言っただけで記した方向をライラが確認する。

「多分、そうだと思います。行ってみましょう」

その人物に近づくに連れて、疑問は確信へと変わった。それと同時に、隣にいる女性が気にかかり始める。

「グレイお兄様」

ライラがグレイに向かって後ろから話しかけると、グレイと隣の女性が振り向く。

「お、ライラにリユーヤ」

「あら、ライラちゃん久しぶり」

「ミシエルさん、お久しぶりです」

ライラとミシエルと呼ばれた女性がお互いに会釈をする。ミシエルと呼ばれた女性はウェーブのかかった金色のロングヘア、どちらかというと吊り目気味な琥珀色の目、その体つき、雰囲気共に大人といった感じである。背は俺よりも少し低いくらいだろうか？

「そうだ、リユーヤ紹介するな。こいつが俺の許嫁のミシエル」

「どうも、ミシエル・フェルディナント・ウェイ・コーランドです」

そう言って、ミシエルさんは俺に対して礼をする。

「リユーヤ・ハシモトです」

俺もそういいながら、礼をするがそこでミシエルさんの名前に違

和感を覚える。

あれ？ たしかこの名前って……

第37話 緑色は目に優しい、説明はめんどいから無しで

部屋の中には、優雅な音楽が流れそれに合わせて人々が踊っている。俺はそんな様子を、壁際から眺めていた。そんな、俺にグレイが近づいてくる。

「おう、ちゃんとやってるか？」

「はい。ですが、どなたに気を付ければ良いか判りかねまして」

俺がそういうと、グレイは周りを見渡す。

「うーんと、まずあれはライラのファンで、あいつもだな」

そう言っで次々に、グレイは人を示していくが、軽く十人は超える人数がいた。

「では、どのようにすれば？」

「ん、ライラが困ってる様だったら、助けに行ってくれ」

困ってるようだったらって、どうやって判断すればいいのだろうか？

「グレイ、ここにいたんですね」

今までどこかに行っていたのであろう、ミシエルさんがやって来た。

「おう、戻ってきたか。じゃあ、リユーヤあとはよろしく」

そう言つて、グレイはミシエルさんを連れて行つてしまった。
それにしても、グレイの許嫁がこの国の王女様だとは、驚きである。

アラン・フェルディナント・ウェイ・コーランド、第126代コーランド王国当主にして現国王。その国王様の長女が、ミシエル・フェルディナント・ウェイ・コーランドつまり、グレイの許嫁である。最近習つたことだったが、さっきまで全く思い出せなかった。

俺が、その後もライラの様子を確認していると、突然後ろから聞きなれた声が聞こえてくる。

「星無し、あんたこんなところで何やってるの？」

俺が振り返るとそこには、赤いドレスに身を包んだクレアが立っていた。髪も赤、目も赤、ドレスも赤、もうここまでくるといつそのこと清々しいが、できればもっと目に優しい色で揃えてもらいたい。

「これはこれはクレア様、いつもお世話になっております」

「その話し方、気持ち悪いわよ」

俺だつて別にこんな口調したいわけではないが、ミリイにばれたらと思うとどうすることもできない。

そんなことを思っていると、クレアが俺の服を見て何かに気付いたように口を開く。

「その家紋……なるほど、そういうことだったのね」

「どうかしましたか？」

「何であんたに、ミリイみたいな良い従者が付いてるのがかわかったのよ。まさかグランツ家の客人だったなんてね」

そう言って、クレアは俺のカフスボタンを指さす。俺がカフスボタンを見ると、そこには獅子とその背後に斜めに交差したハルバートが描かれていた。恐らくはこれがレインさんたちの家、詰まる所のグランツ家の家紋なのだろうが、それが俺にミリイが付いているのと同じ関係があるのだろうか？

「申し訳ありませんが、少々解りかねます」

「だから、あんたが三大貴族のところの客人だから、ミリイが付いてるって言ってるのよ」

三大貴族？ たしか、王族に次ぐ権力を持つてて、場合によっては君命ですら無効にできるとかなんとかって言うあの、三大貴族？

「マジか？」

ついつい、素の口調で話してしまった。

「本当よ、あんた知らなかったの？」

クレアは、呆れたと言わんばかりの雰囲気ですう言い放つ。俺はただただ首を縦に振る。三大貴族っていう存在自体は勉強したが、その一つがグランツ家だったとは知らなかった。

しかし、クレアもここにいてことは、こいつも貴族だったのか。

そんなことを考えながら、ライラの様子を確認すると。いつの間にか、三人の男に囲まれておろおろしている。

「クレア様、申し訳ありませんが私はここで」

俺はクレアに会釈をして、ライラの方へと歩きだす。

ライラの近くまで来ると、男たちの声が聞こえてきた。

「ライラさんどうか、自分と踊ってください」

「いえ、こいつではなく、俺と」

「ライラさん、こんな二人は放っておいて、俺と」

そう言つて、ライラに手を差し伸べながら、男たちはお互いに火花を散らす。

そんな中、どうすればいいのかわからずライラは、困った顔をしている。

なんで男どもが、こんなに焦るかのようにライラのもとに集まったのかを渡されていた懐中時計を確認して理解する。もうすぐ舞踏会も終わり、つまり次の一曲がラストチャンスなのだろう。だが逆にもう舞踏会が終わるのならば、こっちにだって手はある。

「ライラ様」

俺が、ライラのことを呼ぶとライラだけでなく、男たちまで俺のことを見てくる。

俺は男たちに聞こえぬように、ライラに耳打ちをする。

「ここは俺がなんとかするから」

俺がそういうと、ライラはうなずいたので、俺は男たちとライラの間に割って入る。

「申し訳ありませんが、旦那様からライラ様を呼ぶように言われま

したので申し訳ありませんが」

男たちも三大貴族の当主の名前を出されたらどうする事も出来ないように、おとなしく引き下がった。後は、時間まで会場の外で適当に時間をつぶせば完璧だと思ったのだが。よく見るとライラのファンたちの目が光っていて、とても会場の外なんかに出られるような状態じゃない。

まだ、やったことはないけどあれでも試してみるか。

「ライラ様こちらへ」

俺はそう言っつて、ライラに出口近くの人ごみの方へと進ませながら、ファンたちの位置を確認する。そして、ファンたちから完全に見えず、それでいて出口に近い位置で俺は、行動を起こす。

俺は、ライラを保存した。

生物、特に人間を保存する場合は、その人という情報も同時に保存するので魔力の消費が激しいらしい。おそらく、もって数秒だが、それだけの時間があれば廊下までは出られる。俺は人ごみを早足で抜け、廊下に出ると同時にライラを目の前に放出する。

「あれ、私なんでこんなところに？」

ライラは、いったい何が起こったのかといった具合で、周りを見ている。

「ちょっとした間、保存させて運ばせてもらった」

まあ、もう魔力がないから次はないが、どうせ舞踏会も終わるんだから関係ない。とりあえず、魔力がほとんどなくなったことによる倦怠感が俺を襲う。しかも急激に魔力が減ったせいか、かなり怠い。

「そうだったんですか。ありがとうございます、助かりました」

そう言って微笑む、ライラに俺は、だるそうに手を挙げて答えることしかできなかった。

その後、音楽がやむのを確認してから会場に戻り、レインさんたちと合流して帰路へとついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9118w/>

異世界で過ごす日々

2012年1月10日21時16分発行